中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第17回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって 1

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社(者)一覧 2

2015年度中国日本商会役員名簿 3

2015年度社会貢献委員会委員名簿 5

2015年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿 6

張孝萍団長挨拶 7

主催、共催団体の概要 8

第17回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団　団員名簿 9

第17回訪日ホームステイ受け入れリスト 10

第17回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程 11

第17回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト 12

＜訪日記録＞

JAL羽田整備場 (11/24)/担当:北京師範大学 15

オムロン京都太陽工場 (11/25)/担当:北京大学 19

同志社大学 (11/26)/担当:北京大学 22

電源開発磯子火力発電所 (11/27)/担当:北京理工大学 24

法政大学 (11/27)/担当:北京師範大学 27

三井住友銀行本店 (11/30)/担当:中央財経大学 30

住友商事本社 (11/30)/担当:北京外国語大学 32

ニューオータニ(エコセンター)(12/1)/担当:中央音楽学院 35

学生たちの感想文から 38

学生たちの観た日本 59

学生たちの撮った写真 78

第17回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日活動メディア報道リスト(中国語のみ) ..... ❶

第17回中国大学生「走近日企・感受日本」
訪日団報告書の刊行にあたって

本報告書は、「走近日企・感受日本」事業の第2弾第7回（通算第17回）訪日団の報告書です。

本事業は、中国人大学生を訪日視察に招待派遣するもので、中国日本商会が会員からの寄付金を原資として、2007年から年に2回実施してきています。今回派遣した17回までで29大学533名の学生に参加をいただきました。

日中関係は、近年、国交正常化後でもっとも厳しい時期を過ごしましたが、1年前の北京でのAPEC会議以降、首脳会談や各界要路の相互訪問が活発に行われ、特に経済関係は大きく改善の道筋が見えるようになりました。

また、日本を訪れる中国人は1年間に空前の500万人に達するほどになっています。

このように人的往来が盛んになる中、将来の中国を担う若者たちに焦点を当て、より深く両国民の相互理解が進むよう充実した交流プログラムを盛り込んだ本派遣事業が今回も成功裏に終了したことを心から喜んでおります。

さて、第17回は、2015年11月24日から12月1日までの8日間、北京大学、北京師範大学、北京理工大学、北京外国語大学、中央音楽学院に中日交流活動ボランティア枠として中央財経大学を加えた6大学から選抜した35名を日本に派遣いたしました。

視察企業は、日本航空羽田整備場（東京）、オムロン太陽工場（京都）、電源開発磯子火力発電所（神奈川）、三井住友銀行（東京）、住友商事（東京）、ホテルニューオータニエコセンター（東京）の6社。この他、同志社大学における日本人大学生との交流、法政大学・王敏教授による講演の聴講、中国大使館の訪問、日比谷松本楼の視察、一泊二日のホームステイ体験など多岐にわたるプログラムを組みました。ホームステイの受入れに協力いただいた企業は17社（アルプス電気、伊藤忠商事、キヤノン、JTB、新日鐵住金、住友商事、全日空、双日、大陽日酸、田辺三菱製薬、テルモ、トヨタ自動車、日本航空、丸紅、みずほ銀行、三井物産、三菱商事）にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の多大なる協力と貢献のもとに実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会にも全面的な協力をいただくとともに、訪日団の受け入れや本報告書の編集には、一般財団法人日中経済協会に多大なるご尽力をいただいております。加えて、寄付金の管理は、中国側では中国友好和平発展基金会、日本側では公益社団法人企業市民協議会（CBCC）にご協力をいただいております。改めて、本事業実施にご支援、ご尽力をいただいたすべての関係者に厚くお礼を申しあげます。

本事業が日中相互の国民レベルでの理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに勝る喜びはありません。

中国日本商会 会長 田中一紹

2015年12月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」
寄付金申込社（者）一覧

【寄付金】750万円

1	アサヒグループホールディングス株式会社
2	伊藤忠（中国）集団有限公司
3	新日鐵住金株式会社
4	住友商事（中国）有限公司
5	全日本空輸株式会社
6	東芝（中国）有限公司
7	トヨタ自動車（中国）投資有限公司
8	日本航空株式会社
9	日立（中国）有限公司
10	丸紅株式会社 丸紅（中国）有限公司
11	株式会社みずほコーポレート銀行
12	三井物産株式会社
13	三菱商事株式会社
14	三菱電機（中国）有限公司
15	三菱東京 UFJ 銀行（中国）有限公司

【寄付金】350万円以上～750万円未満

1	日本電気株式会社
2	キヤノン（中国）有限公司
3	住友化学投資（中国）有限公司
4	ソニー（中国）有限公司
5	三井住友銀行（中国）有限公司

【寄付金】100万円以上～350万円未満

1	あいおいニッセイ同和損保株式会社
2	旭化成株式会社
3	旭硝子（中国）投資有限公司
4	アルプス（中国）有限公司
5	岩谷産業株式会社
6	日本たばこ産業株式会社
7	日本郵船株式会社
8	NTT グループ
9	JTB 新紀元国際旅行社有限公司
10	JX日鉱日石エネルギー株式会社
11	双日株式会社
12	第一生命株式会社
13	株式会社電通
14	東京海上日動火災保険株式会社 東京海上日動火災保険（中国）有限公司
15	日揮株式会社
16	日産（中国）投資有限公司
17	野村證券株式会社
18	三井化学株式会社
19	三井住友海上火災保険株式会社 三井住友海上火災保険（中国）有限公司
20	三井住友信託銀行
21	三菱ケミカルホールディングス株式会社
22	三菱重工業（中国）有限公司

【寄付金】10万円以上～100万円未満

1	株式会社 IHI
2	アルパイン（中国）有限公司
3	株式会社荏原製作所
4	エプソン（中国）有限公司
5	華昇富士達電梯有限公司
6	住金物産株式会社
7	住友生命保険相互会社
8	ソニー生命保険株式会社
9	大和証券株式会社
10	宝酒造株式会社
11	電源開発株式会社
12	東工物産貿易有限公司
13	東曹達（上海）貿易有限公司
14	トヨタモーターファイナンスチャイナ
15	日本生命保険相互会社
16	テルモ（中国）投資有限公司
17	日本農林中央金庫有限公司
18	ハウス食品株式会社
19	日立高新技術（上海）国際貿易有限公司
20	株式会社ブリヂストン
21	北京丘比食品有限公司
22	三井不動産諮詢（北京）有限公司
23	三菱マテリアル株式会社
24	三菱 UFJ 証券有限公司
25	三菱 UFJ 信託銀行
26	明治安田生命保険相互会社
27	明宝工程塑料商貿（上海）有限公司
28	矢崎（中国）投資有限公司
29	理光軟件研究所（北京）有限公司
30	株式会社ワコールホールディングス
31	成川　育代（個人会員）
32	柳田　洋（個人会員）

2015年度中国日本商会役員一覧

2016年1月度現在

	商会役職	氏　名	会社名	役職
1	会長	田中　一紹	丸紅	常務執行役員　中国総代表
2	副会長	杉浦　康誉	アサヒグループホールディングス	常務執行役員　中国総代表
3	副会長	上田　明裕	伊藤忠	常務執行役員　東アジア総代表
4	副会長	小澤　秀樹	キヤノン	専務取締役　董事長
5	副会長	西浦　新	新日鐵住金	常務執行役員　中国総代表　北京事務所長
6	副会長	井上　弘毅	住友商事	常務執行役員　東アジア総代表
7	副会長	栗田　伸樹	ソニー	グループ役員　董事長＆総裁
8	副会長	豊原　正恭	東芝	執行役上席常務　中国総代表
9	副会長	大西　弘致	トヨタ自動車	専務役員　中国本部長
10	副会長	篠田　邦彦	日中経済協会	北京事務所　所長
11	副会長	江利川 宗光	日本航空	執行役員　中国総代表　北京支店長
12	副会長	田端　祥久	日本貿易振興機構	北京事務所　所長
13	副会長	小久保 憲一	日立製作所	執行役常務　中国総代表
14	副会長	網野　良一	みずほ銀行（中国）	董事長
15	副会長	澤田　眞治郎	三井物産	常務執行役員　中国総代表
16	副会長	松井　俊一	三菱商事	常務執行役員　東アジア統括
17	副会長	柳岡　広和	三菱東京UFJ銀行（中国）	董事長
18	理事	亀倉　隆志	岩谷産業	執行役員　中国総代表
19	理事	後藤　政郎	双日	常務執行役員　中国総代表
20	理事	近藤　隆弘	豊田通商	東アジア総代表　常務執行役員
21	理事	田中　健二	阪和商貿	董事長　総経理
22	理事	陶　履徳	日鉄住金物産	北京事務所　所長
23	理事	青山　傑	コスモ石油	北京事務所　首席代表
24	理事	井上　貴雄	荏原機械（中国）	董事長
25	理事	市川　孝	クボタ	北京事務所　首席代表
26	理事	権田　昌二	JXエネルギー	執行役員　中国総代表　北京事務所長
27	理事	明石　宏二郎	東京電力	北京代表処　首席代表
28	理事	劉　暁峰	日揮	北京事務所　所長
29	理事	石井　善之	三菱重工業	執行役員　中国総代表
30	理事	岡安　明彦	アルプス(中国)	総経理
31	理事	日下　清文	NEC（中国）	執行役員　総裁
32	理事	和田　悟	NTT	中国総代表
33	理事	堂園　憲治	NTTコミュニケーションズ（中国）	北京分公司　総経理
34	理事	今村　浩	NTTドコモ	北京事務所　所長

35	理事	稲葉　雅人	NTTデータ	執行役員　中国総代表
36	理事	後藤　雄次	京瓷(中国)商貿	董事・総経理
37	理事	大澤　英俊	パナソニックチャイナ	常務役員　中国・北東アジア総代表
38	理事	北野　滋	富士通(中国)	総経理
39	理事	桜井　博之	マルチメディア振興センター	北京代表処　首席代表
40	理事	久木田　崇彰	三菱電機	常務執行役　中国総代表
41	理事	高橋　琢也	旭化成	北京事務所　首席代表
42	理事	西山　寛	アステラス製薬（中国）	総経理　特別顧問
43	理事	中山　泰一	資生堂(中国)投資	技術部　部長
44	理事	西　広信	住友化学投資（中国）	総経理
45	理事	陳　偉東	日健中外科技(北京)	総経理
46	理事	三村　孝仁	テルモ	専務執行役員　中国総代表
47	理事	寺師　啓	東レ	北京事務所　所長
48	理事	本田　和秀	凸版印刷	北京事務所　首席代表
49	理事	福山　裕二	三井化学	常務理事　中国総代表
50	理事	瀬川　拓	三菱ケミカルホールディングス	執行役員　中国総代表
51	理事	趙　克非	第一生命保険	北京事務所　首席代表
52	理事	和田　健治	日本銀行	北京事務所　首席代表
53	理事	新居　経治	日本財産保険（中国）	総経理
54	理事	川端　良彦	三井住友銀行（中国）	北京支店長
55	理事	永田　哲也	三菱UFJ証券ホールディングス	中国総支配人
56	理事	陳　志成	三菱UFJ信託銀行	北京事務所　首席代表
57	理事	阿部　信一	全日本空輸	執行役員　中国総代表　北京・天津支店長
58	理事	松尾　純利	日通国際物流(中国)	社長
59	理事	磯田　裕治	日本郵船	経営委員 中国総代表
60	理事	三枝　富博	イトーヨーカ堂	常務執行役員　中国総代表
61	理事	高羽　人志	JTB	中国総代表　董事長
62	理事	谷口　利英	全日空国際旅行社	総経理
63	理事	高橋　修三	長富宮中心	常務副総経理　ホテル総支配人
64	理事	長崎　之保	北京電通広告	董事　総経理
65	理事	松田　良次	北京発展大厦	董事　総経理
66	理事	田淵　真次	日中経済貿易センター	専務理事　北京事務所長
67	理事	中下　裕三	日本国際貿易促進協会	北京事務所　中国総代表
68	理事	萩原　徹	国誉家具（中国）	総経理
69	理事	越智　博通	北京陸通印刷	董事長
70	理事	水谷　彰伸	三井住友海上火災保険（中国）	総経理
71	理事	林田　哲也	電通テック（北京）	総経理代理
72	理事	山洞　正一	北京ビール朝日	総経理
73	監事	原井　武志	監査法人トーマツ	パートナー
74	監事	麻生　憲一	国際協力銀行	首席代表

2015年度社会貢献委員会委員名簿

	氏　名　（会社名・役職）
社会貢献委員長	松井　俊一　（三菱商事　常務執行役員　東アジア統括）
委員	杉浦　康誉　（アサヒグループホールディングス　常務執行役員　中国総代表）
委員	上田　明裕　（伊藤忠　常務執行役員　東アジア総代表）
委員	小澤　秀樹　（キヤノン　専務取締役　董事長）
委員	西浦　新　（新日鐵住金　常務執行役員　中国総代表　北京事務所長）
委員	井上　弘毅　（住友商事　常務執行役員　東アジア総代表）
委員	栗田　伸樹　（ソニーグループ役員　ソニー（中国）董事長・総裁）
委員	豊原　正恭　（東芝　執行役上席常務　中国総代表）
委員	大西　弘致　（トヨタ自動車　専務役員、トヨタ自動車（中国）投資　董事長）
委員	篠田　邦彦　（日中経済協会　北京事務所　所長）
委員	江利川　宗光　（日本航空　執行役員　中国総代表　北京支店長）
委員	田端　祥久　（日本貿易振興機構　北京事務所　所長）
委員	小久保　憲一　（日立製作所　執行役常務　中国総代表）
委員	田中　一紹　（丸紅　常務執行役員　中国総代表）
委員	網野　良一　（みずほ銀行（中国）　董事長）
委員	澤田　眞治郎　（三井物産　常務執行役員　中国総代表）
委員	柳岡　広和　（三菱東京UFJ銀行（中国）　董事長）
委員	阿部　信一　（全日本空輸　執行役員　中国総代表　北京・天津支店長）
委員	石毛　二郎　（交通公社新紀元国際旅行社　董事　総経理）

2015年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	松井　俊一	三菱商事　常務執行役員　東アジア統括
【WG座長】	篠田　邦彦	日中経済協会　所長
アサヒグループホールディングス㈱	飯塚　喜美子	行政局主任
伊藤忠(中国)集団有限公司	石津　顕太郎	中国人事・総務部
キヤノン(中国)有限公司	小林　宏樹	コーポレートコミュニケーション戦略本部高級経理
新日鐵住金㈱　北京事務所	長南　隆	代表
交通公社新紀元国際旅行社有限公司	石毛　二郎	董事　総経理
住友商事(中国)有限公司	杉本　亮	人事・総務・法務・ITグループ　人事担当部長
	米　健	総代表付
全日本空輸株式会社	新井　哲朗	銷售部
東芝（中国）有限公司	東口　雄一郎	総裁室　室長
トヨタ自動車(中国)投資有限公司	栗田　弘毅	渉外部主査
(財)日中経済協会	高見澤　学	副所長
日本航空株式会社	藤井　智之	営業部　マネージャー
日本貿易振興機構　北京センター	島田　英樹	進出企業支援センター　センター長
日立（中国）有限公司	宮田　剛志	信息資源本部　公共関係部　副総経理
丸紅㈱　北京事務所	松園　大	中国総代表助理
	栗間　涼	中国総代表業務助理
みずほ銀行（中国）有限公司　北京支店	林　彦伯	経理
三井物産（中国）有限公司	佐々木　有司	業務部　部長
三菱商事（中国）有限公司	石　薇	総経理室（兼）広報・CSR担当
三菱電機（中国）有限公司	原　正英	副総経理
三菱東京UFJ銀行（中国）　北京支店	多田　修	企画部　上席調査役
【オブザーバー】	名子　学	日本大使館　広報文化センター　書記官
【オブザーバー】	柴戸　ひとみ	日本大使館　経済部　書記官
【訪日中のアテンド等】	横山　勝明	日中経済協会（東京）　参与

第17回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団報告書
団長挨拶

2015年11月24日から12月1日にかけて、第17回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団一行40名は、日本において8日間の訪問を行いました。我々代表団は中国日本商会ならびに日中経済協会のご協力、そして各企業や学校など関係各位のご支援の下、日本において有意義な8日間を過ごし、今回の訪問を成功裏に終えることができました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

今回の代表団は北京大学、北京師範大学、北京理工大学、北京外国語大学、中央音楽学院そして中央財経大学の優秀な学生により組織されています。訪日期間中、代表団は日本航空、オムロン、電源開発、三井住友銀行、住友商事、ホテルニューオータニの6企業を訪問、また同志社大学の同世代の学生と交流をし、法政大学では著名な教授の講演を拝聴する機会を得ました。そして金閣寺や熱海温泉等では日本の伝統文化と自然景観を体験し、嵐山や松本楼では中国の偉人の足跡を辿り、中華人民共和国駐日本国大使館では中日関係の歴史と現状を学び、さらには日本の一般家庭を舞台に貴重なホームステイ体験をいたしました。団員らは充実したこの8日間において、細かな観察を通して様々な角度から日本を理解し、また日本の多くの人々と深い友情を育み、さらには中国の若者の友好的な姿を日本の人々に示すことができました。

中日両国は一衣帯水の間柄であり、地理的にも近く、文化にも共通点があります。両国は、和すれば双方に利益をもたらし、争えば双方の利益を損なうことは、これまでの歴史が幾度も証明しています。国の交わりは民の親しさにあります。中日の友好関係の発展には、両国の人々特に若い世代の理解と積極的な関わりが求められます。中日両国の若者らが手を携え、共に学び進歩することで、中日友好交流における架け橋となり、両国の発展に貢献していくことを心から願っております。また中日友好協会としましても、日本の各界の皆様と共に両国の民間および草の根交流をより活発化し、両国の人々の相互理解と友情を促進するなど、中日関係のさらなる発展に向けた努力をしてまいります。

最後に、今回の代表団の訪日に際し多大なご支援を頂いた中国日本商会ならびに日中経済協会、そして関係者の皆様に、改めまして感謝申し上げます。

第17回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団　団長
中日友好協会政治交流部部長
張孝萍

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2015年12月末日現在、市内法人会員630社、市外法人会員54社、個人会員16名、賛助会員10名の合計710社（名）を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

一般財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第17回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

	姓名	性別	所属		専攻
団　長	張孝萍	女	中国日本友好協会	政治交流部副部長	
団　員	邵典	女	北京大学	信息科学技術学院	スマート科学・技術
団　員	劉益瀚	男	北京大学	理学院心理学系	心理学
団　員	邢仕傑	男	北京大学	化学・分子工程学院	化学
団　員	曽瑩	女	北京大学	元培学院	心理学
団　員	馬洪林	男	北京大学	数学科学学院	数学
団　員	郭家棟	男	北京大学	元培学院	心理学
団　員	王蓉	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日本語
団　員	王言	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日本語
団　員	楊金鳳	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日本語
団　員	臧暁慧	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日本語
団　員	朴美陽	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日本語
団　員	刁愛敏	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日本語
団　員	高健	男	北京理工大学	信息・電子学院	電子科学・技術
団　員	李緒嘉	男	北京理工大学	機械・車両学院	機械工学
団　員	杜奕聡	女	北京理工大学	自動化学院	オートメーション化
団　員	蔡子孺	男	北京理工大学	信息・電子学院	電子科学・技術
団　員	平安	男	北京理工大学	機械・車両学院	機械工学
団　員	趙雨涵	男	北京理工大学	自動化学院	オートメーション化
団　員	劉南星	男	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団　員	潘向茹	女	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団　員	陳鑫	男	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団　員	劉思陽	女	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団　員	崔正佳	女	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団　員	賈子赫	男	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団　員	孫詩博	男	中央音楽学院	声楽歌劇系	テナー（テノール）
団　員	韓天雅	女	中央音楽学院	民楽系	琴
団　員	祝紅	女	中央音楽学院	民楽系	二胡
団　員	朱曈曈	女	中央音楽学院	鋼琴系	ピアノ
団　員	劉書辰	女	中央音楽学院	管弦系	ビオラ
団　員	宋佳音	女	中央財経大学	外国語学院	日本語（財経分野）
団　員	車佳寧	女	中央財経大学	外国語学院	日本語（財経分野）
団　員	逯黛妮	女	中央財経大学	外国語学院	日本語（財経分野）
団　員	楊敏媛	女	中央財経大学	外国語学院	日本語（財経分野）
団　員	粟鳴飛	男	中央財経大学	外国語学院	日本語（財経分野）
団　員	高鵬崢	女	中央財経大学	外国語学院	日本語（財経分野）
団員(引率教員)	武玉紅	女	北京師範大学	外国語言文学学院	党副書記
団員(引率教員)	殷悦	女	北京外国語大学	日語系	総支書記、副主任
団員(事務局)	王麟	男	中国日本友好協会	都市・経済交流部幹部	
団員(事務局)	安昕	女	中国友好和平発展基金	職員	

第17回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日　付	日　程	宿　泊
1	11/24 （火）	08:25　北京→12:45　羽田　（JL20便） 14:00　**●企業訪問① JALスカイミュージアム見学** 16:30　羽田→17:35伊丹　（JL127便） 伊丹→大阪市内へ移動　夕食 ホテル着	ホテルニューオータニ 大阪 大阪市中央区城見 １－４－１
2	11/25 （水）	8:30　ホテル発 午前　★ソフト文化視察①　金閣寺、嵐山（周恩来記念碑） 昼食 14:30～16:30　**●企業訪問② オムロン京都太陽工場** 17:30～18:30　夕食 20:00　ホテル着	ホテルニューオータニ 大阪
3	11/26 （木）	8:00　ホテル発 9:30～14:00　**◎大学交流① 同志社大学　（含む懇親会）** 14:00～16:00　**◎大学交流① 同志社大学学園祭見学** **16:56 京都→19:01 熱海　ひかり476　（新幹線体験）** 熱海駅着後　ホテルへ移動 19:20　熱海温泉着 19:30～到着後　**すぐ宴会　（温泉旅館内にて和食会席料理の体験）** **★宴会終了後温泉体験**	熱海温泉 熱海後楽園ホテル タワー館 静岡県熱海市和 田浜南町 １０－１
4	11/27 （金）	8:00　ホテル発 10:30～12:00　**●企業訪問③ 電源開発磯子発電所** 昼食 14: 30～20:00　**◎大学交流　②法政大学　（含む懇親会,16:00～18:30 秋葉原視察）** ホテル着	東京 ホテルニューオータニ 東京都千代田区紀尾 井町 ４－１
5	11/28 （土）	終日　**ホームステイ**	学生：ホームステイ 引率者：ホテルニュー オータニ
6	11/29 （日）	夕方までホームスティ 夕方　ホテル集合、東京都内自由行動	東京 ホテルニューオータニ
7	11/30 （月）	8:30　ホテル発 9:30～11:30　**●企業訪問④ 三井住友銀行本店** 12:00～13:30　**★ソフト文化視察②日比谷松本楼（含む昼食）** 14:00～15:30　**●中国大使館訪問** 16:30～19:30　**●企業訪問⑤　住友商事本社　（含む懇親会）** 20:00　ホテル着	東京 ホテルニューオータニ
8	12/1 （火）	9:30～11:30　**●企業訪問⑥　ホテルニューオータニ　エコ視察** 12:00～13:45　**歓送会　（ホテルニューオータニ）** ホテル発　羽田空港へ移動 羽田空港着 **17：20羽田→20：30北京　（JL25便）** 20:30　北京首都国際空港着　（到着後、自由解散）	

第17回中国大学生「走近日企･感受日本」訪日団視察先出席者リスト

1. 日本航空 (11月24日)

柴田　裕史　　東京空港支店　国際部　部長
椎橋　壽太郎　国際提携部　中国室　課長
隋　千秋　　国際提携部　中国室　課長補佐
加藤　智也　　コーポレートブランド推進部　工場見学担当

2. オムロン京都太陽 (11月25日)

用田　竹司　　企画部　経営企画グループ　グループリーダー
荒井　裕晃　　企画部　経営企画グループ

3. 同志社大学 (11月26日)

八木　匡　　経済学部　教授
李　長波　　日本語･日本文化教育センター　准教授
横井　和彦　　経済学部　教授
福島　聡　　経済学部･経済学研究科事務室　教務係長
森山　明日香　経済学部･経済学研究科事務室
尾崎　ばねっさ　経済学部･経済学研究科事務室
※同志社大学生55名

村上　公伸　　京都府　国際課　課長
山口　紳　　京都府　国際課　主事

斉藤健一　　コーディネーター
吉田浄　　コーディネーター
鄧振英　　通訳担当

4. 電源開発 (11月27日)

井川　太　　国際業務部　総括マネジャー
木村　忠広　　国際業務部　上席課長
浅野　勲　　磯子火力発電所　館長

5. 法政大学 (11月27日)

王　敏　　国際日本学研究所　教授
貝塚　一郎　　国際日本学研究所　課長
斉藤　健一　　コーディネーター
吉田　浄　　コーディネーター

6. 三井住友銀行 (11月30日)

都留　茂　　理事　国際統括部　アジア戦略企画室長
今川　真一郎　グローバル・アドバイザリー部　部長
伊藤　貴夫　グローバル・アドバイザリー部　部長
櫻井　忠朗　国際統括部　上席推進役
見並　晶子　国際統括部　部長代理補
楊　永健　グローバル・アドバイザリー部
陳　昱良　国際統括部
金　秋霞　国際統括部
黒澤　千波　国際統括部

7. 日比谷　松本楼(11月30日)

吉田　俊秀　専務取締役
今井　康雄　営業部　部長

8. 中国大使館（11月30日）

汪　婉　大使夫人　友好交流部　参事官
孟　素萍　友好交流部　一等書記官
孫　永剛　友好交流部　一等書記官
王　磊　友好交流部　三等書記官

9. 住友商事 (11月30日)

角田　裕一　環境・CSR部　部長
江川　友浩　環境・CSR部　社会貢献チーム長
三浦　由美子　環境・CSR部　社会貢献チーム主任
曲　晏誼　環境・CSR部　社会貢献チーム
秋葉　恵里菜　環境・CSR部　社会貢献チーム
菅谷　百合子　環境・CSR部　社会貢献チーム
出口　雅敏　理事　地域総括部長
小島　弘敬　地域総括部　副部長
畑田　好朗　地域総括部　国内・東アジア・アジア大洋州チーム　部長代理
森川　麟三　地域総括部　国内・東アジア・アジア大洋州チーム　部参事
趙　涛　地域総括部　国内・東アジア・アジア大洋州チーム　部参事
貞川　晋吾　住友商事グローバルリサーチ　国際部シニアアナリスト

10. ホテルニューオータニ (12月1日)

鈴木　浩　副総支配人　宿泊料飲本部長
後藤　忍　宿泊営業部　国際営業課　課長

山田　聡　　料飲営業課　セールスマネージャー
田島　浩一　　宿泊営業部　国内営業課　統括マネージャー
宮本　賢治　　ホテルニューオータニ大阪　副総支配人
高家　浩和　　ホテルニューオータニ大阪　営業部　セールスマネージャー
山川　剛　　ニューオータニ関西営業所　所長
長野　巨幸　　ニューオータニ関西営業所　セールスマネージャー

山本　正巳　　フアシリティーマネージメント部　マネージャー
三浦　光昌　　フアシリティーマネージメント部　係長

明日の空へ、日本の翼

北京師範大学学生代表

見学日時：2015年11月24日（火） 14:00－15:00
見学場所：日本航空株式会社（JALスカイミュージアム）

見学概要

1. 企業概況

日本航空株式会社（通称:日航・JAL）は日本を代表する航空会社であり、同時にワンワールドメンバーの一員である。本社は東京の品川区にあり、成田国際空港（国際線）と羽田国際空港（国内線）を拠点とし、世界の51の国と地域に305の就航都市を有している。従来は日本最大規模の航空会社で、2010年1月の会社更生手続の申立以降、その規模こそ縮小したが、2012年に同社が再度上場して以降、同社の純利益額は日本の航空業界で毎年トップを記録している。

日本航空は、日本ひいてはアジア全体でも長い歴史を持ち、また世界トップ500企業の1社であり、かつて「日本株式会社」として戦後の経済発展の象徴と見なされていた。

日本航空の成り立ちは1951年8月に遡る。その後1953年10月に日本で唯一国際定期路線資格を持つ国有航空会社として起ち上げられ、そして1954年には日本初の太平洋横断のアメリカ路線を開設した。その後30年あまりの発展を経て、日本航空は1987年に完全民営化を実現した。そして2002年に日本航空は当時日本で3番目の航空会社であった株式会社日本エアシステムと合併した。

日本航空では現在、ボーイング777-200ER、777-300ER、787、767-300ER等を中・長距離路線用に、そしてボーイング787、767、737を短距離路線用に使用している。また同社グループ内には他に、日本トランスオーシャン航空、日本エアコミューター、琉球エアーコミューター、そして北海道エアシステムといった国内路線運営会社があり、幹線輸送や短距離輸送などのサービスを提供している。

2. 展示エリア見学

2.1 発展の歩み

ホールの右側は日本航空の資料館となっていた。壁面には同社のこれまでの歩みが年代毎に紹介されていた。これらの紹介により、私たちは同社の創業期や発展期の歴史を理解し、さらに同社が 2005 年 10 月 25 日にワンワールドへの加盟方針を決定し、2007 年 4 月 1 日より正式に加盟したといった経緯についても知ることができた。

館内にはまた歴代の客室乗務員の制服や宣伝用ポスター、各種記念品、写真、書籍などが保管されていて、さらに時代の発展とともに変化を遂げた機内食、各年代の時刻表や座席シート、飛行機の模型など多くの歴史的資料が展示されていた。

2.2 実体験

2.2.1 制服体験

展示エリアの最奥には制服体験エリアがあり、スタッフのサポートの下、パイロットやキャビンアテンダントの制服を試着することができる。

2.2.2 マーシャラーの疑似体験

駐機場の映像が映っている画面に自分の身体を向けると、まるで自分がマーシャラーになったような感じがした。パドルを手に持ち、マーシャラーの手振りを真似することでスクリーン内の駐機場に入ってくる飛行機を誘導し、スポットの位置で停止させるのである。

2.2.3 記念スタンプ収集

ミュージアムの各コーナーでは記念スタンプを押すことができる。見学開始時に皆には日本航空のパンフレットとともにスタンプパスポートが渡されていたので、皆はこぞってスタンプを押し、記念としていた。

3. 格納庫見学

3.1 航空機部品におけるタイヤの知識とエンジンのファン・ブレードの知識を学ぶ

続いて私たちは日本航空の航空機が使用するエンジンのファン・ブレードとタイヤを見学した。同社のスタッフの紹介に耳を傾けながら、実際に触れることで非常に高価なこの 2 つの部品を肌で感じることができた。

ファン・ブレードは、エンジンの前方にあり大量の空気流動を生み出すもので、これにより巨大な推力を発揮するだけでなく、燃費の向上などにも寄与している。タービンは、流体を羽根車に当て、流体のエネルギーを回転運動に変換して動力を得る原動機であり、航空機エンジンやガスタービンそして蒸気タービンの主要部品の一つである。

航空機用タイヤは、航空機の重量を支えながら離着陸を繰り返すという過酷な条件下で使用されるため、高度な技術が要求される。タイヤの原材料となるゴムはマイナス 40℃以下、71℃以上の過酷な条件の下で 24 時間経過後の性能が規定を満たさなければならない。国内路線の飛行機は飛行距離も短く離着陸が頻繁なため、タイヤの使用寿命は約1カ月半(約 200 回の離着陸)で、タイヤ表面のゴム部分(トレッド)が摩耗した際は、トレッドの張り替え(リトレッド)を行う。

3.2 格納庫での見学

スタッフの航空機に関する知識の紹介に耳を傾けながら、至近距離で航空機そのものを見ることで、普段飛行機に乗るのとはまた違う体験をすることができた。格納庫ではメンテナンス中の航空機とメンテナンスのスタッフの姿を見かけた。またここではスタッフが余暇を利用して手作りした航空機の模型も見かけ、全体として日本人の繊細さと職業意識の高さを感じた。

そして最後に、ヘルメットを被り滑走路および滑走路での航空機の離着陸の様子を見学した。

知っていますか？

問：日本航空（以下「JAL」）のコーポレートスローガンは？

答：明日の空へ、日本の翼

問：JALのロゴマークは？

答：会社更生の後、JALは2011年4月1日より従来の「鶴丸」のロゴマークをリニューアルし復活させた。今回のロゴでは「JAL」の字体が変わっており、同時に機体側面には同社の英文表記を黒の太文字で表記している。

問：JALは、いつ中国路線を開設したのか？

答：日中国交正常化の2年後の1974年9月29日、JALは日本と中国との定期路線を開設した。現在、JALは東京（成田・羽田）、大阪（関空）、名古屋の3都市から北京、天津、大連、上海、広州へ毎日合計13の直行便を運航している。

問：JALの2015年度の安全目標は？

答：①航空事故ゼロ・重大インシデントゼロ②イレギュラー運航を減らします③お客様をお怪我からお守りします④ヒューマンエラーによる不具合を減らします

感想

中国日本商会が中日友好協会等と共催した第 17 回「走近日企・感受日本」プロジェクトは、日本を舞台に 11 月 24 日から 12 月 1 日にかけて行われ、我が校からは 6 名の学生が参加した。そして、その初日午後に私たちは日本航空を見学し、大いに視野を広げることができた。

今回の訪日に先駆けて、私たちは日本航空の優れたサービスを体験した。出発の当日、私たちの早朝の眠気が客室乗務員の笑顔で吹き飛び、それはまるで、これからの旅が充実したものになることを示しているかのようであった。また離陸前にはシートベルトや荷物棚の入念な安全点検、そして離陸後は、機内を行き来しながらてきぱきと食事の提供やその他乗客の様々な要求に対応していた。わずか 3 時間のフライトだったが、あらゆるところに日本航空の職業意識ときめ細やかさが表れていた。

日本航空のこれまでの発展は一朝一夕のものではなく、その中には繁栄と衰退といった過程があった。しかしその後のたゆまぬ経営努力により、同社は今日の発展を遂げたのである。日本航空には、その真剣な業務態度、新技術への探究、新分野の開拓そして乗客へのきめ細かなサービスといった、成功のための鍵がある。今回の日本航空への訪問は時間こそ短かったものの、私たちはこの著名な航空会社の魅力とその内面を知ることができた。

オムロン京都太陽株式会社が担う社会的責任

北京大学学生代表

見学日時：2015年11月25日（水） 14:30－16:30
見学場所：オムロン京都太陽株式会社

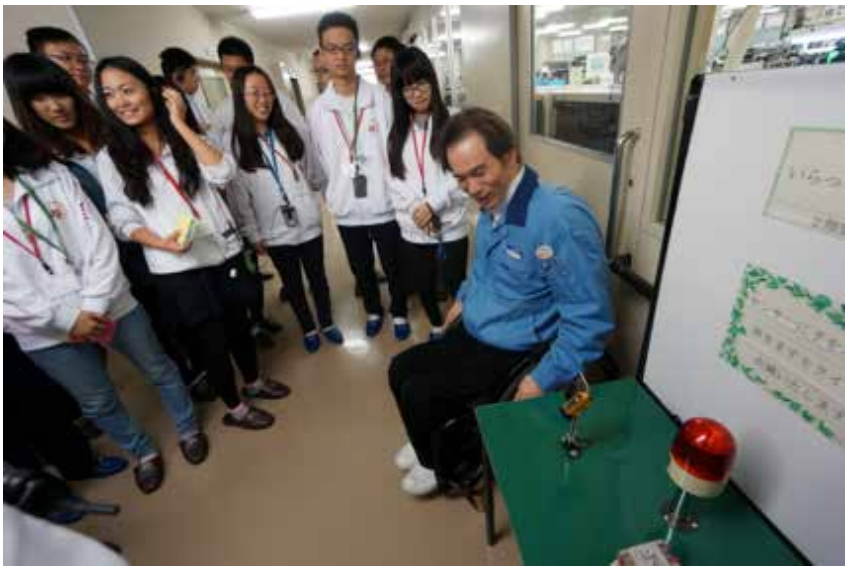
見学概要

オムロン株式会社は日本の大手総合電気機器メーカーであり、その前身は熊本出身の立石一真氏により創業された立石電機製作所である。オムロンの事業にはFA、電子部品、健康医療機器、社会システム等があり、血圧計やセンサー等の商品は、現在世界でもトップの地位を築いている。

太陽の家は、障がい者が真に一人の一般市民として仕事や生活ができる場所である。同社は1965年に大分出身の中村裕氏によって創設され、その後身体障がい者の社会参加のサポートを続けるなど、これまで障がい者の社会復帰に多大な貢献をしている。

このまったく異なる2つの企業だが、1972年に同じ目標と理想により一緒になったのである。その年、両者が共同出資により重度障がい者の社会復帰のための専門工場を建設し共に運営する形で「オムロン太陽電機株式会社」が設立され、1985年には京都オムロン太陽電機株式会社が設立。「われわれの働きで われわれの生活を向上し よりよい社会をつくりましょう」という社憲の精神は今もなお引き継がれている。

2015年11月25日午後、私たち代表団はこの企業をおとずれた。わずか2時間の滞在ではあったが、解説スタッフによるPPTを使った解説や工場内部の見学、笑顔度測定技術の体験、作業スタッフとのやり取りなど身近な体験を通じて、私たちはオムロン京都太陽株式会社の担う社会的責任について感じることができた。



知っていますか？

問:オムロンの企業価値とは？

答:オムロンは多くの中国企業とは異なり、己の利益のみを追求してはいない。同社は終始「企業は利潤の追求だけではなく、社会に貢献してこそ存在する意義がある」という考えを実践しており、イノベーションや向上心というDNA、そして「未来に喜びと感動をあたえる」という執念を有し、さらには社会の進歩に積極的に貢献するという責任を担っている。

問:オムロンの主要製品にはどのようなものがあるのか？

答:オムロンは1933年の創業以来、発展への努力を続け、今日では世界市場においてもその名を轟かせている。当初、同社はタイマーの生産以外に、保護継電器を生産していた。この2つの製品からオムロン株式会社がスタートした。その後、時代の発展とともに、1990年に社名を商標と統一する形で「オムロン株式会社」と改めた。2012年3月期の業績は6195億円、製品はFA制御システム、電子部品、自動車電子、社会システムおよび健康医療機器等の幅広い分野で数十万種類ある。1933年5月10日の創業から今日まで80年以上の間、オムロングループは絶えず新たな社会需要を生み出し、世界をリードするセンサー・制御分野における核心技術により、他に先んじて無接点近接スイッチ、電子式自動感応信号機、自動販売機、駅の自動券売・自動改札システム、がん細胞自動診断等の製品や設備・システムを開発・生産することで社会の進歩と人々の生活水準の向上に貢献すると同時に、急速に世界でも著名な自動化制御および電子設備メーカーに成長した。

問:オムロン京都太陽株式会社ではどのように障がい者の仕事や生活を保障しているのか？

答:この問題については、以下の数点にまとめることができる。

(1)バリアフリーの業務環境構築に努める

業務環境においては、些細な不便さも強い不安や重大な危険を招くことがあるが、それは障がい者が働く会社にとっては尚のことである。同社では、工場内のエレベーターのスペース拡大やドアの開く時間の延長、可能な限り段差をなくし、2台の車いすがすれ違うことができるように通路の幅を拡大、作業スタッフの負担を減らすため作業台上の各装置を手の届く範囲に設置、また作業台も車いすに合わせた規格とし充分な作業空間を確保するなど、快適な業務環境の創造のため多大な努力を払っている。これはヒューマニゼーションを極限まで高めたものだと言える。

(2) 生活環境の安全性と快適性も非常に重要

同社では工場と生活施設を同じ敷地内に設置し、通勤が不便なスタッフ用に宿舎も設置している。スタッフの日常生活においても、医務室に看護師を常駐させ、嘱託医や産業医と連携の下で健康管理サポートを行い、スタッフ専用のユニバーサルデザインのATM機を開発し、トイレは車いすに対応した空間を確保し手すりを設置、全ての出入り口を自動ドアにして段差をなくし、各スタッフが休憩しやすいよう休憩室を広くとり、エレベーターは6台の車いすが乗れる広さを確保し、後方確認のための大きな鏡を設置、そして使いやすい工夫がされた自動販売機を設置するなど、全面的に障がい者へのケアをおこなっている。

(3) 仕事以外にも様々な活動を催している

同社ではスタッフの身体や心の健康のため、車いすマラソンや各球技クラブの活動を定期的に催している。中には国際大会にも参加したスタッフもいて、多くのドラマや映画のモデルになっている。その他にスタッフ間の親睦を深めるため発足した「むぎの会」による旅行（一泊あるいは日帰り）、サマーフェスティバル、忘年会等の活動がある。そして私たちが一番感動したのは、ひだまり土曜日やFounder's Day（オムロン創業記念日）といった全社を挙げておこなう公園の草刈りや清掃などの社会貢献活動で、より良い社会づくりのために現在も貢献を続けているということである。

感想

見学を終えた私たちは、誰もが心を打たれていた。車いすに座りながら懸命に作業をしている障がい者の方々の姿や積極的に責任を担う勇気だけでなく、同社の担っている社会的責任にも私たちは感動させられた。世界的な競争が激しくなっていく中で、企業として、私たちが共に暮らす社会のために貢献や努力を行い、多くの障がい者の方々の生活における太陽となることは並大抵のことではない。

しかしよくよく考えると、これは日本文化に受け継がれてきた非常に重要な「他人に迷惑をかけない」という点とは切り離せないものである。皆それぞれが自分の責任と義務を理解しているため、日本ではたとえ障がい者であっても学習や仕事に努力し、企業にもまた社会のため福利を充実させるという意識が生まれるのである。これには、優れた民風は優れた教育により生まれ、快適な社会環境の形成もこの点と深い関係があることがわかる。

人類に物質の充足と精神の充実をもたせるため、オムロンは新たな一歩を踏み出している。そしてこれはまだ始まりに過ぎず、素晴らしい明日を描き、喜びと感動に満ちた未来を創造するため、今日中国企業を含むそれぞれの企業、ひいてはそれぞれの人々は利益のみを追求するやり方を見直し、共に素晴らしい未来のために、いかにこれまでにない新たな価値を生み出すかを考えるべきだと思う。

一国の良心を育む

北京大学学生代表

見学日時：2015年11月26日（木） 9:30－16:00
見学場所：同志社大学

見学概要

11月26日朝9時30分、第17回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日団は同志社大学の今出川キャンパスに到着し、6時間半におよぶ交流が始まった。

まず始めに、良心館において同志社大学側からの歓迎のあいさつと同大学の歴史および現状についての紹介があり、その後討論のコーナーとなった。中国と日本の学生がランダムにAからGまでの7つのグループに分けられ、グループごとに中日文化関連のいくつかのテーマについて討論を行い、5分間の発表としてまとめた。皆は積極的に討論をし、演劇やPPT、そして中日両国語解説などの形で独創的な発表を行った。

中国と日本の学生のグループ内討論の様子

発表の後、双方の学生は寧静館で昼食を共にした。また丁度同志社大学の学園祭が行われていたこともあり、訪日団メンバーは同志社大学の学生の引率の下、学園祭の見学をし、日本のキャンパス文化について理解を深めることができた。

知っていますか？

問：同志社大学と中国の大学には主にどのような体制上の違いがあるのか？

答：同志社大学は私立大学であると同時に日本の一流大学でもある。中国にも民間が設立した学校はあるものの、それは一般的には本科第三群であり、知名度や実力などは中国の公立大学にはおよばない。

同志社大学創立者新島襄は1888年11月に「官立の大学は価値のあるものであるが、私立大学も同様に社会に

おいて重要な役割を果たしていることは疑う余地もない。生徒の個性を伸ばすことで自治自立した人民を養成することは、私立大学の持つ特色と長所であると信じている」と述べている。

同志社大学にはキリスト教のバックグラウンドがあるが、こうした大学は中国では非常に稀である。しかし伝道式の大学とは違い、同志社大学はキリスト教の伝道を目的とはしていない（教育自体を伝道の手段とはしていない）キリスト教主義の大学である。新島襄は「神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教に基づく徳育」こそが、知識教育に偏ることのない全人教育には必要であると考え、キリスト教を徳育の基本とした。

問：同志社大学「学園祭」はどういったものか？

答：今回今出川キャンパスにおいて「同志社EVE」学園祭を見学した。キャンパス内には様々な露店が並び、それらは学生自らが運営している。中国でもよく見かけるサークル活動以外にも、お化け屋敷や野外でのロックフェスティバル、スクールアイドルによるパフォーマンスなどがあり、ひいては中国でもほとんど見かけない餃子研究会やラーメン研究会も見かけた。

訪日団全メンバーと同志社大学の皆さんとの記念撮影

感想

日本の大学生たちは、全体的に中国の大学生よりも自発的で親切だが礼儀もある。こうした点は私たちも学ぶべきだと思った。これまでの中国への印象がどうであれ、彼らは皆中国に興味を持ち、とても積極的に交流をしてきた。日本の大学生はその多くが学業の傍らアルバイトをしており、生活費の一部を賄っているが、中国ではそうした状況は少ない。これについては、中国の学生の学業負担による課外時間の少なさ、そして社会的風潮の影響もある。恋愛問題については、日本の学生はより開放的で、特に女性は恋愛において独立しており父母の干渉も比較的少ない。全体的に言って日本の大学生はより自主的で、生活もより多彩である。

同志社大学創立者新島襄は、「一つの国を維持するのは決して二・三人の英雄の力ではなく、一国を形作る教育があり、知識があり、品性の高い人々の力によらなければならない。こういう人々が『一国の良心』と言うべき人たちであり、こういった人材を養成していきたい」と述べている。

「一国の良心」、これは同志社大学の創立目的および教育理念であり、また中国と日本の大学生の精神的追求とも言えるものである。

エネルギーと環境の共存

北京理工大学学生代表

見学日時：2015年11月27日（金） 10:30－12:00
見学場所：電源開発磯子火力発電所

見学概要

はじめに会議室にて発電所スタッフより磯子火力発電所の成り立ち、その後の発展と現在の状況についての詳細な紹介があった。その紹介で私たちは、今から40年前、東京と横浜間は農業地帯で、現在の北京と天津のように二つの都市は強い結びつきがなかったことを知った。磯子火力発電所は東京と横浜の間に建設され、東京への電力供給と横浜の電力需要に対応している。磯子火力発電所の1号機・2号機はそれぞれ1967年と1969年に運転を始めた。磯子発電所が使用するクリーンコールは高エネルギー効率、低炭素、低エネルギー消費という特徴を持っている。環境と効率、この2つのキーワードはJ-POWER社の発展と共にあり、現在同社は日本全国に安価で、安定的な電力を供給している。また海外との提携もおこなっており、1960年以降から半世紀にかけて、発展途上国を主な対象として水力および火力発電などの開発プロジェクト調査や設計、施工管理、環境保全措置等の電力に関するコンサルタント業務をおこなっている。

磯子火力発電所の歴史について一定の理解を得た後、私たちは発電の現場へと赴き、直にこの高効率でクリーンな発電所を体感した。ここの緑化率は改築後20%に達しており、私たちはその美しさを大いに堪能した。またボイラー建屋内に入り私たちは非常に驚いた。そこは想像していた黒ずんだ石炭発電所の光景とは全く異なり、至るところまるでハイテク企業のような清潔さであった。そして運転センターを見学した。そこでは全てコンピューターによる自動制御となっており、スタッフは制服に身を包み、粛々と排ガス排出量や石炭供給量など発電設備の監視をおこなっていた。またリアルタイムの計測器ではNOx（窒素酸化物）は13ppm、SOx（硫黄酸化物）は10ppmであった。これは環境基準よりも低い値で、ましてや中国の火力発電所の基準よりはるかに低い排出量である。もし中国の火力発電所にもこうした技術があれば、華北地区のスモッグ問題も解決できるのではないだろうか。

私たちは1号機の内部から、その屋上へと登った。そこからの美しい景色とこの地区の工業の発展ぶりが強烈なコントラストを呈していた。遠くには富士山と横浜市街が望め、近くには美しい東京湾があり、揚炭岸壁に停泊しているセルフアンローダー装置（自動揚荷役設備）搭載の石炭専用船は一際目を引いていた。こうした高度に自動化された生産過程は、高齢化に伴う労働力減少問題の解決および業務効率の向上にも繋がり、まさに一挙両得である。私たち訪問団A組はここで記念写真を撮影した。

屋上の美しい風景を堪能した後、私たちは名残惜しくもこの環境保全意識と高効率技術を有する火力発電所を後にし、その後の訪問スケジュールのため東京へ向かった。

知っていますか？

問：大都市において非常に重要なこの火力発電所はいかに再建されたのか？

答：磯子火力発電所の発電設備は30年運転を続け、老朽化による廃止の必要が出てきたが、周辺地域の電力需要は全く減ってはいなかった。そしてこれまでより厳しい環境保全条項である『よこはま21世紀プラン』に対応するため、磯子火力発電所は設備の刷新の必要に迫られた。1993年、J-POWER社は発電所のリプレースを決め、1996年に新1号機の着工が始まった。まず旧1・2号機のとなりに60万kWの新1号機を先に建設し、新1号機の建設が終わり運転を始めてから、旧1・2号機を撤去し、その撤去跡地に新2号機（60万kW）を建設することで発電能力を倍増させた。解説の浅野勲館長さんからは、「中国では現在発電能力が不足しており、各発電所は発電能力拡大の必要に迫られている。そうした発電所から多くの方々が磯子火力発電所へ見学に訪れている。」とのお話があった。同社のこうしたスクラップアンドビルド方式に、中国の発電所も当然興味を持ったのであろう。

問：石炭を原料とする発電所において、どういった方法でほぼ完全なゼロ排出を実現しているのか？

答：まずは乾式排煙脱硝装置である。排ガスにアンモニアを添加し、その触媒作用による化学反応を通じて排ガス中の窒素酸化物を無害な窒素と水に分解するのである。つぎに電気集塵機である。煤塵を含んだ排ガスを高電圧の電極間に通過させ、負に帯電した煤塵を、集塵極に付着させる。そして電極は周期的に振動し、付着した煤塵が払い落とされる。最後は乾式排煙脱硫装置である。排ガスを活性炭が充填された脱硫塔に通し、排ガス中の硫黄酸化物を活性炭に吸着させた後、活性炭が再生塔へ送られる。再生塔では硫黄酸化物が取り除かれ、活性炭は再度脱硫塔に送られ循環利用される。

感想

磯子火力発電所の見学を通じて、私たちは日本企業の自身の利益追求と同時に環境保護や省エネを重視する姿勢を強く感じることができた。敷地内の緑化率は20%に達し、煙突からは排ガスを見かけることは全くなく、その環境は火力発電所だとは到底思えないものだった。磯子火力発電所は市街地に近いため、ここでは絶えず新たな技術を開発し、クリーンコール技術により排出される汚染物質の量を最小限に抑え、同時にまた非常に高いエネルギー利用効率を達成している。磯子火力発電所が横浜市と結んだ協定には、排ガス中のNOx（窒素酸化物）含有量は20ppm、SOx（硫黄酸化物）含有量は20ppmを超えてはならないとあるが、実際見学の際、NOxは13ppmでSOxは10ppmであった。このことから、磯子火力発電所ではただ単に利益のため基準さえ満たせばよいという考えはなく、火力発電による環境への影響を最低限にすべく努力をしていることがわかった。

敷地内に足を踏み入れた時、ここが石炭を原料とする火力発電所だとは到底思えないものだった。発電所は横浜近郊に位置し、三方が海に面し、一方は横浜市街に面していた。200mの高さの煙突の上では鳥が飛び交い、敷地内の至るところで樹木や芝生を目にするなど素晴らしい緑化環境であった。内部の見学では、騒音はほとんど耳にすることはなく、各スタッフはそれぞれの持ち場で粛々と業務を行っていた。

全体として、磯子火力発電所からはその環境保全意識が最も強く印象に残った。石炭の輸送から燃焼、さらには排ガスの排出や再利用に至るまで、いずれもこの企業の優れた技術と環境保全意識が表れていた。

法政大学-漢字から日中両国文化の共通点を探る

北京師範大学学生代表

見学日時：2015年11月27日（金） 14:30－20:00
見学場所：法政大学

法政大学の紹介

法政大学は本部を東京都千代田区に置く、著名私立大学である。

法政大学の設立は、1880年設立の日本で最初の私立法律学校である東京法学社に遡る。その後1920年に法政大学と名を改め、現在まで135年の歴史を有している。同学は東京都内の五大名門学府「MARCH」（M:明治大学、A:青山学院大学、R:立教大学、C:中央大学、H:法政大学）の一つである。また日本の文部科学省が選定したスーパーグローバル大学事業（中国でいうところの、大学の国際的知名度向上のための211や985等の計画）37大学の一つである。

同学の法学部および社会学部の歴史は非常に古く、同学は日本の私立大学で初めてこれらの学部を設置した大学である。同学の前身の東京法学校と当時の専修学校（現在の専修大学）、明治法律学校（現在の明治大学）、東京専門学校（現在の早稲田大学）、英吉利法律学校（現在の中央大学）は明治五大法学校であった。その後1950年に工学部が開設され総合大学となった。また同学は日本航空と提携、日本で最も影響力のあるパイロット養成機能を持つ総合大学でもある。

同学は1904年に清国留学生法政速成科を開設した。汪精衛、宋教仁、楊度、胡漢民、曹汝霖、孔昭綬、朱執信、湯化竜、古応芬、そして『猛回頭』や『警世鐘』の著者である陳天華、および元最高人民法院院長で「七君子」の一人である沈鈞儒等多くの速成科卒業生は、いずれも中国の政治や教育の近代化を担った傑出した人物である。

見学概要

午後、私たち訪日団メンバーは中華日本学研究協会副会長兼法政大学教授の王敏氏による「漢字文化と日本」および「留学文化と日本そして法政大学」をテーマとした講座を拝聴した。王敏教授はまず日中両国の言語に共通する漢字から両国文化の共通点を見出し、次いで儀礼祭祀、中国の古典、教育、日本の大禹文化、漢字の実用価値、教科書等の面から深く日中両国文化心理の共通点を探り、さらに胡漢民、宋教仁、廖仲愷、沈鈞儒、董必武といった近代に法政大学に留学した歴史上の人物について紹介をした。王敏教授の講座内容はとても豊富で、また核心をついており、私たちは日中両国文化の密接な関係と長きに渡る歴史についてより認識を深めることができた。

夜は懇親晩餐会であった。私たちは美食に舌鼓を打ちながらも、様々な問題について王敏教授の見解を伺った。和やかな雰囲気の中、皆は王敏教授に感謝の意を伝え、最後に記念撮影を行った。

知っていますか？

1、上海万博における日本館の愛称「紫蚕島」の由来について

この愛称は王敏教授が名づけたものである。

日中両国文化の観念において、「紫」は「高貴」の意味があり、「蚕」には復活、長寿、永久、魔除けの意味がある。日中両国は古代いずれも男耕女織の文化であり、中国の黄帝の妃で養蚕の始祖である嫘祖は「蚕神」と崇められており、蚕形の副葬品「勾玉」などがある。そして日本の『古事記』には、皇后が養蚕を行い、天皇は春に種をまき秋に収穫するという記述があり、今日まで続いている。「島」は日本の地形と関わっている。日本には古来より「東瀛、大島、洲、扶桑、倭、大和」等の別称があり、中国には「忽聞海上有仙山(そのうち海上に仙人の山があると聞き及ぶ)」の古詩が存在する。

日本館の建物外観は薄い紫色で、そのドーム式の形状は大きな蚕の繭のようであり、また蚕には長寿の意味が込められている。蚕の繭から出る糸を使った絹織の技法はまさしく中国から日本へ伝わったものであり、日中間の「密接な繋がり」の象徴である。

2、済南碧筒杯

碧筒飲とは、新鮮なハスを茎の途中で切り落とし、そのハスの葉に酒などの飲み物を注ぎ反対側の茎の切り口の部分から葉に注いだ酒などを飲むものであり、夏の暑さを癒すのに最適なものである。別名「蓮杯」、「蓮盞」、「碧筒杯」と呼ばれ、また茎の形状が象の鼻に似ていることから「象鼻杯」とも呼ばれる。

王敏教授の長年の研究によると、中国で失われたものの多くが日本にはいまだ存在し、しかも古跡としてではなく、現代の日本人の生活様式として存在している。例えば、日本には世界で唯一の餃子の記念碑があり、また済南人には比較的馴染みのある「碧筒飲」は祭日のパフォーマンスとなっているが、日本では「碧筒杯」と呼ばれ、現在までこうした方法でお酒が飲まれている。

3、八咫烏（三足烏）と神農

王敏教授曰く、日本では八咫烏（三足烏）のイメージが人々に根付いている。最も典型的なものとしては、日本サッカー協会のシンボルマークに八咫烏が採り入れられている。王敏教授の研究によると、日本人の八咫烏信仰は中国の三足烏信仰がその原型となっている。漢の時代の画像石には西王母の隣に常に三足烏がいる様子が描かれている。

また中国の神話についても、日本では神農を祀る伝統が残っている。大阪や東京などでは毎年神農を祀る行事が行われている。特に大阪では神農信仰が強く、大阪の「神農祭」は大阪市無形文化財（民俗行事）に指定されている。

4、日本の大禹文化信仰

「四書五経」において「禹」は 31 回登場する。大禹は「四書五経」が日本に伝わった後、日本の人々により発展そして普及した。大禹の治水の功績を祀る儀式もその名残の一つである。

2010 年 11 月 27 日、日本で最初となる全国禹王まつりが神奈川県開成町で開催された。2012 年 10 月 20 日には第 2 回の全国禹王まつりが群馬県の名勝地である尾瀬で開催され、2013 年 7 月 6 日には第 3 回の全国禹王まつりが高知県高松市で開催された。大禹は中華の地に幸福をもたらしただけでなく、現代において日本と中国を結ぶ架け橋となっている。またこの全国禹王まつりは、2013 年以降は毎年大禹に所縁のある場所において順に開催していくとのことである。

多くの聖人や賢人の中で大禹が崇拝される主な理由は日本の風土の特徴と関係している。知ってのとおり日本は古来より地震や水害が多く、人々の生活において最も優先すべきは地震対策と水害対策であった。原始的な農業生産を主としていた当時の日本にとって、大禹は加護を祈る神であり、また人知を超えた技能を持つ科学者であった。人々は大禹の水の通りを良くすることを主とする治水方法は日本でも必ず通用すると固く信じていた。そして今日でも日本の土木建設業界は大禹を開拓者と崇めている。また日本の伝統競技である相撲においても、その代表的な土俵入りの姿勢は大禹の治水時代の地固め（足で力強く土を踏みしめる動作）を基にしたもので、日本語でも「禹歩」と呼ばれる。

感想

まずは外国語を媒体とし自国の優れた文化を広めるために自国文化をしっかり理解することの重要性を認識させられた。

外国語を学ぶ私たちは、外国文化を学ぶと同時に自国文化に対する理解を疎かにしがちである。外国語を学ぶ目的は本来外国とより良く交流することであり、もし私たちに相手に伝えられるものが無ければ、「相互交流」は一方的なものになり、本当の意味での交流とはならない。王敏教授は自国文化への理解を土台とした上で日本文化を研究し、さらに両者を比較分析することで、日中両国に文化的繋がりと理解という架け橋を構築した。私たちもこうした点を目標の一つとし、自国の優れた文化そして外国語を学んでいくべきだと思った。

そして、日常生活における細かな観察とそれに対する研究についても考えさせられた。王敏教授は生活において様々な些細な点を見つけ、それを研究することに長けている。私たちも日頃から自身のそのような能力を磨いていくべきだと思った。

国際的な銀行・金融グループを目指して

中央財経大学学生代表

見学日時：2015年11月30日（月） 09:30－11:30
見学場所：三井住友銀行

見学概要

2015年11月30日の午前、第17回「走近日企・感受日本」訪日団は東京都千代田区にある三井住友銀行を訪れ、約2時間の見学をおこなった。

午前9時30分に見学が始まり、最初に企業側スタッフよりスケジュールの説明があり、次いで三井住友銀行の沿革と業務紹介のDVDが放映され、その内容の多彩さに私たちは引き付けられた。

その後、国際統括部の都留室長から歓迎のあいさつと三井住友銀行の概況紹介があった。私たちはその紹介から、三井住友銀行では企業に対しコンサルティング、各種アドバイザリー業務および資金調達・運用等のサービスを提供していることを知り、また同銀行は呉服業を営んでいた三井と銅鉱業を営んでいた住友が合併してできたものであることを初めて知った。そして都留室長はこれまで北京や上海などへ多くの出張経験があり、私たちはすぐに打ち解けた。

次いで、グローバル・アドバイザリー部の伊藤部長から三井住友（中国）有限公司の概況説明と質疑応答があった。伊藤部長は1985年から中国を訪問しているため、会場の私たち学生よりも長い時間中国語を使っている、中国語を学んでいるおじさんだと、自身のことをユーモラスに例えられていた。そして質疑応答のコーナーでは、三井住友銀行はオンライン業務提携に注力し、日本で最初に銀聯と提携した企業であることを知った。この他、中国はTPPメンバーではないが同銀行の対中国市場の経営戦略には影響しない旨、伊藤部長より回答をいただいた。

最後に、銀行のスタッフの引率の下、私たち訪日団メンバーは本店を見学し、さらに同銀行の皆さんと記念撮影をして今回の訪問は円満に終了した。

知っていますか？

問：液晶タッチパネルの柱と地球儀を知っていますか？

答：三井住友銀行の歴史と発展状況の見学の際、私たちはライジング・スクエア2階の複数の柱が立っている部屋（金融/知のLANDSCAPE）へ案内された。それらの柱には躍動する画面が映し出されており、最初はただのモニターだと思っていたが実はタッチパネルになっていて、異なるパネルを押すと、それらの具体的な内容などが表示される仕組みになっていた。こうしたハイテク設備で100年前の歴史を知るのはまた変わった体験であった。

この他1階のアースガーデンには大きなデジタル地球儀があった。その表面はタッチパネルで、様々な地域の状況を示し、コントロールパネルによって大気の状況や地表の状況などを示すことにより、地球のダイナミズムを生きた形で体感することができる。

感想

今回の三井住友銀行の見学で印象深かったことが三つある。一つめはグローバル化である。三井住友銀行は世界の38の国に71ヵ所の拠点を設けており、外国業務の量は総業務量の44%を占めている。こうしたグローバル化した戦略配置は、三井住友銀行により幅広い市場をもたらし、各国の資金により政府や企業へサービスを提供することを可能にしている。また三井住友銀行にはそれらを専門とするグローバル・アドバイザリー部と国際統括部があり、同銀行の強みが見て取れる。そして同部門の中国担当グループは現在人民元の国際化プロセスを推進中で、北京、天津、上海などに支店を構え、在中日系企業の各金融業務をサポートするなど中日経済交流において大きな役割を果たしている。

二つめはコンサルティングサービスである。三井住友銀行では預金や貸付等の業務に止まらず、財務アドバイザリーを通じた戦略提案により、企業目標の実現をサポートしている。具体的にはまず始めに、顧客に対して投資環境、法務、労務、税務等の情報を提供する。企業の多くは国際取引の際、現地の経済状況や取引習慣を充分に把握していないため、三井住友銀行ではこうした企業へ様々な情報を提供することで企業の後顧の憂いを取り除いている。次に、企業再編や資金管理等の顧客が直面する問題に対するソリューションの提供である。こうしたコンサルティングサービスにより、三井住友銀行は一般の銀行の垣根を越え、より金融グループに近い性質とより高い実力を持つに至っている。

三つめは環境保全意識である。三井住友銀行は銀行でありながらも省エネと有害物質の排出削減に努めている。ホールで見かけたモニターには、当日の太陽エネルギー発電量が示され、また地球環境を示すデジタル地球儀もあった。こうしたことから、一見環境保全とさほど大きな関わりがない三井住友銀行でも、強い環境保全意識と社会的責任感を有していることがわかった。

今回の見学は非常に有意義であった。今後中国の各銀行の発展状況も把握し、今回の見学で感じたことと併せて一定の見方や提案などをしていければと思う。

長寿企業のその長寿の秘訣を探る

北京外国語大学学生代表

見学日時：2015年11月30日（月） 16:30－19:30
見学場所：住友商事本社

見学概要

住友商事は1919年に設立した日本の5大商社の一つで、17世紀の住友政友の事業を原点とし、そして今日まで住友グループとして400年余りの歴史を有している。今回の住友商事本社の見学では、私たちは非常に手厚いおもてなしを頂き、住友商事グローバルリサーチ株式会社の貞川晋吾さんからは住友商事の歴史と現状の紹介、そして住友商事環境・CSR部の中国籍スタッフである曲晏誼さんからは住友の歴史および住友商事グループのCSR（Corporate Social Responsibility）、即ち企業の社会的責任についての紹介を受けた。

貞川晋吾さんの解説に真剣に耳を傾ける学生たち

住友商事には多くの管理部門および営業部門があり、現在日本国内に23カ所、海外66の国と地域に112カ所の拠点を設けている。業務内容は輸出入、三国間取引、投資、融資等多方面に及んでいる。日本の財界におけるトップ企業として、住友商事は自身の発展における経験を基に、国内その他および新興国企業のサポートを目指している。

住友商事は戦後、経済回復期、高度成長期、ニクソンショック、オイルショック、プラザ合意、バブル経済とその崩壊、アジア金融危機そして現在の新興国ブーム等を経ながら日本経済の発展を支援し、これまで「国の外貨獲得の窓口」、「経済成長の原動力」、「資源配分とエネルギー供給」、「海外展開支援」等の役割を担ってきた。

また住友商事は環境保護においても大きな貢献をしており、太陽エネルギー、風力エネルギー、地熱エネルギー等のクリーンエネルギー分野にいずれも関わっている。中国、ベトナム、ミャンマー等の国には、いずれも住友商事が建設支援をおこなった基礎施設がある。また住友商事は持続可能な発展、社会的価値の創造の目標を掲げ、世界各地で住友商事奨学金等の様々な社会貢献活動をおこなっている。

見学学習が終わった後、私たちは住友商事が心を込めて準備をしてくれた懇親会（晩餐会）に参加し、同社のスタッフと楽しく交流した。懇親会終了後、私たちは彼らとの別れを惜しみつつこの日の日程を終えた。

住友商事本社での懇親会

知っていますか？

問：住友の標章の意味は？

SUMITOMO

答：住友の標章は井桁の形で、上が「白」で下が「水」で構成される「泉」の字を象徴しており、「水を飲むとき井戸を掘った人を忘れない」という意味を持っている。また住友に当時伝わった銅精錬技術が中国人の白水によるものであるとの言い伝えから、この標章はまた白水への感謝をあらわしたものでもある。

問：住友商事は日本の有名総合商社であるが、では「総合商社」とは何か？

答：総合商社とは日本特有の企業形態である。総合商社には、取扱商品の範囲および分野の広さ、世界規模での様々な貿易形態そして巨大な売上額と経営規模という3つの大きな特徴がある。総合商社はそれぞれの時代において必要な機能を身に付けることで商業基盤を拡大し、また日本経済の発展状況に応じ絶えず自身の機能や役割を調整することで時代をリードする業務を創出してきた。総合商社の本質は、変化への適応能力である。そのため、住友グループとして400年余りの経営経験を持つ住友商事は、完全なビジネス体系、非常に大きな規模そして変化への強い適応能力を有している。

問：どのような経営理念と行動指針が、激しい競争の中で住友商事を盤石の地位に立たせたのか？

答：住友商事グループの経営理念は3つ。それぞれ、企業使命-健全な事業活動を通じて豊かさと夢を実現する。経営姿勢-人間尊重を基本とし、信用を重んじ確実を旨とする。企業文化-活力に溢れ、革新を生み出す企業風土を醸成する。

住友商事グループの行動指針は7つ。住友の事業精神のもと、経営理念に従い、誠実に行動する。法と規則を守り、高潔な倫理を保持する。透明性を重視し、情報開示を積極的に行う。地球環境の保全に十分配慮する。良

き企業市民として社会に貢献する。円滑なコミュニケーションを通じ、チームワークと総合力を発揮する。明確な目標を掲げ、情熱をもって実行する。

住友商事の経営理念と行動指針からわかるのは、住友商事は自身の成長に積極的に取り組み、信用を重んじた経営をし、企業利益を追求しているだけでなく、同時に公共利益を重視し、また強い社会的責任感を有しているということである。

感想

住友グループは、住友家初代住友政友の創業以来400年の歳月を経てきた。この長きに渡り受け継がれてきた企業の歴史というものは中国企業が学ぶべきものである。驚くべきことに、こうした長寿企業は日本には27,000社余りあるのに対し、中国は9社にすぎない。経済モデルの転換期にある現在の中国企業にとって、こうした日本の長寿グローバル企業はどういった経験をもたらしてくれるのか。私たちのグループのリサーチによって以下の数点にまとめてみる。

1. イノベーション精神は企業競争力の核心である。住友は進んだ銅精錬技術により身を起こし、精錬された赤銅はヨーロッパにまで売られ、近代では林業等の分野を通じ事業転換に成功、次第に様々な業種へ関わるようになり、世界各地に拠点を置く大型総合商社となった。こうした長い時間の中、絶えず移り変わる歴史の舞台において、ある企業が変わらぬ姿で存続し続けることはほぼ不可能であり、まして成長や拡大をすることは言うまでもないことである。住友の発展の歴史は、本質的には絶えず変化をし、新たな分野への挑戦を続けてきたイノベーションの過程である。

2. 変わらぬ信念は企業経営における精神である。住友は現在の規模にまで発展しても、住友創業当時に白水により伝えられた銅精錬技術という自身の出発点を忘れず、標章や社長会の名称という形で記念している。こうした感謝の精神は、絶えず変化をしていくこの企業に、信用という変わらぬものを持たせている。信用で身を立て、現在もその信用を依然として守っている。これは本来中国古来の商いにおけるルールである。しかしながら、現在大衆の起業を勧める中で一部の若年起業家に見られる「融資、不正な現金化、夜逃げ」といった現象からは、私たちの時代における浮つきが反映されている。企業は「法人」であり、立脚点は「人」である。利益を目的とする機構を、いかに社会的責任を担う生命体として育てていくのか、これは私たちが今日住友のような日本企業を見学した際に考えるべき問題である。

3. 皆の力を一つにして己の役に立てる。住友の「力の利用」は二つの面に現れている。まず企業内部においては、グローバル企業として貿易対象国のスタッフを多く抱えており、これらの優秀な外国籍スタッフが住友に対して世界からの知恵を提供しているというスタッフの雇用面。そして企業外部においては、大型プロジェクトにおいて丸紅や三菱等の競合他社と共同でリスクを分担するという企業間の協力面に現れている。こうした協力の精神も住友の歴史が400年続いている秘訣の一つであろう。

ホテルニューオータニ東京

中央音楽学院学生代表

見学日時：2015年12月1日（火） 9:30－11:30
見学場所：ホテルニューオータニ東京

見学概要

訪日活動の最終日である今日は、私たちが宿泊したホテルニューオータニ東京を見学した。

同ホテルは東京都千代田区にある最高級ホテルの一つであると同時に日本でも最大級のホテルであり、その敷地面積は69,226平米、延床面積は291,041平米である。ここでは例えようのない素晴らしい滞在体験ができただけでなく、「安心・安全」、「緑化」、「リサイクル」、「省エネ」といった斬新なホテル経営の理念を体感することができた。

また同ホテルはしばしば国賓級のゲストをもてなしており、胡錦涛前国家主席も訪日期間中は同ホテルに滞在されたという。

以下は山本さんの解説の様子である。

今回私たちはホテルニューオータニの発電・汚水処理・貯水・ごみ処理システムを見学した。

ホテルニューオータニは1964年に開業し、現在まで51年の歴史を有している。そしてこの半世紀において、同ホテルは常に省エネと環境保全事業を徹底して行っている。

環境保全において、ホテルニューオータニは業界内でも優れた存在であり、同ホテルではごみの100%リサイクルを実現し、水についても浄化処理を行い上水・中水・下水に分けた後、その水質毎に様々な用途で利用されている。例えば中水は微生物の活性化を利用し造られるが、この中水は主に樹木への灌水やトイレ用に再利用されている。

以下は汚水処理システムの様子である。

知っていますか？

ホテルニューオータニは当時の東京オリンピック開催にあわせて開業された。ザ・メインとガーデンタワーそしてガーデンコートに分かれており、内部にはショッピングアーケード、クリニック、郵便局や美術館などがある。約2万人のスタッフにより管理運営されている様は、東京の「街の中にある街」と言える。

また私たちは電力システム室内で「小さな祠」を見かけた。これは神の加護を祈るもので、これによりシステムの正常運転、スタッフの日々の健康、そしてホテルニューオータニの発展を祈願している。

感想

ホテルを見学する前、私たちが感じていたのは立派な建物、美しい環境、快適な部屋や行き届いたサービスといったものであった。浴室の曇らない鏡、ウォシュレット、静かな廊下からゲストの多様な味覚を満足させるレストラン、そして至るところで見かけるスタッフの笑顔など、これらは全てホテルニューオータニの「人間本位」のサービス理念を体現していた。そして今日の見学において私たちは、ホテルがまるで単独の都市であるかのように、そのほとんどの機能を独自でまかなう様子を窺い知ることができ、それと同時に、こうした素晴らしさの陰には多くの努力があることも知った。

今回の訪日において、ホテルニューオータニはとても印象深いものであった。またそれは絵画のような風景と豪華な内装によるものだけではなく、それ以上にスタッフ全体の環境保全における日々の努力がそうさせたのである。次回日本を訪れた際は、私たちに素晴らしい思い出を残してくれたこのホテルを改めて利用したいと思う。

訪日団メンバーがホテル敷地内の美しい庭園で記念撮影

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 17 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日　付： 11月24日（火） 1日目
大学名： 北京大学
氏　名： 馬洪林

初めて日本に来てまず印象深かったのは、JALスカイミュージアムの見学を終えて同社のスタッフとお別れをする場面であった。皆さんは私たちの乗ったバスが視界から消えるまで手を振り続けていた。バスの中では、ガイドの中島さんから私たちにも手を振るようお話があり、私たちは笑顔で手を振った。そして私たちは手を振るこの行為を楽しいものだと感じた。これは日本人にとっては日常的な礼儀の基本であり、それに比べて中国の「礼儀の国」の四文字は、さほど説得力を持っていないような気がした。

来日前、私は今回の活動をとても楽しみにしていた。面接の際、私は日本が私に与える最も大きな印象は「細」であると伝えた。「細」は二つの面についてであり、一つは「細部」、もう一つは「細やか」である。そしてJALスカイミュージアムの見学では「細部」について感じることができた。お別れの際の挨拶は礼儀における細部であり、この他技術的部分についてはとても精巧なものであった。そして私たちは非常に高価な実際の飛行機のエンジンファンブレードやタイヤに直接触れ、その質感や細部を間近に見ることができた。またその傍には詳細な紹介文があった。例えばタイヤはJALがタイヤメーカーからレンタルしており、一つのタイヤは約200回の離着陸の後タイヤメーカーに戻され、修復を経て再度使用されるとのことであった。

その後格納庫を見学したが、幸いなことに首相が乗る政府専用機も見かけた。格納庫内部の「安全第一」の四文字にはとても胸を打たれた。私たちはヘルメットを被り、間近で飛行機を見ながらスタッフの方の話に耳を傾け、また滑走路での飛行機の離着陸の様子を見学した。私たちは今回の見学を通じて、技術や運営そして管理に限らず航空業界について一定の理解を得ることができた。今日の最終目的地に到着するまでの間にこうした見学ができたことはとても有意義であり、リラックスした雰囲気の中で多くを学ぶことができた。

その夜、私たちはそれぞれの学校ごとにグループで大阪の街を散策した。初日ということもあり私たちは互いにまださほど打ち解けてはいないが、これから親しくなることで、私たち皆にとって楽しい旅となることを願っている。

最後に、大阪の夜景はとても美しかった。

日　付： 11月24日（火） 1日目
大学名： 北京理工大学
氏　名： 趙雨涵

今日は私にとって特別な一日となった。私はついに長い間憧れながらも複雑な感情も併せ持つ国である日本にやってきた。スケジュールの大半は飛行機での移動であり、マイナス10数℃からいきなりプラス21℃への変化となり、まさに中国的思考から日本的思考への転換と同じように馴染むのが大変であった。私は、とあることにとても後悔している。と言うのも、私は自分の着替えのために皆のスケジュールを乱してしまったのである。初日からこうしたミスを犯したことをとても恥ずかしく思い、これは私の中国的思考により起きたミスだと反省をした（中国的思考が悪いということではなく、中日の思考や習慣が重んじる点が異なっているということである。どちらが良い悪いではなく、互いに参考にすべきものだと思う）。だからこそ私たちは日本と向き合う際、新たな考え方やルールで対処し、従来の思考パターンを跳び越え、異なる視点から日本の魅力を理解しなければならない。これは私が今回日本で見学するにあたっての基本的なスタンスである。

今日はJALスカイミュージアムそして格納庫を見学した。そこはとても広く、飛行機が3,4機収容可能である。そこではスタッフはてきぱきと飛行機の点検を行っていた。格納庫全体としては中国国内にもありそうなものであったが、唯一違うと思ったのは、私たちが格納庫に足を踏み入れて間もなくして始まったラジオ体操である。数人のスタッフがやっていた作業を中断し身体を動かす様子を見て私は、いつになったら中国の作業場でもこうした光景が見られるのだろうかと考えた。これには二つの要素が必要であり、一つは企業がスタッフの健康や安全を重視することで、もう一つはスタッフ自身も自分の身を守る意識を持つことである。この二つが結びついて初めて人へのやさしさが形成されるのである。この実現において、私たちにはまだ長い道程が待っていると思う。

それから感動したのは夕食とホテルであった。今回私たちを支援してくれた大企業に比べ、私たちはあまりにも小さな存在だが、それでも私たちは今回素晴らしい待遇を受けている。私は自分たちの能力を過小評価しているわけではなく、私たちはこうした大企業のように感謝の心で社会に対して恩返しをしなければならない、ということを言いたいのである。これら企業は成長を遂げた後、中日両国の平和的交流促進のため中国人学生を支援している。こうした企業の心意気には敬服させられた。そして、私たちは自分の学校の代表としてだけではなく、中国を代表する存在として未来の中日関係の先行きに関わっているのである。私は自分たちが担う重い責任を改めて感じさせられた。

日　付：11月24日（火）1日目
大学名：北京外国語大学
氏　名：潘向茹

飛行機に乗るため早起きをして、私は初めて午前4時の北京の様子を目にした。視界を通り過ぎる道路の両側の明かりと共に、これまでにない新たな一日が夜の景色の中から始まった。

私は今回初めて日本に来た。沢山の目新しい体験は言うまでもなかったが、最も印象深かったのは、道中での日本のサービススタッフの笑顔であった。チェックインから安全検査、搭乗、飛行機内での朝食まで、サービスの種類や場所そして体験は変われども、日本のサービススタッフの親身な接客対応や笑顔は変わらなかった。これは私の今回の旅に多くの温かみと心地良さをもたらしてくれた。

午後はJALスカイミュージアムを見学したが、航空産業見学は初体験であった。文系の私はこの業界には詳しくなかったが、見学やスタッフのわかりやすい解説のおかげで、とても印象深い見学となった。私が感心したのは、まず格納庫内の標語である。中国の作業現場では様々な標語を目にするが、ここでは「安全第一」と「整理整頓」のたった二つであった。一つはスタッフに対する責任、もう一つは顧客に対する責任を表しており、短いが非常に明確である。或いはこれこそが日本人の言葉より行動という真摯な仕事への態度の表れなのかもしれない。次に感心したのは、日本が環境保全とエネルギー再利用に非常に気を使っていることで、この点は日本での生活におけるごみの分類処理だけに限らず、JALの業務においても非常によく表れている。例えば、飛行機のタイヤは数百回の飛行で摩耗するが、破棄することはせず、リトレッドにより資源の節約と安全性の確保を両立している。私は中国国内の航空業界ではどうなっているのかは知らないが、社会責任と企業自身の利益を融合させる点は大いに学ぶべきものであるというのは、疑いの余地がないものだと思う。

JALでの見学では多くの体験ができ、様々な知識を得ることができた。JALの優れた技術や理念、そして優秀なスタッフなど、私は今回の見学で様々なことを考えさせられた。中国は現在では多くの優秀な企業や技術が登場し、工業においても従来からは大きな進歩を遂げている。しかし私はまだ成長の余地があると思う。いかに社会利益と企業利益を結び付けていくか、この点は今後中国企業が向き合っていく大きな課題であり、日本企業の経験に学ぶことが大切になるかもしれない。

日　付：11月24日（火）1日目

大学名： 中央音楽学院
氏　名： 韓天雅

東京へ向かう便は午前8時25分に出発するため、訪日団の全メンバーは朝の6時20分に集合し搭乗手続きを終えた。近いようで遠い国であった日本という隣国に、私たちは今回初めて向かった。

上空から日本の国土を眺めると、すでに日本の空気の綺麗さが感じられた。森林や田畑、家屋の形をはっきりと見ることができ、荒れ果てた荒土などは見かけず、一面の緑であった。羽田空港に着陸すると、その感覚がより強くなった。深呼吸をしたときのあの清々しさは忘れられない。また滑走路や道路では落ち葉やごみの一つも見かけず、すべてが私の想像していた通りであった。無限の期待や憧れとともに、私はこの土地に降り立った。今回の訪日活動で私は日本をさらに知りたいと思う。

今日私たちはJALスカイミュージアムを見学した。私は間近で飛行機が見られるということで、好奇心一杯で見学に臨んだ。まず私たちは展示エリアを見学した。ここには飛行機の各パーツの写真や実物、さらには各年代の客室乗務員の制服が展示されていた。また様々な業務の模擬体験や制服を着用しての記念撮影など皆はとても楽しい時間を過ごした。展示エリアの後方ではJALの今日までの発展の歩みが紹介されていて、飛行機の性能も次第に上がり、各設備も次第に整備されてきたといった過程を知ることができた。

その後私たちは格納庫を訪れ、スタッフが飛行機を整備している様子を直に目にした。そこではすべてが厳密であり、また整然としていた。日本人の仕事への細やかさや真摯さ、そしてルールを厳守するといった点はとても敬服すべきものである。またそこではスタッフからボーイング機の型番の見分け方についての紹介があった。さらに幸いにも安倍首相も乗る政府専用機を見かけた。またそこでは「安全第一・整理整頓」といった標語も印象深いものがあった。

JALスカイミュージアムの見学が終わり、私たちは飛行機で大阪に向かった。大阪に到着後は夕食をとり、宿泊先のホテルへ向かった。すべてが順調であった。

これから先の七日間の交流や見学を楽しみにしている。きっと様々なことを感じるであろう。

おやすみなさい、日本。また明日！

日　付： 11月24日（火） 1日目
大学名： 中央財経大学
氏　名： 粟鳴飛

今日は訪日活動の初日で、私たちは北京を出発し東京に到着後、JALスカイミュージアムを見学した。そしてここでの見学は常に驚きに満ちたものであった。

私たちはまず飛行機のコックピットやエンジンなどの見学をした。それらの隣には図や文字紹介があったのだが、私にとっては知らない単語が多かった。これには、日頃の地道な勉強や知識の蓄積が大事であると改めて思い知らされた。見学途中には見学者の記念用にスタンプコーナーもあった。スタンプは全部で5つあり、それぞれ専用の紙の上に押す。見学者はたとえ見学途中に多少疲れを感じても、この記念スタンプで疲れを和らげ、さらに見学への興味をかき立てることができる。これらのスタンプには日本人の細やかさと気配りが表れていた。

次いで私たちは格納庫を訪れた。中は大きく、様々な設備が置かれていた。またスタッフ用のロッカーや救急用医療設備などもあったが、全体的に非常に整然としていた。こうすることで美観の他、最大限に空間や時間を有効利用できる。例えば、突発事件があってもすぐに避難ができたり、或いは最寄りの医療設備で救助を行ったりできる。整然さは美観だけでなく、これほど重要な役割につながるものだとは知らなかった。

そしてここでの見学において、私はいくつかの大きな時計が設置されていることに気が付いた。数は多くないが、とても大きく、目立つ場所にあった。これこそ日本人の時間意識であり、いつでもどこでも強く時間を意識しているのである。

感想が多すぎて言い尽くせない。今日の活動は非常に有意義であった。明日以降の活動もさらに有意義なものに

なると信じている。

日　付： 11月25日（水）2日目
大学名： 北京師範大学
氏　名： 楊金鳳

今日は嵐山の周恩来記念碑を見学後、金閣寺に向かった。金閣寺は室町幕府第三代将軍足利義満が造営した「山荘北山殿」が始まりとされている。金閣は三層構造で、二層目と三層目には漆に金箔が押されている。屋根は「柿葺（こけら葺き）」が採用され、2-3ミリの板を重ねて作られており、最上部には鳳凰が飾られている。また一層目は寝殿造り、二層目は武家造り、三層目は中国風の禅宗仏殿造りとそれぞれ異なる建築様式が採用され、室町時代の代表的建築物と言えるものである。日差しの下、金色に輝く金閣はとても美しかった。

午後私たちはオムロン京都太陽株式会社を訪れた。ここでは多くの感動があった。その理由はFA、家電通信部品、自動車部品、社会システム設備、健康医療機器などの業務範囲の幅広さだけでなく、ここのスタッフはそのほとんどが障がい者であったことにある。 彼ら障がい者の一部は身体上の障がい（作業場で見かけた車いすに座りながら真剣に作業をしていたスタッフ）で、その他は精神や知力上の障がいである。また同社では障がい者へ仕事を提供しているだけでなく、彼らの職業技術訓練を行う他、医療スタッフを常勤させ健康管理も行っているとのことである。こうした企業のあり方は、障がい者は在宅で介護を受け、社会に出て仕事をすることができないという古い考えを打ち破るもので、障がい者を訓練し、彼らが仕事をしやすい環境をつくり、彼らの労働により彼ら自身の生活を多彩なものにすることで、より良い社会の実現につながるものである。私はこうした理念は中国が学ぶべきものだと思う。中国は人口が多く障がい者数も比較的多いため、もし彼らが前向きに生活をすることで社会に貢献することができれば素晴らしいことである。まさに「No Charity,but a Chance」というスローガンのように、障がい者への仕事の提供は慈善事業ではなく、より良い明日を創るためのチャンスなのである。

日　付： 11月25日（水）2日目
大学名： 北京師範大学
氏　名： 朴美陽

午前の見学では金閣寺と嵐山の美しい風景を鑑賞し、中国のものとは異なる日本独特の名勝地を体験した。そして午後はオムロン京都太陽株式会社を見学したが、今日の活動の中で最も印象深くまた強い衝撃を受けたのは同社での見学であった。

オムロン京都太陽のスタッフは、その約8割が障がい者である。障がい者の採用率のあまりの高さに、私の考えは思わず会社の採算問題に及んだ。しかし、見学を通じ私の心配は無用のものだとわかった。「No Charity, but a Chance」のスローガンの下、太陽の家による生活や健康指導、そしてオムロンによる技術訓練を通じ、同社は2年目には黒字を実現したのである。

この他、私が最も感動したのは宣伝ビデオの1シーンである。納税証明を受け取った障がいを持つスタッフが嬉しそうに「自分も国に納税ができた、自分も役に立つ人間なのだ」と言いながら、その証明書を貼り付けたのである。私は、一般の人は日頃納税を喜ぶことはなく、逆にいかに節税するかを懸命に考えていると思う。私たちは確かに障がいを持つ人に同情や思いやりの気持ちを持ったりするが、私たちが解っていないのは、彼らが必要としているのは思いやりだけではなく、それ以上に対等に向き合ってもらうことだということなのである。今回の見学で私はこの点を学んだ。

最後に、同社の見学において私たちが最も学ぶべきだと思ったのは、細やかさと細部へのこだわりである。例えば、知力に障がいを持つスタッフが通路を覚えやすいように、通路毎にそれぞれ色分けをする、そして左腕または右腕に障がいを持つスタッフをそれぞれ分業させ作業効率を高める、さらにパズル形式によりファイルの分類を行ったり、作

業台の高さを脚に障がいを持つスタッフが作業をしやすいように設計したりする等々、枚挙にいとまがなかった。

日　付：11月25日（水）2日目
大学名：北京理工大学
氏　名：蔡子孺

今日は朝早くから趙先生と大阪城公園を散策した。公園の空気はとてもさわやかで、多くの人が身体を動かしていた。その後私たちは嵐山を訪れた。そこは紅葉が彩りを添え、とても美しい風景であった。そして周恩来総理の記念詩碑『雨中嵐山』を訪れ、私たちはそこで周総理の当時の思いを朗唱した。その後私たちは金閣寺へ向かい、日本の寺院文化や地元の軽食などを体験した。

豪勢な昼食の後、私たちはオムロン京都太陽株式会社を訪れた。ここは太陽の家とオムロンが共同で設立した、障がい者へ仕事の場を提供する会社で、会社全体では約8割前後が何らかの障がいを持つスタッフである。また同社には「No Charity, but a Chance」というスローガンがある。ここで働くスタッフはいずれも様々な技能訓練と知識教育を通じて自立能力を磨いている。また同社ではスタッフそれぞれの状況に合わせた能力開発を行い、生産ラインを合理化している。例えば知的障がいを持つスタッフに対しては、部品毎に異なる色のランプで表示することで、複数の部品を順番通りに組み立てるといった作業を指導している。同社の見学中、私は感動しきりであった。スタッフそれぞれがひたむきに自分の仕事に打ち込んでいる。社会がその機会を与えれば、彼らはそれを活かし、社会に対して貢献をすることができるのである。そしてこうした公益性を持つ企業の存在は、優秀な企業は自身の発展のみを考えるのではなく、より社会的責任を持つべきであるということを示している。こうした理念は中国の多くの企業が学ぶべきものだと思う。

日　付：11月25日（水）2日目
大学名：北京外国語大学
氏　名：劉南星

嵐山、渡月橋、金閣寺、日本語学習者にとって教科書の中で見る挿絵や、また風景はがきのようなこれらの景色が自分の目の前に現れた時の感覚は、私が中学生の頃初めて北京を訪れ、天安門の駅から出て青空の下に映える天安門を目にした時と同じものがあった。

自然や文化的景観の見学はもちろん有意義なものであるが、より多くの収穫が得られたのは午後のオムロン京都太陽株式会社での見学であったかもしれない。オムロンは電子部品や体温計など多くの電子製品で名を馳せる企業であるが、そこに「太陽」の二文字が付いているのは、ここは障がい者に仕事の場を提供する会社だからである。この言葉そのものは一見ありふれているが、実のところ根本的な矛盾を内包している。

会社とは必然的に営利を求めるものであるが、同社では障がい者が生計を立て、さらには自立した生活を送れる場を提供するというのは、必然的に一定の公益性を有している。しかし同社の素晴らしいところは、営利と公益をうまく融合しているところである。見学時に目にした調節または分離可能な作業台、地面に色分けされて付けられた通路標識など様々な点が異なるハンデを持つスタッフに利便性を提供し、同時に生産効率を向上させている。ここでは効率と思いやりが高いレベルで統一また融合しているのである。

また特筆すべきはスタッフの管理方法だけではなく、物品の落下防止のためキャビネットの上部を三角形にする、またパズル方式でファイルの分類を行うなどのアイデアは、全ての企業においても活用できるものだと思う。

日　付：11月25日（水）2日目

大学名： 中央音楽学院
氏　名： 祝紅

今日も早くに起床し当日の予定に備えた。そそくさと朝食を済ませ、私たちは嵐山を訪れた。艶やかな紅葉の色が雲の中から見えるような景色はとても美しかった。ただ時間の関係でこの大自然の美しさをじっくり堪能することができず、私たちは直ぐに周恩来総理の詩碑を訪れた。この詩碑は1978年10月に日中平和友好条約締結を記念して建立された。詩碑を見学し記念撮影をした後、私たちはその場を後にした。

次いで私たちは金閣寺を訪れた。ここは外装に金箔が使われているため金閣寺と言い、1397年に建立され、1994年にユネスコの世界遺産に登録されている重要な歴史的建造物である。私はその壮大さに驚嘆させられた。記念写真を撮り、記念品や地元の軽食などを買った後バスに戻り、多少の休憩をしてから次の目的地に向かった。

昼、私たちは本場の日本料理を体験したが、本当にとても手が込んでいて、見ているだけでお腹が一杯になった。中国の食文化とは大きな違いがあるが、日本のこうした洗練された食文化も素晴らしいと思った。

食事を終え私たちはオムロン京都太陽株式会社を訪れた。私はこの会社はとても特別な会社だと思った。と言うのも同社は障がい者を雇用しており、ここでは彼ら自身の社会貢献や生きがいを見つけることができるからである。スタッフの案内で私たちは彼らの作業場などを見学したが、私は身体にハンデのある彼らがひたむきに仕事に取り組んでいる姿に衝撃を受け、彼らのひたむきさを私たちも学ぶべきだと思った。もちろん、身体のハンデが人生に影響を及ぼさないための同社のような思いやりのあり方も中国は学ぶべきである。

この日の夜は美味しい鍋に舌鼓を打ち、楽しく有意義な一日を終えた。

日　付： 11月25日（水）2日目
大学名： 中央財経大学
氏　名： 楊敏媛

今日私たちは古都京都にやってきた。道中は素朴な美しさを持つ街並みを楽しんだ。日本の一般家庭の一戸建て住宅やチョコレートのような外観のマンションからは、いずれも洗練された印象を受けた。京都では遠くを眺めると、ほとんどが二、三階建ての建物で、その多くが唐風建築であった。また古都としての趣を守るため、京都では高層ビルがとても少なかった。こうした点は中国の伝統文化保護や伝承において大きな参考価値があると思う。

午後に訪れたオムロン京都太陽株式会社はとても印象深かった。ここは障がい者を対象に仕事の場を提供している会社である。これまで私自身も社会的弱者を思いやらなければならないことは知っていたが、バスなどで座席を譲る、政府が手当を支給するといったこと以外に、彼らのために何ができるのか分からなかった。そして今日オムロン京都太陽株式会社を見学し、私はついに「授人以魚不如授人以漁（魚を与えれば一日の飢えをしのげるが、魚の釣りかたを教えれば一生の食を満たせる）」の本当の意味を知った。それぞれ左腕と右腕にハンデを抱えるスタッフを一本の生産ラインで組み合わせる、知力にハンデのある運搬スタッフのため通路を色分けする、視力を失った人のため音声式の体温計をデザインする、こうした数多くの細やかさがこの企業の真心を代弁している。理想と実現性の融合、これは私が感じた日本企業の特徴である。

私たちの見学は何らここで働くスタッフの仕事の邪魔にはならず、逆に彼らは、私たちが見学をすることでより多くの人に障がい者が自立できることを知ってもらい、それが将来的により多くの障がい者が職に就く可能性につながることを誇りに思う、という解説を担当したスタッフの言葉を聞いた時、私は彼らの強さに心から感動し、また敬服した。

日　付： 11月26日（木）3日目
大学名： 北京師範大学
氏　名： 王蓉

自分の通う大学内では日本からの留学生と交流する機会はあったものの、今回のように踏み込んだ討論をし、それを総括して発表するというのは初めてであった。同志社大学の学生は思考がとても活発で、討論の際に頻繁に新しい発見があった。私たちはD組で、選んだテーマは日中両国の文化における共通点と相違点であった。私たちは食、住まい、アルバイトそして恋愛などの面から両国の大学生生活を比較し総括した。

その際私たちに一点不足があったとすれば、それは私たちの組では最終的に訪日団のメンバーが発表を担当できなかったことである。私たちの組には日本の学生の他に一名上海から留学に来ている先輩の女子学生がいた。彼女は外向的で、私たちと日本人学生の交流をサポートしてくれ、とても良い人であった。そして討論が終わり発表者を決める時に、私は当初その日本語の上手さなどから北京外国語大学の陳鑫さんを推薦したのだが、なぜか他の人は先輩の女子学生を推薦したのである。だが今更ながら私はD組のリーダーとして、やはりその時私たち訪日団の学生に発表させるべきだったと思う。この点はミスであった。明日はまた発言する機会が有るので、私たちは積極的に訪日団の大学生としての良いイメージを示していきたいと思う。

皆の発表はどれも独創的でとても素晴らしかったが、特にA組は皆から好評を得ていた。彼らは演技をまじえて生き生きと両国の歴史上の文化的習慣の変遷などを紹介していた。私たちも彼らを手本にしたいと思う。

午後は同志社大学の学園祭に参加した。私たちは同志社大学の日本人学生の案内の下、人混みの中をあちこち歩き様々なイベントを体験した。学生手作りの美味しい軽食などもあり、皆とても生き生きしていた。私は、元気と活力に満ちているキャンパスだからこそ、その場にいるだけで自然と楽しさが伝わってくるのだと思った。

日　付：11月26日（木）3日目
大学名：北京理工大学
氏　名：高健

三日目、私たちは大阪を離れ再度京都へ向かい、同志社大学を訪れた。幸運だったのは、丁度同大学の140周年記念式典の時期であり、彼らが学園祭と呼んでいる祭典に参加できたことである。日本の大学の学園祭は、私に学校の記念式典に対する新たな概念をもたらしてくれた。同志社大学の学園祭は完全にカーニバルと言えるもので、様々な美食やパフォーマンスなどがあり、とても目新しいものであった。また私たちは同志社大学の日本人学生と交流を行い、両国の大学生の共通点や相違点などを学び、さらに中国から留学に来ている先輩学生からキャンパスを案内してもらうなど、同志社大学についてより多くを知ることができた。

夕刻が近づいた頃私たちは京都駅に到着し、そして新幹線で熱海に向かった。新幹線について私が驚いたのはそのスピードではなく、1964年からこうした高速の列車があったということである。

今日のハイライトは、夜宿泊した温泉旅館での豊富な懐石料理、楽しいパフォーマンス、そして心地良い温泉であった。一つ残念だったのは、恐らく冷たいものを食べたせいかお腹の調子が優れず、食事を食べきることができなかったことである。ただパーティーの司会を務めることができたのは、自分としてもとても嬉しかった。これまで色々なイベントの運営をしてきたが、パーティーの司会は初めてであった。それから温泉はとても心地良く、特に美景を眺めながらの温泉は格別であった。

明日から東京へ向かう。買い物三昧の日々が間もなく始まる。Keep going！

日　付：11月26日（木）3日目
大学名：北京外国語大学
氏　名：陳鑫

今日は早くに起床し、バスで同志社大学の訪問に向かった。同志社大学はさすがに関西の有名私立大学「関関同立」の一校だと思わせるものであった。まず午前、私たちは同大学の日本人学生と、両国の大学生生活や文化の共

通点や相違点についてテーマ討論をした。討論を通じて私たちは、アルバイトや食・住、学習そして恋愛などの面においては一定の違いがあることがわかった。その後、他の学生たちの前で手短ながら生き生きと討論の結果を発表した。また経済学部の八木匡教授のお話を通じて、私たちは東アジア文化を守っていくことの重要性を学んだ。

昼食をはさんで、私たちは同志社大学の学園祭に参加した。楽しい音楽や美食があり、また様々なイベントが多くの人を引き付けていた。個人的にはお化け屋敷やメイドカフェなどが興味深かった。

学園祭の後、私は個人的に同志社大学の歴史資料館を見学した。そこで創立者である新島襄のエピソードを知った私は同志社大学への敬意が深まり、大河ドラマ『八重の桜』を見ようと心に決めた。

その日の晩、私たちは熱海に到着し、旅館の懐石料理が私たちを出迎えてくれた。私たちは美味しい料理に舌鼓を打ちながら出し物を披露し、パーティーを楽しんだ。その後皆で温泉に浸かった。これは私にとって初めての温泉体験であった。

明日は東京に向かう、楽しみだ！

日　付： 11月26日（木）3日目
大学名： 北京外国語大学
氏　名： 劉思陽

三日目における最大の見どころである同志社大学の見学では、日本の大学生との交流を通じて多くの収穫があった。

午前の交流は主に同志社大学の紹介とグループ別のテーマ討論であった。同志社大学のキャンパスは赤レンガ建築を基調としており、建学理念は「キリスト教主義」、「国際主義」、「自由主義」を主としている。創立者の新島襄はかつて「一つの国を維持するのは決して二・三人の英雄の力ではなく、一国を形作る教育があり、知識があり、品性の高い人々の力によらなければならない。」と述べている。そして今日出会った日本の学生はまさに新島氏の言葉通り、知識が豊富であるだけでなく、思考や表現そして構成力なども素晴らしかった。そしてわずか1時間半のうちに、双方の学生はテーマ討論とその発表をつつがなく終えた。これは双方の学生の総合能力の高さを感じさせるものであった。

討論を終えた後は学園祭の見学であった。これまでは教科書での学習の際に学園祭については多少触れていたが、今日実際にその場にいられたというのはとても楽しい体験であった。日本の大学におけるサークル活動や学園祭というものは日本特有のものだと思う。中国の大学でもある程度のサークル活動があるが、その規模や質などは日本には大きく及ばず、ごく簡単なものである。こうした活動の展開は、学生の総合的資質やコミュニケーション力、また創造力の向上に役立つと思う。

日　付： 11月26日（木）3日目
大学名： 中央音楽学院
氏　名： 孫詩博

訪日三日目、ここ数日睡眠時間は多くなかったが、皆の情熱は冷めることはなかった。そしてこの日も朝食を済ませた後、同志社大学へと向かった。

同志社大学は京都にある世界的にも著名な大学であり、1875年に日本の著名な思想家の新島襄によって創立され、「最高の知識への追求とその共有」を校訓としている。

同志社大学に着く前は、日本の学生は人当たりがどうなのかわからず、内心多少の不安があった。しかし実際は、彼らはとても親切であった。そして熱のこもった討論が始まった。私たちは経済、文化、歴史、音楽など多くのテーマの中から両国の古代から現代にかけての恋愛の発展をテーマに選び討論をし、その後私たちはそれぞれ両国の古

代と現代のカップルを演じながら討論の結果を発表した。他のグループの発表もとても素晴らしく、会場の皆から大きな拍手があがっていた。昼食を済ませた後、私たちはキャンパスの見学を始めたが、丁度学園祭が行われていた。学園祭では多くのサークルの学生が多忙を極め、学生自ら出店を出し、彼ら自作の作品や食べ物などを販売していた。私たちはこうした場面を初めて目にしたこともあり、大いに楽しむことができた。そして同志社大学での活動を終えた後、私たちは新幹線で熱海に向かった。新幹線は中国の高速鉄道に似ていたが、中国より数十年早く普及している。そして熱海に到着後、私たちは温泉旅館に向かった。

私たちは美味しい懐石料理に舌鼓を打ちながら、訪日団の各校の出し物を楽しみ、そして少し気恥ずかしかったが温泉を堪能した。

日　付：11月26日（木）3日目
大学名：中央財経大学
氏　名：宋佳音

今日は訪日三日目で、大いに中日交流ができた一日であった。

長時間のバス移動を経て、私たちはついに同志社大学に到着した。実のところ、以前笈川先生のクラスで知り合った吉田翼さんのWeChatの記事で、同志社大学にて私たちの到着を待っていることを知っていた。私は彼がまだ北京大学で交換留学をしていた当時、彼と知り合った。

同志社大学は古色蒼然としていて、建物は西洋風であった。そしてテーマ討論の会場に向かう途中、私は吉田さんを見かけ互いに挨拶を交わした。会場に到着し私たちはAからGまでの7つの組に分けられ、各組毎に中日両国にまつわる様々な話題について討論を行った。

私たちの組の討論テーマは爆買い現象についてであった。同じ組には中国からの留学生もいたので、彼らが通訳をすることで言葉の心配をすることなく、皆は多くの意見を出し合い討論をした。その後私は私たちの組の代表の一人として、同じ組の日本人男子学生と一緒に討論の成果発表を行った。とても楽しかった。

夕刻私たちは新幹線で熱海に向かい、夜温泉旅館に到着した。新幹線は中国の高速鉄道のスピードより速い感じがした。

温泉旅館は和室で、私はこれに『5時から9時まで』のシーンを連想しとても嬉しくなった。夕食は懐石料理を堪能し、その後皆で色々な出し物を披露して楽しんだ。温泉に浸かった際、心から日本の化粧品の使い勝手の良さに感動した。

日　付：11月27日（金）4日目
大学名：北京大学
氏　名：邵典

朝18階のレストランで早朝の大海原を眺めながら朝食を堪能した後、2時間以上の道程を経て磯子火力発電所に到着した。

実は磯子火力発電所の見学については出発前から興味を持っていた。それと言うのも、環境保全やエネルギーはとても重要な分野であり、工業のモデル転換と汚染の問題が際立っている中国にとっては特に学ぶべき内容だからである。磯子火力発電所は東京に次ぐ2番目の大都市である横浜にある。同発電所はJ-POWERの最先端の火力発電所で、首都圏への電力供給という重責を担っている。窒素酸化物などの排出削減や環境保全のため、同発電所では設備の刷新を行い、「超々臨界技術」を採用することでエネルギー効率を世界最高水準に引き上げている。私たちは同発電所の先進技術や乾式脱硫脱硝装置などの環境対策設備の紹介を受け、こうした環境への配慮にとても感銘を受けると同時に、彼らの更なる環境保全のための努力に敬服した。

日本のエネルギー自給率は低いため、発電分野ではエネルギーの多様化を推し進めており、風力や天然ガスそして原子力エネルギーなどがますます重視されている。そしてエネルギー需要の高い中国では、クリーンエネルギーの開発やエネルギー効率の向上などは重視されるべきものである。そのためエネルギー企業には環境への責任意識を持ってほしいと思う。

ここでいくつか印象深かった点を挙げたい。あるスタッフが片膝をついて真剣に花に水をやっていた。そして100mの高さのボイラー建屋屋上から一羽の鳥が煙突の傍を飛んでいるのを見かけた。また見学を終えて戻る際、多くの男性スタッフが芝生の上でスコップを使い雑草除去をしていた。これらを目にした瞬間、心が温かくなる思いがした。

午後は法政大学を訪れ、王敏教授の講座を拝聴した。生活、民間習俗、民俗信仰や中国古典教育などの面から中日文化の共通点や相違点を紹介した講座の内容にはとても引き付けられた。そして王敏教授の中国古典文化の発信や文化に対する細かな観察にはとても感動させられた。

日　付：11月27日（金）4日目
大学名：北京外国語大学
氏　名：潘向茹

今日もまたスケジュールが充実していて、収穫も多かった。

午前に私たちは「J-POWER磯子火力発電所」を訪れ、同発電所の作業工程や発電の状況などについての見学を行った。ここではその詳細については割愛するが、私の個人的な感想などについて簡単に述べたいと思う。同発電所について私が最も感動したのは、一つにその先進的技術と大気汚染物質の低排出率である。「クリーンコールテクノロジー」を応用し、同発電所では「世界最高の発電効率と世界最低の大気汚染物質排出率」を実現している。さらに積極的に海外での発電プロジェクトに関わり、世界経済の発展と世界の環境保全に大きな貢献をしている。またJ-POWERの発電技術は世界のトップにあるが、そうした中でも資金を投入してより優れた技術の開発を継続している。こうした現状に満足をせずに成長を続けるという姿勢は、会社の発展のみならず国の発展においても必要不可欠である。感動したもう一つの点は、同発電所の美しい環境であり、とても目の保養になり清々しい気分になった。これらの面については中国も学ぶべきであると思う。

午後は法政大学の王敏教授の講座を拝聴し、とても多くの収穫があった。王教授は漢字文化から中日両国文化の共通点を分析し、私は中日両国にはこれほど多くの文化的共通点があったのかと、その内容にとても驚いた。それと同時に、中国と外国文化の比較研究において成果を挙げるためには、中国文化を充分に理解することが大前提であるということを再認識した。私たちは王敏教授のように中国文化をしっかり理解し、さらに中日両国文化における共通点や相違点そしてその背後にある原因などを絶えず研究していかなければならないと思った。王敏教授の中日文化研究における数々の成果に敬服すると同時に、私自身も将来自分の専攻する分野において何らかの成果を挙げたいと思う。もちろんそのためには自分の努力が必要であることは理解している。

今回、自身の人生目標がより明確なものになった。これこそ「あなたの話を聞くと、10年の読書に勝る」である。

日　付：11月27日（金）4日目
大学名：中央音楽学院
氏　名：韓天雅

今日はまず磯子火力発電所を見学した。バスを降りゲートから敷地に入ると、皆はまずその美しい環境に目を奪われた。それから宣伝ビデオを見て、同発電所について一定の理解を得た。磯子火力発電所は、1952年設立のJ-POWERにより建設された東京湾地区で唯一の石炭火力発電所である。またその石炭火力発電効率は世界のトップである。

続いて私たちはスタッフの引率の下発電所内を見学した。敷地内はとても綺麗で緑化率も高く、発電所だと言われなければ、まるで自分が庭園にいるような感じさえする。法規定では緑化率は15％を満たせばいいのだが、ここでは20％以上に達している。J-POWERは横浜市とそれまでの『公害防止協定』に代わり『環境保全協定』を新たに締結し、クリーンコールテクノロジーにより発電を行っている。敷地内に身を置いている私は、こうした環境への配慮を直に感じることができた。運転センターではスタッフの真剣な仕事ぶりを見学することができ、窒素酸化物や硫黄酸化物などは規定値以下で排出されていた。またボイラー建屋の屋上では発電所全体を見渡すことができ、それは周辺の街並みと一体化していた。さらに煙突からは汚染物質の排出は見られなかった。これには環境保全事業の重要性が垣間見られた。

磯子火力発電所の見学を終えた私たちは法政大学を訪れ、王敏教授の講座を拝聴した。その内容は9つの面からの中日文化の融合に対する考察というもので、講座を通じて日本の漢字文化が中国の漢字や古典文化を基にしたものであるということがわかった。そしてビュッフェディナーでは学校毎に組分けし、それぞれの専攻分野で王敏教授と交流を図り、沢山の収穫が得られた。今後自分としても、中日文化交流において何らかの役に立っていきたいと思った。

明日からホームステイだと思うと今から興奮と期待で一杯である。おやすみなさい。

日　付：11月27日（金）4日目
大学名：中央財経大学
氏　名：逯黛妮

豪勢な朝食の後、私たちは横浜の磯子火力発電所を訪れた。ここは火力発電とは言うものの、クリーンコールの利用などにより最大限の発電効率向上や汚染物質削減を実現し、一部の副産物については肥料の原料や建築材にするなど再利用に努めている。発電所全体は落ちた石炭のかけら一つ見当たらずとても清潔で、運転センターでは汚染物質濃度などを厳しくモニタリングしており、私のこれまでの火力発電所に対する偏見は完全に覆された。私は山西省の出身である。山西省は石炭で知られているが、大気汚染がひどく、石炭関連の事故が頻発することでも有名である。そして石炭が有効利用されていないことが現在でも問題となっている。石炭資源統合プロジェクトは小規模石炭採掘を淘汰する上では一定の成果があったが、火力発電においては目立った成果が挙がっていない。山西省としては磯子火力発電所のような技術が早急に必要であり、今後山西省とJ-POWERが省エネや排出削減といった面で提携できることを願っている。

午後、私たちは法政大学にて王敏教授の講座を拝聴し、多くの収穫が得られた。王敏教授からは漢字文化が中日両国文化において果たした伝承の役割について紹介があり、講義を通じて私の漢字に対する考え方が広がった。それと同時に王教授の研究方法も私にとっては大きな参考となった。何か面白い現象を見つけた場合は、なぜそうなったのかをよく考え関連資料を調べることで、その積み重ねにより結論を得ることができる。その後王教授から清朝末期に多くの学生が法政大学で学んだ原因やその過程、そしてその後の影響などについての紹介があり、私たちは法政大学が中日関係において果たした役割をさらに理解することができた。王教授は日本において独特のユニークな方法で中国文化を広め、さらに中日両国の繋がりや相違点などを研究することで中日友好交流とその発展に絶えず貢献されていてとても素晴らしいと思った。

日　付：11月28日（土）5日目
大学名：北京師範大学
氏　名：刁愛敏

今日は待ちに待ったホームステイの日である。北京を出発する前から1泊2日のホームステイがあることを聞いてい

て、今日この日まで私は、ホストファミリーはどんな方たちなのだろうと考えていた。

午前9時30分、他のメンバーがホストファミリーと出発していく様子を私が多少緊張しながら眺めていたところ、あるご夫婦が入室し私を伴ったのである。そう、彼らこそ私のホストファミリーの深澤さん夫妻であった。深澤さんとは事前にメールをしていて、まず私たちは横浜ランドマークタワーへ向かった。そして273mの展望フロアから周囲の建物や河川など美しい景観を堪能した。それから深澤さんとともに閑静な青葉台に到着した。午後の時間はとても楽しく、時間があっという間に過ぎてしまった。深澤さんは仕事の関係で頻繁に中国を訪れていて、現在でも中国語を勉強中とのことで、私たちも互いに教えあった。

夕食は深澤さんが自ら餃子をつくることになった。自分たちで具材を買い、餃子をつくる。私たち三人は厨房で楽しく作業をした。これには私は異国の地で自宅の温かみを感じた。

ホームステイ初日はあっという間だったが、深澤さんの家で私は日本人の細やかさや優しさ、そして綺麗好きといった点を体感した。明日も楽しみだ。

日　付：11月28日（土）5日目
大学名：北京理工大学
氏　名：李緒嘉

ホームステイ初日の今日はとても楽しかった。私は今日ホストファミリーから沢山の驚きと喜びをもらった。

今日の朝私たちは日中経済協会を訪れ、それぞれのホストファミリーが来るのを待っていた。そわそわしながら待つこと暫くして、30歳くらいの私のホストファミリーのご夫婦が迎えに来てくれた。奥さんは上海に2年ほどいたことがあり中国語ができた。私の性格は外向的なので、すぐに彼らとは打ち解けることができた。彼らと話をしていていくつか印象深かった点がある。まず日本人の仕事の多忙さである。ご主人は一日約5-6時間しか休める時間がなく、それ以外の時間は仕事や残業或いは通勤時間に割かれている。これには私は日本企業に対して多少の怖さを感じてしまった。次に彼らの家庭観である。自分の子供については、親は子供の彼らに十分な選択の自由を与えていて、彼らの結婚や出産、就職などについて親が強制することはない。こうした家庭的なストレスの少なさがある意味日本の出生率の低さにつながっているのかもしれないが、別の意味では若い世代の生活がより楽しく幸せであるとも言える。日中私たちは浅草寺やスカイツリーを見学し、日本の一般市民の日常的な「ワーキングランチ」を食べたが、とても美味しかった。私が食べた冷やし蕎麦の味は今でも忘れられない。

夕刻になりホストファミリーの御宅に到着したが、まるでドラえもんやクレヨンしんちゃんといったアニメに出てきそうな印象を受けた。私はついにこうした光景を目にすることができた。夕食は自家製の海苔巻きで、とても美味しく、これこそ日本という感じがした。

日　付：11月28日（土）5日目
大学名：中央音楽学院
氏　名：劉書辰

今日は今回の訪日活動におけるクライマックスとも言える皆が期待していたホームステイの日である。

朝早く、皆は子供の頃のように荷物をまとめ、待合室で「父母」の迎えを待っていた。

私は比較的早い段階でホストファミリーと対面することができた。互いに挨拶を交わした後、私たちは東京で最も大きな魚市場へと向かった。そこでは前日に海で捕れた沢山の魚が並べられていた。これらの魚を見ながら私は、日本の国土がさほど大きくはないため、輸送なども自然と速いのだろうと思った。

暫しの買い物を終えた後、私たちはホストファミリーの御宅に到着し夕食となった。その際、私が気になっていた点について語り合った。

私は、日本の子供が寒い冬に脚を露出させていても親がそれを諌めないことがなぜなのか不思議であった。これに対してホストファミリーからは、昔から日本では健康な子供は寒さへの抵抗力があると考えられていて、その抵抗力を高め子供がさらに健康になるためにこうした習慣は現在まで続いているとのお話があった。個人的には理解しづらかったが、それでも理に叶った回答が得られたと思っている。

また私のホストファザーは、これまでアメリカやシンガポール、そして中国などで仕事をしてきた方で、そのため娘さんや息子さんも様々な経験をしてきたことを知った。また中国在住時は北京で生活しており、しかも私が通う大学でピアノを学んでいたそうである。

こうした思いもよらない縁で今回出会えたことに、私は世界とは大きいようで小さいものなのだと感じさせられた。今回は短い時間の触れ合いだが、まだ先は長いのである。特別な縁を持つ私たちが将来北京で再会できることを願っている。

日　付：11月28日（土）5日目
大学名：中央財経大学
氏　名：高鵬崢

人と人との縁は本当に大切にすべきだと思う。

直美ちゃんとしげちゃんからは本当に多くの感動をもらった。

出発前のメール連絡の際、私はしげちゃんとなおちゃんに東京タワーや皇居、或いは藤子・F・不二雄ミュージアムなどどこでも良いから行ってみたいと伝えていた。結果直美ちゃんはそれらすべてに連れて行ってくれた。道中では荷物を持つのを手伝ってくれて、さらに様々なスポットについて詳しく説明してくれるなど、初めの頃の緊張はもうなくなっていた。東京タワーでは丁度ワンピースの展示会があり、とても楽しめた。そして藤子・F・不二雄ミュージアムでは、内部の撮影はできなかったものの、ドラえもんの原稿を直に目にすることができた。ドラえもん好きの人にとっては、これ以上嬉しいことはないと思う。

三カ所の見学を終えて、私たちはなおちゃんの御宅へと向かった。そこでは格好良いしげちゃんが早々にご飯の準備を済ませ私たちの帰宅を待っていた。そこで感動したのは、私が辛いもの好きだということを知り、しげちゃんが麻婆豆腐を作ってくれたことで、しかも私の父親が作る味と同じだったことである。

夕食後は、しげちゃんとなおちゃんと三人でおしゃべりをした。その際来年私が福岡大学に行くと言う話になり、しげちゃんは学校のHPから様々な情報を調べ、学生寮などの資料をプリントアウトし私に詳しく教えてくれた。おかげで私は学校の状況などについてより理解を深めることができた。これにはとても感動した。

これほど優しく親切なご夫婦と知り合うことができたのは、まさに前世の福が訪れたものだと思う。

日　付：11月29日（日）6日目
大学名：北京大学
氏　名：劉益瀚

朝8時に起き、ホストファザーと一緒に自転車で近くの羽田図書館へ行った。

羽田図書館は地域の図書館で、中国で言うところの社区（コミュニティ）における図書館に当たる。ここは大きくはないが、とても静かであった。しかし中国の図書館はいつも騒がしく、大きな笑い声や電話の相手がよく聞こえるような大声で話す声が聞こえている。この点については、両国には大きな違いがある。

違いがあるのは、地下鉄やエスカレーターもそうである。日本の地下鉄やエスカレーターは混み合っていないわけではないが、驚くほど整然としている。エスカレーターでは皆が一列に並び左側に立ち、右側は道を急ぐ人の為に空けている。地下鉄のドアの前では、乗客はドアの両脇にならび、真ん中を下車する人のために空けている。こうするこ

とで乗車や下車そして上り下りの効率が良くなるのである。それに引き替え中国では、皆が元気一杯に押し合いをし、新興国の活気に満ちている。

ホームステイに話を戻す。今日の午後ホストファミリーとお別れをした際に、彼らから沢山のプレゼントをいただいた。またホームステイ期間中は私に様々な経験をさせてくれるなど、彼らには心から感謝している。

日　付：11月29日（日）6日目
大学名：北京大学
氏　名：曽瑩

ホストファミリーとの最終日は、日本最大級の観覧車や水族館で遊び、ジャンクフードを食べ、ディズニーランドで記念品を買ったりするなど、私は旅行客ではなく家族としての過ごし方を体験した。また私が中国の朝食では米を食べる習慣がないと伝えた際、ホストファミリーはわざわざベトナムビーフンの作り方を調べ、私の為に朝食として作ってくれた。とにかく嬉しかった。

実のところ、日本に来てからは最高級ホテルでの生活や食事が続いていたため、ホームステイ当初は多少の戸惑いがあったが、それでもすぐに溶け込むことができた。私は日本の一般家庭で、ゲストとしてではなく一人の一般人として日本での生活を体験し、日本の政府、社会、コミュニティ、商業、教育などがどのように日本という国を形成する最小単位である一般家庭に影響を与えているのかを感じることができた。これはとても貴重な経験だと思う。この経験はファンタジーではなく、私に実際の生活というものを教えてくれた。日本の福利厚生はとても素晴らしく、ホストファミリーの御宅の傍には大きな公園があった。そこには観覧車、発着場や水族館などがありバーベキューも楽しむことができる。ホストファミリーが言うには、週末にはよくこの公園を訪れ、散歩やバーベキュー、桜の季節には花見をしたりするとのことであった。こうした生活は中国ではほとんど目にすることのないものであるが、『クレヨンしんちゃん』や『ドラえもん』、またエレクトロニックアーツ社の『シムシティ』では見たことがある。私はこうした生活はとてもいいと思う。

先進国において、一般市民は幸せだと私は思う。彼らには完全な社会保障制度がある。例えばホストファミリーの御宅のある地域にはチャイルドケアセンターがあり、無料開放されている。そして素晴らしい居住環境と社会秩序がある。この数日間で私も自然と「すみません」と「ありがとう」を覚えてしまった。またこの6日間空はずっと澄み切っていて、空気もとても清々しく、海は青く、河川の水も澄んでいる。ここは多忙だが繁栄している街であり、本当の意味で「先進」の二文字にふさわしいと思う。

私の祖国もいつの日か「Developing」の「ing」が「-ed」に変わり、活力と積極性を保つと同時に、遅れた・効率の悪い・朽ちた・進歩を遮るといった要素を拭い去り、本当の意味での大国になることを願っている。

日　付：11月29日（日）6日目
大学名：北京師範大学
氏　名：臧暁慧

今日はホームステイの2日目である。ホストファミリーの御宅では猫を3匹飼っていたが、元々猫が苦手な私は最初とても怖かった。しかし3匹ともとても大人しく、カーペットの上で毛糸玉のように丸まっている様子はとても可愛らしかった。そして私は実際に手で触れることができ、従来からの恐怖心を克服できた。これにはホストマザーの言うとおり、何をするにおいても初めから怖がり「私には無理」と言って諦めるのではなく、結果がだめでも、まずはチャレンジしてみることが大切なのだと改めて感じた。

今日はホストファミリーのお母さんやお兄さんと東京ディズニーランドを訪れた。そこでは沢山の幼少時代の思い出や童話の世界、そして美しい建物や楽しい雰囲気に触れることができた。さらに印象に残ったのは、各アトラクションでの行列の整然とした様子やスタッフの礼儀正しさであった。楽しい音楽や雰囲気の中で、園内が人だかりであろうと、

皆がいらいらすることなく並んで自分の順番を待っていた。そして一日中陽射しの下で立ち仕事をしていても、スタッフは明るく元気にあいさつをし、笑顔を絶やすことなく注意事項などを説明していた。

今日のディズニーランドの旅は、乙女心や童心を取り戻す以上に学習の旅となった。夕方になり約1日半のホームステイが終わり、名残惜しくもホストファミリーとお別れをした。これから気持ちを落ち着かせ、明日からの活動に備えたいと思う。

日　付：11月29日（日）6日目
大学名：北京理工大学
氏　名：杜奕聡

今日の朝、ホストマザーが私に浴衣を着せてくれて、さらに記念写真を撮ってくれた。先日の旅館で着たものに比べ、今日着たものはより本格的で、着付けもより複雑であった。幸いホストマザーは京都での学生時代に着付けを学んでいたそうだが、今では若い人の多くは和服の着付けを知らない。伝統要素が伝承していく過程で次第に薄れ変化していくという点は両国が抱えている問題である。朝私はホストファミリー三人の普段通りの週末の生活を体験した。まずできたてのパンを売っているパン屋にやってきた。ここはパンの種類も豊富で、しかも無料でコーヒーを楽しめることもあり、多くの人がここで朝食をとっていたが、店内はとても整然としていて、しかも皆がごみを持ち帰りテーブルは綺麗に片づけられていた。一般家庭の日常生活を体験することは私の願いであった。私はこれまでアニメなどの影響を受け、一般の日本人の生活や仕事などはとても大変で、収入こそ多いが物価も高く、生活の質の面では良いとは言えないものだと思っていた。今回は賑やかなそして発展している日本を体験したが、それでも日本の特に優れているところしか目にしてこなかったような気がする。そしてこのホームステイにおいて、私は一般家庭の日常生活を通じて日本人の家庭や仕事、教育レベルや週末の生活など直接的な認識が得られた。住民用の施設や商店、公園ひいては百円ショップなどで自分自身様々な発見があった。物価は高いものの、高すぎるわけではなく、収入レベルに比べれば一般市民の生活の質はとても高いと思った。千葉のマンションの賃貸料金は人民元換算でひと月6000元もするが、日本の若い世代の中では賃貸そのものは広く受け入れられており、高い不動産価格が住宅ローンに苦しむことには直結しない。

日本人は年老いても自分自身の生活を追求するため、さほど孫の面倒を見たりはしない。複数の子供による家庭と父母からの直接教育は、多くの中国の子供が経験することの出来ないものであり、これは子供同士の助け合いや他人への思いやり、そして強い意志を育むうえでも有利な家族形態だと思う。

日　付：11月29日（日）6日目
大学名：北京外国語大学
氏　名：賈子赫

前の晩は夜更かしをしたため、この日は9時半にようやく目が覚めた。朝食は典型的な日本の朝食でとても美味しかった。そして食後少しの休憩をはさんでから外出した。

浅草寺に到着した。そこはとても人が多く、沢山の中国人も見かけた。彼らのイントネーションから、中国の南方出身の人が多いように思えた。それ以外にも様々な国からの観光客を見かけた。昼食は醤油ラーメンで、並んだ甲斐があると思えるほど美味しかった。

午後は皇居へ向かった。その際幸いにも皇后陛下が車で外出される様子を目にすることができた。

そしてお別れの時間となった。とても辛かったが、明晩の懇親会にも出席されるとのことだったので安心した。

その日の夜はお台場に行き、ショッピングなどを楽しんだ。

昨日は夜更かしをしたため、今日はとても眠い。早く寝たいと思う。

日　付： 11月29日（日）6日目
大学名： 中央音楽学院
氏　名： 朱瞳瞳

今日の予定は3つ。美術館と浅草寺に行き、そしてスーツケースを買うこと（買い物をし過ぎて荷物が収まらなくなったから）である。

今回は私にとって4回目のホームステイで、さらには4カ国目の体験になる。今回はやはり同じアジア人ということで、とてもリラックスすることができた。ホストファミリーの中では、お母さんだけが中国語を話せるため、自然とお姉さんやお兄さんそしてお父さんとの交流は少なくなったが、それでも私は彼らの優しさや友好を感じてとても嬉しかった。

これまで多くの国で少なからず滞在してきたが、やはり日本はとても洗練されていると感じた。またこれには日本人の信用の高さの理由がわかった思いがした。

今日はモネ展を鑑賞した。これまで数少ない中国でのモネ展を、私は幼いころに見たことがあるが、今回日本で鑑賞できて嬉しかった。また展示内容はとても衝撃的で、お母さんやお姉さんもとても満足していた。

残念なことに時間があっという間に過ぎたため、夕方ホストファミリーとお別れをし、訪日団に合流した。本当に名残惜しかった。人と人にとって言葉が通じないことは問題ではなく、心さえ通じ合っていれば、どこでも優しさを感じることができるのである。

日　付： 11月29日（日）6日目
大学名： 中央財経大学
氏　名： 車佳寧

一言で言い表せない今日6日目、横田さんの息子さんは、塾の前に彼の好きな公園で私と散歩をするためだけにわざわざ早起きしてくれた。これには嬉しく思うと同時にすこし申し訳なかった。また私は多くの買い物を頼まれていたため荷物はとても重く、横田さんは息子さんに荷物を持たせていた。彼はとても紳士的だった。

次いで横浜での「暴走」の一日が始まった。まず横田さんは私を連れて息子さんを塾に送り届けた後、造船所に向かった。ここはかつて繁栄を極めた海を埋め立てて造られた造船所で、現在では広場となっている。海風に吹かれて、真っ白な鴎を眺めながら、私の未来について横田さんと意見を交わした。大学生は色々な経験をして視野を広げるべきだと横田さんは励ましてくれた。

今回横田さんのおかげで、私は天皇・皇后両陛下を目にすることができた。両陛下はニュースなどで見かけるのと同じように優しい雰囲気で、周囲の人々も道路脇から両陛下の健康を願う言葉をかけ、両陛下も笑顔で手を振りながらそれに応えていた。私はこうした光景から、民衆の両陛下に対する思いやりや好意を感じることができた。

日本の街中を歩いていると、時折街頭でパフォーマンスをしている人に出くわす。私たちは彼らのユニークなパフォーマンスを笑い過ぎて涙が出るほど楽しんだ。これは忘れられない思い出となった。

残念ながら時間が短く、横田さんとお別れをする時間となった。今日は一日歩き通しだったので、私を送り届ける途中、横田さんは地下鉄で寝入ってしまった。私は車窓から西日を見つめながら、心が感謝で一杯となった。

11.29　横浜

日　付： 11月30日（月）7日目
大学名： 北京大学
氏　名： 邢仕傑

今日は住友商事と三井住友銀行を訪れ、多くの収穫が得られた。

午前私たちは三井住友銀行を訪れ、グローバル・アドバイザリー部の部長のお話の中で同グループは400年以上

の歴史があり、現在三井住友銀行は世界に70以上の拠点を持ち、業務範囲は投資信託・物流・信用評価そして資金調達などに及んでいることを知った。

その後訪れた住友商事での最大の収穫は企業の価値への追求ということであった。彼らは自社利益のみを追求するのではなく、国や社会への約束事や使命も重んじていた。こうした点も中国企業が学びそして実践していくべきものだと思う。

日　付：11月30日（月）7日目
大学名：北京大学
氏　名：郭家棟

今日は私たちの訪日活動の終わりから2日目で、多くの予定が組まれていた。個人的に印象深かったのは中国大使館への訪問であった。中国大使館は閑静な庭園の中にあり、国章を見かけた瞬間、言葉にできない感激がこみ上げた。

私は大使館で中国と日本の未来関係への考察と展望をテーマに発表をした。大使夫人は中日関係の歴史と動向を細かに分析されていて、私としても多くの収穫が得られた。特に大使夫人の日本の歴史についての分析では、広く資料を引用されていて、私はとても敬服させられた。

中国と日本の関係については、私が幼いころから興味を持っていた話題である。私は今回直に日本を訪れることができ、見識を深めることができた。今後もこうした活動において両国の友情が深まることを願っている。

日　付：11月30日（月）7日目
大学名：北京師範大学
氏　名：王蓉

「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」

なんと立派で気迫のある言葉であろう！これには孫中山と梅屋庄吉との偽りのない友情とその友情の深さを感じさせられた。また私はこの時、「弱水三千，只取一瓢飲（『紅楼夢』中の一文。この世に美女は沢山いるが、愛するのはあなた一人だけ、の意）」、「山无棱天地合，乃敢与君絶（漢楽府の民謡『上邪』の一節、山がなくなり天と地が合わさらない限りあなたとは離れることはない、の意）」といった誓いの言葉を思わず連想した。

今日は日比谷の松本楼を訪れた。辛亥革命時期、孫中山は日本での亡命時に梅屋庄吉の邸宅に一時的に身を寄せていた。梅屋庄吉はその当時頻繁に宴を催し、孫中山を日本の各界の人物へ引き合わせ、さらに物質的や精神的にも自分の盟友そして義兄弟である孫中山のために援助を行った。松本楼は現在でも開かれており、階下には宋慶齢がかつて使っていたピアノが陳列され、当時へ想いを馳せることができる。

この他今日は三井住友銀行と中国駐日大使館を訪れた。

大使は不在で、大使夫人だけだったのは少し残念であった。大使館では各学校の代表者が様々な角度から今回の活動への感想を述べた。例えば北京大学は中日関係、北京師範大学の私は現代の大学生の歴史的使命と責任、中央音楽学院は日本古典音楽といった異なる観点から感想を述べた。立脚点と角度の違いは私に多くの啓発をもたらし、自身の思考能力を高めることができた。

その後住友商事株式会社を訪れ、そこでは懇親会も開かれた。懇親会の席上、私はホームステイや観光そして全体的な印象などについて環境・CSR部部長の角田裕一さんと交流し、その際私はすべて日本語で答えた。角田さんは私の日本語会話能力に驚き、師範大学のその他の学生も呼んで楽しく交流し、最後に記念撮影をした。私はこの時、自身の日本語のレベルが大きく向上したことを感じ、とても嬉しかった。

日　付： 11月30日（月）7日目
大学名： 北京理工大学
氏　名： 平安

今日は最終日の1日前である。

朝の起床時はおそらく昨晩あまり休めなかったせいか、とても疲れを感じていた。それでも幸い今日の予定には影響はなかった。

午前は三井住友銀行を見学し、管理担当者2名による三井住友銀行本店と中国関連業務の紹介に耳を傾けた。同銀行は非常に実力のある銀行で、多くの国に支店を開設し、中央アジア地域においては特に強い影響力を有している。また紹介ビデオを通じて、同銀行の歴史や優位性などについてより深く理解することができた。

昼は、松本楼に向かい昼食をとった。非常に立派な建物とそこでの食事には目がくらむようであった。そこではさらに孫中山と梅屋庄吉に関する紹介ビデオを見て、彼らの深い友情には多くを考えさせられた。「高山流水（自分を理解してくれる真の友人の例え）」という言葉があるが、私はこれこそ二人の友情を最もよく表す言葉だと思う。

午後、私たちは中国駐日大使館を訪れ、大使夫人や各スタッフと交流を図った。その際各大学の代表者からそれぞれ今回の活動に対する感想の発表があり、その中から自分自身も多くを学んだ。そして大使夫人からは中日関係などについてのスピーチがあり、私たちは日常知り得ない多くの状況について知ることができた。

最後に私たちは住友商事株式会社を訪れた。そこでは出口部長から歓迎のあいさつをいただき、さらに同社の社会的責任感や企業文化などを知ることができた。

その後私たちは同社での懇親会に参加し、同社スタッフとの交流を通じてより多くの状況について知ることができた。

明日は最終日である。忘れ難い一日になることを願っている。

日　付： 11月30日（月）7日目
大学名： 中央音楽学院
氏　名： 孫詩博

帰国の日が近づくにつれ、帰国への嬉しさも高まってくる。今日は7日目で、明日には帰国となる。

今日はまず三井住友銀行を見学し、現代的な世界レベルの銀行の様子を垣間見ることができた。ここでは同銀行の管理担当者より同銀行の歴史・未来への展望そして目標などについての紹介があった。

昼は、日比谷公園内の松本楼で昼食をとった。ここはかつて梅屋庄吉が孫中山と宋慶齢を招いた場所で、孫中山がここで日本の各界の人物と親睦を深めたことは、将来の革命事業に非常に大きな影響をもたらした。「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」、国の枠を越えたこの友情は末永く記録されている。

午後私たちは中国駐日大使館を訪れた。私たちはここで中国の力、国際社会における影響力を垣間見ることができた。ここでは各学校の代表者が今回の活動の感想をそれぞれ述べた。私の発表テーマのキーワードは思い入れと熱愛であった。これは私が日本での体験を通じて最も印象深い言葉であった。

夕方からは住友商事を見学した。同社での懇親会の席上、私はホストファザーと再会することができ、とても嬉しかった。そして皆はその場を心から楽しんでいた。

そして、帰国へのカウントダウンが始まった。

日　付： 12月1日（火）8日目
大学名： 北京師範大学

氏　名：王言

今日は日本での最終日で、本来は早起きの必要はなかったが、私はなぜか早い時間に目が覚めてしまった。そして荷造りをしたのだが、心の中は帰国への嬉しさと日本を離れる寂しさが入り混じった、何とも言えない気持ちであった。そして9時30分から、ホテルニューオータニのエコ施設の見学が始まった。ここの見学で印象深かったのは、ごみの分類回収である。ホテルではごみの分類がとても厳しく、ごみの種類も様々であった。ここでは魚や肉そして野菜などの生ごみも作物の肥料や動物の飼料に変えることで、再利用のサイクルを構築していた。

午後は歓送会で、私のホストファミリーも駆けつけてくれたが、その中でも2人のお子さんはその日ちょっとしたアイドルとなり、皆はこぞって彼らと記念写真を撮っていた。「お母さん」は今日もとても綺麗で、和服に身を包んでいた。また、「お父さん」はスーツに身を包みとても格好良かった。そして彼らが私へのプレゼントを用意してくれ、「また日本へ来てね」と何度も声をかけてくれたことにはとても感動させられた。

最後に私たちは感謝の気持ちを込めて歌を披露し、お別れをした。この8日間お世話になった全ての人、中国日本友好協会と中国日本商会、横山さんと中島さん、今回の活動のため尽力いただいた日本の皆さんに対しての沢山の言葉は、今この時ばかりは「感謝」の二文字しかない。有難うございました。

さようなら、日本！

日　付：12月1日（火）8日目
大学名：北京理工大学
氏　名：趙雨涵

今日は日本での最終日である。朝7時半に起きて着替えを済ませ、外の景色を眺めた。天気は快晴、街の様子は相変わらず忙しそうで、ホテル内の庭園はいつものように静まり返っていて、それら全ては私たちが来た時と変わりはなかった。「軽軽地我走了，正如我軽軽地来，我揮一揮衣袖，不帯走一片雲彩（詩人徐志摩の詩の一節。来た時と去る時で変化がない、の意）」、時間が間もなくお別れという瞬間で静止すると、そこで変わるのは世界ではなく、自分自身の内面である。この見慣れた建物やこの晴れた空を今度はいつ見ることができるのだろうか。本当に名残惜しい。

私たちが今回の忘れ難い旅をより記憶に留められるように、ということであろうか、最後に私たちが宿泊したホテルニューオータニの見学をした。このホテルはその斬新な視点により私の思考の幅を広げてくれ、私はホテルの発展モデルについて改めて考えさせられた。

ホテルニューオータニは1960年代に建設され、今日まで50年余りの歴史を有しているが、外観や内装などからは、時間の経過により本来の華麗さや豪華さが失われた様子はなかった。ただ勿論、外観はホテルニューオータニとその他のホテルを区別する要素ではなく、その違いは同ホテルが有するエコ施設にある。同ホテルには二つの客室棟があり、年間の電力消費は約1億円規模だが、同ホテルの地下三階に3台の発電施設があることは想像できますか？なんとここではホテルが自家発電をしているのである。発電量そのものは補助的なものではあるが、独自の発電施設があること自体が素晴らしいことである。その後の見学により、微生物の作用を利用し中水をつくる汚水処理設備やごみ処理施設など様々な設備を目の当たりにした。特筆すべきは、同ホテルが生ごみから有機肥料をつくり、作物の育成や家畜の飼育に役立てていることである。この他にも様々な再利用が行われていたが、ここでは省略する。

ホテルニューオータニを見学し終わった私の第一印象は、ここはすでにホテルの概念を超えている、というものであった。というのも、私の印象の中ではこうした設備のあるホテルはなかったからである。ホテルの役割やあり方は、いかにゲストにより良いサービスを提供するかという点にあるべきで、その他のホテルはその点を確かに満たしている。そしてホテルニューオータニもその点を満たしているが、ここはその先を行く快適さの裏にある環境に対する優しさも満たしている。これは新たな発展モデルである。単に環境保全意識というだけでなく、私はこうした背景にはブランド意識と競争意識があるのだと思う。一ホテルとして、いかに自身に競争力を持たせるか、効率的で優れたサービス以外には

何があるのか、私は別の重要要素として運営コストの低下があると思う。だが電気や水そして食物は買わなければならず、優れたサービスを提供するためのコストは安くはない。それではいかにコストを下げるのか、私は自分たちでやれることは全てやり、中間コストを下げることだと思う。これこそ、ホテルニューオータニが自身で発電や浄水などの施設を設置している理由になっているのかもしれない。廃棄物の再利用はコストの大きな節約につながり、再利用で生み出した有機肥料などはさらなる利益につながる。設備投資にお金がかかるという人もいるかもしれないが、同ホテルのスタッフの紹介によると、有機肥料を例にとると、4年間で投資コストが回収可能とのことである。これこそ先見性というものである。しかも環境保全は重要な課題であり、人々にも受け入れられやすい。低コストと優れた品質を兼ね備え、会社は自然とより大きな影響力を獲得することができる。これも一つのPR手段である。

私は、こうしたモデルは一挙両得のものであり、私たちも学ぶべきものだと思う。

日　付： 12月1日（火）8日目
大学名： 北京外国語大学
氏　名： 劉思陽

今日は訪日の最終日である。午前はホテルニューオータニの汚水処理やごみの回収分類そして発電などのエコ施設を見学した。ホテルニューオータニに泊まった3日間、その豪華な施設や素晴らしいサービスだけに目が行っていたが、ホテルの地下にこれほど先進的な汚水処理や発電の設備があるとは思いもしなかった。こうした設備は恐らく中国のホテルにはないものだと思う。

昼の歓送会には一部のホストファミリーも参加した。席上、学生代表などから今回の8日間の訪日活動についての感想の発表や感謝の言葉などがあり、学生全員で「小手拉大手（「風になる」の中国語カバー曲）」を歌い歓送会は円満に終了した。

8日間の日程を振り返ると、食や住の面ではどれも一流で、目にしたものは日本でも最良の一面であった。ほとんどの場所はホテルの高層階の部屋や企業の最上階で、そこから日本の景色を眺めていた。東京の夜景はきらびやかではあったが、人の温かみというものは少ないような印象を受けた。ホテルの高層階で食事をしている時、自分の目にしている整然とした日本は本当に日本の全てなのだろうかと、私は常に考えていた。もし機会があれば、私は朝の満員電車や街中の一般的な食堂など一般市民の目線で日本を体験し、日本の別の面を理解したいと思っている。

いずれにしても、今回の旅はとても意義深かった。今回の活動で私は自分の中で日本の輪郭を描くことができた。そして具体的な内容については、これから先私自身じっくりと埋めていく必要があると思う。

日　付： 12月1日（火）8日目
大学名： 北京外国語大学
氏　名： 崔正佳

8日間の日程も最終日となった。時間が経つのは早いもので、仲良くなったと思ったらすぐにお別れである。中国のPM2.5が充満する天気を考えると、帰りたくなくなった（笑）。

私たちは今回の日程のほとんどでホテルニューオータニを利用したが、今日ついにこのホテルの「バックストーリー」を目にすることができた。ホテルニューオータニの規模はとても大きいため、水や電気そしてガスなどの需要も大きい。そこでコスト低減や浪費の減少のため、同ホテルでは自身の発電設備を有し約3分の1の電力をまかない、汚水処理により中水を作り、トイレの洗浄や花への水やりに利用し、生ごみから有機肥料を作り農家へ提供している。こうした再利用システムにより物質的浪費をおさえている。

昼の歓送会にはホストファミリーが多数駆けつけてくれた。正装した私の「お父さん」を見かけて私はとても嬉しかった。「お父さん」はこれまでたくさんの人を招いてきたかもしれないが、私にとってはたった一人の日本のお父さんとお

母さんなのである。2日間という時間は短いが、それでも同じ時を過ごし互いに友情はあるのである。私たちが披露した歌についても、事前に何度も練習してはいたが、実際に歌う際にはとても泣きそうになった。温泉・古跡・夜景など寒さの厳しい北京から日本の中へと、歌詞の多くが今回の私たちの体験と重なり、この数日の様々な場面が次々に思い出された。当初の見知らぬ関係から今では皆の仲がとても良いこの訪日団の解散は、とても名残惜しい。

皆さんとお別れをする際はやはり「ガラス拭き」であった。私たちを乗せた車が何度か角を曲がっても皆は手を振り続けていた。訪日団の皆、そして今回の訪問のために様々な準備をしてくれた全ての人を名残惜しく思う。

20歳の時期にこうした機会が得られたことは本当に貴重であり、帰国してからも今回学んだことを活かし、自分の生活に役立てたいと思う。

日　付： 12月1日（火）8日目
大学名： 中央財経大学
氏　名： 粟鳴飛

今日は最終日で、他の学校のメンバーやホストファミリー、そして日本とお別れとなり、確かに名残惜しいものがある。それでも私は再会できる機会はあると思っている。

主に述べたいのは2つ。まずは「月有陰晴円缺，人有悲歓離合（蘇東坡の詩の一部、月には欠ける日があれば、満月の時もある。人には楽しい出会いがあれば、悲しい別れもある、の意）」ただし「海内存知己，天涯若比隣（王勃の詩の一部、心の知れた友がいれば世界のどこにいても近しく感じる、の意）」ということである。今日は訪日活動の最終日だが、私たちが堂々と生きていくことでいずれ再会できると私は信じている。旧友を忘れず、新たな友情を育んでいくことが大切である。

もう一つは感謝の気持ちである。今回私たちに有意義で思い出深い8日間を過ごさせてくれた運命に感謝するとともに、中国日本友好協会や中国日本商会、そして各先生方や今回の活動に尽力いただいた全ての方たちに感謝をしている。初来日だった私にとっては、毎日が思い出深く、京都の静かな佇まいや、大阪そして東京の発展ぶり、ホームステイ先での日常生活などすべてが昨日のことのように思い出される。私は今回の活動に参加できてとても幸運だった。だからこそ私は今回の活動中の毎日において、感謝の気持ちを表すべく振舞ってきたつもりである。帰国してからも、私は自分が身を以って体験した日本の清潔さ、日本人の時間概念と環境保全意識、親切さや秩序意識といったものを身近な先生や友人へ伝えたいと思う。これらは実際中国人が学ぶべきものである。そして日本の友人やホストファミリーとも連絡を取り続けたいと思う。

私は、自分が中日の友好交流のために何らかの役に立てることを願っている。それと同時に中日の友好が末永く続くことも願っている。

学生たちの観た日本

大学名： 北京大学
氏　名： 邵典

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり
4.日中間の交流

「咄嗟失道爾迴駕、沔彼流水趣東瀛（南北朝時代・南斉の政治家王融の『浄行頌・回向佛道篇頌』内の一文、「東瀛」は東シナ海または日本の意）」、私はついにこの漢や唐の時代からわが国と深いつながりのある「一衣帯水」の隣国を直に体験できた。

日本では時間が過ぎるのがとても速かったが、非常に印象深かった。特に感動したのは、日本の人々のマナーの良さと礼儀正しさである。深いお辞儀や至るところでの敬語の使用、そして心から感謝を伝える、自発的に社会のルールを守るなど、その場にいるだけで自然と礼儀の国としてのあり方を感じることができる。実は「礼儀の国」という単語は、常々私たちが自分たち中国のことを指す場合に使っており、中国5千年の輝かしい歴史による文化は各国に「誇れる」ものとなっているが、マナーの遵守や伝統文化の継承という点では、改善はしているものの未だ不備がある。その不備の原因については、私は教育にあると思う。日本では子供へのマナー教育がしっかり行われているが、わが国では家庭や学校におけるマナー教育への意識が欠けている。そして日本では明治維新以降、こうした文化や伝統が途切れることなく受け継がれている。私は個人的に、日本は島国であるため、発展により一定の人口密度になった場合、必ずルールに従う必要があり、さもないと社会の安定が難しいのだと思う。

現在日本は間違いなく先進国であるが、私たち中国の発展の勢いも重視されている。いかに正しく中国の発展をとらえるか、またより良い未来のためにいかに正しく歴史と向き合うか、これらはいずれも非常に重要な問題である。それぞれの国には平等に発展する権利があり、狭隘な民族主義が交流の妨げになってはならず、ウィンウィンの局面には理解、包容、尊重そして協力が必要である。中日両国が理性的そして積極的な交流により、共に世界の発展の潮流に同調し、今後両国がさらに発展していくことを願っている。

大学名： 北京大学
氏　名： 劉益瀚

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

中国は礼儀の国を自称しているが、現在の中国人の素養やマナーについては褒められたものではなく、茶道が茶葉の故郷である中国ではなく日本で受け継がれているように、マナーや礼儀の重要性も日本ではっきりと感じることができた。

日本語には複雑な敬語体系があり、日常生活における様々な状況でそれら敬語は繰り返し使われている。例えば「ありがとうございます。おはようございます。」といった言葉は、日本のサービススタッフの笑顔のように常に彼らから耳にする。私の専攻は心理言語学で、いくつかの言語についてはある程度研究しているので、日本語には丁寧な表現とくだけた表現があり、日本の若者の間では圧倒的にくだけた表現が使われていることも知っていたが、この8日間私が耳にしたのは全て丁寧な表現であった。

日本人は公共の場においてとても秩序立っていて、道路には落ち葉もほとんど無く、地下鉄やエスカレーターなど

でもとてもマナーの良さを感じる。混み合っていないわけではないのだが、常に秩序が保たれている。関東ではエスカレーターに乗る際は左側（関西では右側）に立ち、もう片方を急ぐ人のために空けている。そして地下鉄に乗る際は、皆がドアの両端に並び、下車する人が先にドアの中央から下車をする。こうした譲り合いはマナーを体現しているだけでなく、知恵を体現しているとも言える。なぜならこうした譲り合いが効率の良さをもたらしているからである。

大学名： 北京大学
氏　名： 邢仕傑

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり
4.日中間の交流

日本は美しくそして温かみのある国であった。今回の訪問で私はこの国の自然や文化的美しさを心から感じることで、これまで中国国内で聞いてきた日本の悪い部分を全てかなぐり捨てることができた。

日本の国土は大きくはなく、中国のように多くの壮麗な山河の景色があるわけでもない。しかし日本は、その特有のしなやかで美しい風情ときめ細やかさが特色ある風景を形成している。日本の景勝地では、私たちが感じるべきはその景観と文化の融合だと思う。鬱蒼とした森の景色のみならず、その人にやさしい管理方法はとても目新しかった。道路は狭いが混雑を感じさせず、人口密度は非常に高いが一人ひとりが充分に恩恵を受けることができる。こうした素養と光景は日本人の厳しい管理や自分を厳しく律する点と深いつながりがある。

そして文化的な面について言う場合、日本のマナーについては言わざるを得ない。私たちは皆朝にはホテルのスタッフからの心のこもった挨拶を受け、企業訪問終了後には手厚い見送りを受けた。そして街においては車や人々が互いに譲り合う様子を目にするなど、私はとても感銘を受けた。日本人の行動規範は他人へ迷惑をかけないことであるのは誰もが印象深いが、日本では浮かれたり功利に走ったりすることなく、自身の職分を全うすることが一番大事なこととなっている。これらは発展とともに人の心も浮ついている中国とは全く異なるものである。私たちは過去の出来事にとらわれるべきではなく、現在について言えば、私たちは学びそして交流をすべきなのである。

堂々たる中華には5千年の歴史があり、そして中日国交正常化からもすでに半世紀近く経過している。私は交流と友好そして学習がこの時代の基調となっていくよう願っている。

大学名： 北京大学
氏　名： 曽瑩

テーマ： 1.国民性についての理解

8日間の訪日によって、私は日本の一般市民、そして一般市民によって形成される企業やコミュニティ、また企業やコミュニティによって形成される日本という国を体験することができた。その中で小さなものから大きなものまで、ミクロなものからマクロなものまで次第に自分の心の中で日本への好感度が上がってきたが、最も感動したのがホームステイの2日間であった。

他のメンバーとは異なり、私はショッピングモールでの買い物や浅草寺や皇居といった観光スポットの見学はせず、観光体験ではない彼らの日常生活を体験したいとホストファミリーにお願いした。そのため若いホストファミリーは、彼らのお子さんの遊び場や旦那さんの地元風味のラーメン屋、そして日頃訪れるデパートなどに私を連れて行ってくれ、お子さんにご飯を食べさせたり手料理を食べたりした。そしてテレビでドラマ「ゴシップガール」を見て、公園の観

覧車に乗り、水族館やディズニーランドへ行った。私は日本の一般市民は日頃から秩序や調和のある生活をしているのだと感じた。政府は多くの福利施設をつくり、市民は互いに尊重し礼儀を重んじ、スーパーでは自由な決済が可能、ディズニーランドの出口は人が多くても盗難探知の設備を設置していないなど、こうした光景は私が以前オックスフォードで見たものとそっくりで、唯一違うのは皆黄色人種であることだけであった。ここには私たち中国人と源を同じくするが、より自律的で高い素養を持ち、調和のとれた生活をおくっている人々がいるのである。

私はかつて自分の国や人種に対して疑念を持ったことがある。それはヨーロッパでの遊学を終えバンコクの空港で中国の同胞と列に並んでいた時のことである。子供や大人たちが様々な地方の中国語を口にし、大きな荷物とともに寝そべったり、騒いだり喚いたりしながら搭乗を待っていた。そしてキャンパス内ではとても騒がしく、またものすごいスピードで運転し他人に泥水をかけることを気にも留めない留学生をよく見かけたが、それらは皆黄色人種であった。日常生活におけるこうしたシーンにより、かつて私は欧米との差に絶望感を覚えたことがあった。しかし今回日本で、私はついに綺麗な道路や仕事へのひたむきさ、そして常にお詫びと感謝を口にする人々などを見て、この世界にも素晴らしいアジアの国があり、進んだ黄色人種社会があることに感動した。そして日本にもかつて現在の中国のような問題があり、さらに汚染やバブル経済、危機などの問題もあったことを知り、私は自分の祖国が将来、高い教養を持つ人で溢れ、人々が尊重し合い、夜でも戸締りをする必要がないほど安全で、本当の意味で素晴らしい大国になれることに対してより一層希望を持つことができた。

大学名： 北京大学
氏　名： 馬洪林

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回見学した6つの企業の中で、最も印象深かったのは磯子火力発電所であった。私は日本企業の高い科学技術力に感服させられた。

磯子火力発電所の特徴は、まず都市部に建設された発電所であり、そして世界でもトップクラスの脱硫技術と脱窒技術、そして粉塵除去技術を有し、汚染を最低限度まで減らすことができる、ということである。

私はこれまで火力発電所が都市部にあるということを想像することができなかった。だが東京と北京の大気を比べると、日本が環境保全の面で中国の遥か先を行っていることがわかる。この差は人々の意識に関わりがあること以外に、科学技術における大きな差にも表れている。日本企業はすすんで資金を環境保全に関わる科学技術研究に投入しているのである。

私はこうした技術の需要は今後中国で拡大してくると思う。理由は2つある。まず中国の現在の発電方式は火力発電が主で、特に北京は多くの火力発電所がある。そのためこれらの発電所には相応の技術革新が必要である。そして中国の都市部の大気状況が特にひどく、新たなクリーン技術を積極的に採用する必要がある。

いずれにしても、政府が環境面で対策を講じ、北京でも東京のような青空が見られることを願っている。

大学名： 北京大学
氏　名： 郭家棟

テーマ： 4.日中間の交流

偏見を無くし、共に繁栄を-中日関係の未来

知っての通り中日両国には遥か昔からの交流の歴史があり、その交流により両国の人々には似通った文化的背景がある。近代以降、双方には一時期衝突があり、互いに異なる現代化の道を歩んできたが、今日に至り東アジア情勢は改めて変化をしており、新たな中日関係を模索する必要がある。

私は、中国と日本の関係がこれまで良くなかったのには、政治や世論操作、そして両国の民間における互いへの偏見という理由があると思う。前者について言えば両国の政府の努力で解決は可能だが、後者は民間の交流により改善をするしかない。まさに今回の活動のように、祖国を離れ、日本という新たな土地に立ち、真に日本を体感することで、幼いころから見聞きしたことによる偏見を無くすことができるのである。

現在の東アジアにおいて、中国の発展は抗うことの出来ない歴史の波だと言える。日本はアメリカとの同盟により中国を牽制することを選択しているが、長い目で見ると、それは良い選択だとは思わない。逆に、それにより日本は発展を続ける良い機会を失ってしまうように思う。日本と韓国の産業構造は似通っているが、日中関係が冷え込んだことにより、昨年中韓貿易の規模が中日貿易の規模にせまったという例がある。日本は今後を見据え、中日関係を次第に改善し、中国の人々の感情を傷つけることはせず、対抗することなく、中国とともに新たな東アジア秩序を構築しともに繁栄していくべきで、これこそが未来の中日関係のあるべき形だと思う。

私は、こうした過程において民間交流は必要不可欠であり、今後より多くの日本の人々が中国を訪れることで、中日関係の未来は明るいものになると思う。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 王言

テーマ： 1.国民性についての理解
3.マナーの良さと思いやり
5.アニメなどのソフトパワー

俗に「百聞は一見にしかず」と言うが、今回日本を訪れ、この近くて遠い国に対してより一層の理解と認識を得ることができた。

日本について最も印象深かったのはその礼儀であった。各企業の見学を終える度に、その企業のスタッフが門まで見送りさらに視界から車が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。こうした心からのもてなしを私はこれまで体験したことがなかった。他人への思いやりについて言えば、日本人は「他人へ迷惑をかけない」ことを心掛け、たとえ他人に足を踏まれたとしても、踏んだ相手に対して謝罪をする。電車に乗る際は皆携帯電話をマナーモードにし静かにしている。たとえ話をする場合でも他人の迷惑にならないよう小声で話をする。中国は日本と同様に礼儀の国ではあるが、その礼儀について言えば日本より劣っている。日本人のこうした思いやりの精神を私たちは学ぶべきだと思う。

次に日本の国民性について言えば、結局のところやはり他人へ迷惑をかけないということである。それから集団意識とチームワークである。こうした点は個人の個性や自由を一定程度妨げるものかもしれないが、効率を高め、社会全体の発展を促進することに繋がっているのは間違いない。日本人が尊重するのは個人の英雄主義ではなく、一種の「歯車」のような精神なのかもしれない。つまり自分の仕事をやり遂げ、協調性と協力を重視するということである。

最後に日本のソフトパワーについて述べたい。現在グローバル化の進展に伴い、各国の競争における総合的国力の役割がさらに増しているため、ソフトパワーについても非常に重要なものとなっている。日本はアニメ王国であり、様々なアニメが受け入れられ、文化産業は高度に発達している。それと同時に日本経済の発展にも重要な貢献をしている。それに対して中国は、すでに世界で2番目の経済国となり経済レベルも飛躍的に成長しているものの、ソフトパワーの面では依然として弱く、文化産業の経済に対する牽引力はさほどない。そのためソフトパワーを強化し文化

的に強い国を構築することが求められており、それには私たちが他国の進んだ文化から学び、そこから自分たち特有の新たなものを生み出す必要があり、そうすることで長期にわたる発展が得られるのである。

今回細かな視点から日本を観察し、非常に多くの収穫が得られた。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 王蓉

テーマ： 1.国民性についての理解

俗に国民性とは、ある民族が特定の生存環境において次第に形作った民族心理と思考方式である。日本の国民性に関して、二つの面から私の考えを述べたいと思う。

まずは平穏を願う心理である。日本では一般的に、人々が公共の場所において大声で話をすることはない。初めて日本に着いた時、これまで比較的大声を出すことが多かった私は、静かな状態を保たなければならないこの点が馴染めなかった。私たちは中国人同士が大声で口論する様子を容易に想像できるが、もしこれが日本人同士の場合、口論をする様子を想像することが難しいと思われる。日本人は常に他人と調和のとれた関係を維持することを願っており、それにより自身の平穏無事を実現しているのである。

次にチームワークである。日本人の全体主義は私たちのそれとは多少違っていると思われる。私たちの考える全体とは社会や国といった大きなものだが、日本では会社内のチームといった小さなもののように思われる。中国大使館を訪問した際に、大使夫人が中国と日本のサッカーナショナルチームについてお話をされた。前者は自己主張が強く、協力はするが協調性が弱い。それに対し後者は協調性と協力に比重を置いているため、より勝負強い。再び私たち自身を例にとると、今回の活動内容には学生による発表の場面があり、各学校それぞれに代表者がいた。しかしこれは本来すべての人が意見を出し合い完成すべきもので、5人ないし6人が一つのチームとなって、チームの利益と発展のために貢献すべきであるのに「私は代表ではないから発言しなくてもよい」といった無関心な点が見られた。それに対して日本人は、自発的に自分なりの貢献をしており（例えばごみ拾いやごみの分類などもそうであるが）、こうした中国では全くありえないことを日本が見事なまでに実行しているのは、本当に並外れたことだと思う。

日本のこうした高い自発性にとても興味がある。大学三年生ではこれをテーマに研究を行い、それらの生まれた時期や歴史および根源について深く探りたいと思う。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 楊金鳳

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ
3.マナーの良さと思いやり

今回の日本訪問はわずか8日間であったものの、至るところで日本人の礼儀や他人への思いやりを感じることができた。例えば企業や学校訪問の際、私たちのバスが到着するより前にすでに出迎えの人々が待っていて、会場に入れば盛大な拍手、お別れの際は私たちのバスが見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれた。また日本のレストランでは毎朝「おはようございます」や「いらっしゃいませ」といった挨拶や歓迎を受け、また朝食サービス自体も非常に心配りがされておりとても心地の良いものであった。そしてガイドの中島さんからも日頃からバス内で、自分の所持品はしっかり管理し、他人に迷惑ひいては団体のスケジュールに影響を及ぼすことのないよう注意喚起があり、私は

日本人の他人への思いやりや自分のことはしっかり行い他人へ迷惑をかけないという心掛けを感じることができた。さらに電車内には携帯電話の使用や喫煙の禁止のマークがあり、他の乗客への配慮が感じられた。またエスカレーターに乗る際は、人々が一列に並び、片方を急ぐ人の通行用に空けていた。

集団意識に関して私が印象深かったのは、住友商事での懇親会の際に、スタッフが通常17時30分が終業だが、日常的に18時30分まで業務を行い、忙しい時には22時以降まで残業をすると言っていたことである。こうした会社の利益を最優先する集団意識にはとても敬服させられた。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 臧暁慧

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

今回私は初めて日本を訪れた。その中で最も印象に残ったのはマナーと他人への思いやりであった。

まずは細部まで行き渡った礼儀である。この点はサービス業で特によく表れていた。デパートでの買い物であれ、レストランでの食事であれ、入店してからの挨拶に始まり、販売員の対応や注文を受ける際の丁寧さ、そして退店時の挨拶まで全ての過程が心地良さを感じさせる。この他、企業の見学を終えてお別れをする際、企業の皆さんは私たちの乗るバスが見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれ、私たちはこうした行いにとても感動させられた。しかもこうした礼儀正しさは日本人の生活における日常的なものであり、例えば他人にぶつかられても、それは自分が道を塞いでいたからだと考え、相手にお詫びの意思表示をするのである。

それから他人への思いやりにも感動させられた。コンビニであれデパートであれ、沢山買おうがそうでなかろうが、いずれも丁寧に袋詰めをしてくれて、お釣りとレシートを手渡しさらに感謝を述べる。そしてエスカレーターでは片側に一列に並んで乗る。この行為は急いでいる人を先に行かせるための思いやりから生まれている。

以上が今回の訪日で最も印象深かったことである。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 朴美陽

テーマ： 1.国民性についての理解

日本において最も印象深かったのは、清潔な道路や美しい風景、また沢山の素晴らしい商品などではなく、日本の人々であった。会社の従業員の職業モラルやひたむきさには敬服させられ、一般市民の礼儀正しさと友好的な態度には感動でいっぱいになった。今回の「走近日企・感受日本」の活動において私は、勤労と誠実を尊重する日本人の飽くなき進歩を目指す仕事ぶりと真面目な生活ぶりを直に目にした。そしてこのような日本の人々による集団意識と他人へ迷惑をかけないという考えは私たちが最も学ぶべきものである。

街の至るところで見かける「みんなの〇〇」、これには日本人の強い集団帰属意識が表れている。ホームステイ先では子供に対して「他人へ迷惑をかけない」よう言い聞かせる場面を幾度と見かけた。これも日本人が「礼儀と他人への配慮」を小さな頃から躾けられていることを反映しており、また日本人の時間概念にも他人へ迷惑をかけないという礼儀の文化が表れている。今回の日本訪問では、到着するそれぞれの場所において詳細なスケジュール表が配られ、活動内容が事細かに手配されていた。この他、親切に道を教えてくれたおじさん、落とし物を届けてくれた店員さんなどいずれも印象深く、私は日本の人々の友好意識と親切さを強く感じることができた。

わずか8日間では日本の社会全体を見ることはできなかったものの、私の日本への理解増進と中日友好への理解にとっては非常に大きな手助けとなった。今後より多くの両国の人々が互いに行き来し理解を深め、互いの距離による誤解が生まれないよう願っている。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 刁愛敏

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

日本語を専攻する以前は、テレビドラマや他人からの話で日本人の礼儀に対する意識が高いことを感じていたが、日本語を学んで以降は実際に日本人と接することも増え、本当の意味で日本の礼儀に対する重視の度合を理解することができた。日本に来てからは、すれ違う人々は、それが知り合いであろうとなかろうと、たとえエレベーターや廊下であれ、互いに視線が合えば皆お辞儀をする。お辞儀そのものは当初中国から日本に伝わったものであるが、この伝統的な礼儀をより発展させ広めるという意味では日本の方が優れていると言わざるを得ない。

この他、日本の子供は他人へ迷惑をかけないように日頃から教育されており、何をするにもまずは自分のことをやり終える。ある日バスから丁度登校中の子供たちを見かけた。歳は11、12歳くらいだろうか、ランドセルを背負って歩いていた。

そして私にとって、ホストファミリーはとても印象深かった。家の中は整然としており、ご夫婦とも仲睦まじく、全てにおいてお客さんを優先し、ほんの些細なことでも「ありがとう」や「ごめんなさい」を言っていた。

あるいはこれは日本民族の内面にある根本的なものなのかもしれない。皆さんそれぞれが「礼儀正しい」のである。中国人にとってはあまり馴染めないかもしれないが、彼らのこうした礼儀正しさには敬服させられた。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 高健

テーマ： 4.日中間の交流

今回日本を訪れ、私は様々な日本の姿を体験した。日本へ出発する前の面接の時に、「あなたは日中関係の発展についてどう思いますか？」という質問を受け、私は日中関係を強化するには両国の人々、特に青少年の相互交流を強化しなければならないと答えたことを覚えている。そのためここでは私は日中間の交流について述べたいと思う。

現在、中日間の交流は様々な分野に及んでいる。例えば私たちのこうした訪問団や民間団体の訪問などはいずれも現在の日中間の交流が増えていることを示している。しかし、 私はこうした交流は未だ不充分なものだと思う。一部の交流は表面的なもので、中身が伴っていないため、本当の日本を体感することは不可能である。そこで私は青少年の交流が重要だと思う。青少年は両国の未来であり、両国の青少年が互いを認めそして理解し友好的な往来ができてこそ、両国の人々が友好的になり、さらに両国が平和的な発展をし、ひいては両国の意見の食い違いや争いが解決されるのである。そのため私たちのような大学生の交流はとても意義深いと言える。しかし大使夫人の言葉どおり、中国の大学生が日本を訪問するように、日本の大学生にも中国を訪問してもらうべきである。なぜなら交流とは相互的なものだからである。

だからこそ私は中日両国が互いの交流強化のため、頻繁に大学生を派遣し訪問させることを願っている。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 李緒嘉

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

今回の訪日で最も印象深かったのは2日間のホームステイである。時間こそ短かったものの、それは心から楽しくまた充実したものであった。

まずはホストファミリーのご夫婦について。お二方とも中国語と英語を嗜んでいらしたが、とても上手というわけではなかったので、時に私の話す言葉を理解されないことがあった。しかし、彼らはそんな時でも真剣に私を見つめながら、そして頷きながら話を聞くのである。こうした話す人への尊重と礼儀に私はとても感銘を受けた。彼らはまた人当たりもとても良く、謙虚で、進んで私と交流をしてくる。いずれにしても、日本では幼いころから礼儀を重視しているため、彼らとの交流ではいつも心地良い気分になる。

初日の外出を終え彼らの家に帰宅した。そこはとても広いというわけではないが、整然としていた。5人が住む家は、大多数の中国の家庭よりも賑やかである。彼らはまた犬と猫も1匹ずつ飼っていたが、とても人懐こく、家庭全体が楽しい雰囲気で満ちていて、また家族同士が互いに尊重し合っていた。そしてお客さん、つまり中国から来た私に対しては、彼らは私の話すことによく耳を傾け、自分たちの知らない新たな物事に触れるのがとても好きなようであった。またとても驚いたのは、お風呂や充電設備など、彼らは私がしたいであろうことを事前に考え準備をしていたことである。つまりこうした他人を思いやる考えが彼ら自身に深く根付いているのである。

それから時間に対する観念については、仕事以外の日常生活でもその観念は強かった。何時に何をするといったことを事前に予定を立て、電車では駅と駅の間の所要時間が記されていた。そして最後に私たちは最終集合地に予定より2分早い15時58分に到着した。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 杜奕聡

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり
4.日中間の交流
6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

「他人へ迷惑をかけない」という意識は日本の人々に深く根付いている。席を離れる時は椅子を元の位置に戻す、食事後はごみを分類する、自分の持ち物はしっかり管理する、公共の場では静かにするなどである。私が最も印象深かったのは、ホームステイ先の1歳半になる女の子が公共の場所に来た時に自分の声を小さくして、自分の持ち物をしっかり持ち、両親の言うことを聞いていたことである。これは中国の子供には絶対に真似できないことであり、日本人の他人への思いやりやマナーといったものは子供の頃からしっかり培われていた。

日本では、毎日の澄み切った青空はごくありふれたもののようであった。日本の環境保全技術は非常に進んでおり、産業のモデル転換を模索中で、汚染対策がますます重視される中国にとっては、こうした技術は非常に幅広い将来性を有している。磯子火力発電所では、最も高いボイラー塔からでも濃い排煙は見かけなかった。工業を学ぶ学生として私は今後環境保全技術の研究に携わる可能性があり、日本からしっかり学ぶべきだと思った。

それから少し残念だったのは、今回の交流において多くの日本の人々ひいては長い期間帰国していない華僑の人々が、現在の中国本土の発展状況を知らなかったことである。中日間の交流はより多くの観光客や青少年が日本を訪れるだけでなく、中国の政府や企業もより大きな役割を果たすべきだと思う。交流は誤解を解消し友好を深める最

良の方法であり、私はより多くの人が中日両国の交流に関わることを願っている。発展した日本には中国の市場が必要であり、発展中の中国には日本の投資と技術が必要である。今後さらなる交流の展開により、伝統文化の保護や技術革新、そして企業管理等様々な面で互いに学び、共に発展をする中日両国の未来はより素晴らしいものになると確信している！

大学名： 北京理工大学
氏　名： 蔡子孺

テーマ： 1.国民性についての理解
3.マナーの良さと思いやり

今回の訪日で私は日本について一定の理解が得られ、さらに日本の人々から多くの学ぶべき点を見出した。

日本人の時間への正確性は世界的にも有名であるが、今回私はホームステイの際にその点について身を以って体験することができた。ホームステイ先の御宅では各部屋そして客間やキッチン、トイレなどに時計など時間を示すものが置かれていた。それから素晴らしい環境保全意識である。日本に来て以降、私は日本の道路がとても綺麗なことに気が付いた。また外を走っている車もどれも綺麗で、日本の環境の良さがわかった。そして同時に人々がごみの分類をしっかり行っていた。ホームステイの際、私はホストファザーと一緒に専用のごみ回収場へごみを出しに行ったが、そこでは種類毎にごみが綺麗に分けられ積まれていた。

この他、様々な業種において日本人は他人に対して謙虚で礼儀正しく、こうした他人への接し方はすでに彼らの根底に存在している。彼らは常にお客さんまたは知り合いなどにお辞儀をしお礼の言葉を述べている。また彼らの企業は強い社会的責任感を有している。私たちが見学した企業では、会社自体の発展を図ると同時に沢山の事業により社会貢献をしており、社員もそれに積極的に参加している。こうした点は中国の企業も学ぶべきだと思う。そして日本人は他人へ謝罪の意を示すことを厭わない。彼らの謝罪は狭義の謝罪だけではなく、その多くが他人へ迷惑や不便をかけたことに対する謝罪である。それに対して中国人は、先に理由を説明して自分は故意ではないことを主張することが多い。こうした違いは主に両国の文化の違いによるものである。

そのため私たちの国でも青少年教育などにおいて礼儀や各方面の意識と素養を高め、スローガンのみに止まらず、実際の行動により社会主義の核心的価値観を実現していくべきだと思う。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 平安

テーマ： 4.日中間の交流
5.アニメなどのソフトパワー

今回の訪日は、私の日本への印象を大きく変えた。日本と中国は、実際のところどの方面から見ても強い繋がりのある国である。

歴史に関しては、日本と中国は隋の時代から互いに使者を派遣しているという記載があり、それが近代まで続いていた。また両国は経済や文化の面でも古くから交流があり、第二次世界大戦が終結し両国が国交を回復して以降も同様に多くの交流活動が行われてきた。

両国の人々については、私はそのほとんどが平和を望んでおり、そして両国が平和的に発展し、アジアのリーダー

として世界でその役割を発揮することを願っていると思う。

日本のアニメといったソフトパワーの発信に関しては、私はとても敬服している。日本のアニメ産業は非常に力があり、アジアや欧米などで強い影響力を持っている。一つの国の発展においてはその国力の強さだけでなく、現在ではソフトパワーの発信も非常に重要なものになっている。ソフトパワーがその国の人々の考え方に影響を及ぼすことも多々あるため、私は中国も自国の文化や音楽、アニメや映画といったものの発信を強化し、中国の文化の奥深さを広く知ってもらう必要があると思う。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 趙雨涵

テーマ： 4.日中間の交流
6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

この二つのテーマを選んだ理由は、同じ訪日団メンバーの話から感じるところがあったからである。

科学技術の見地から考えると、中日両国には未だ一定の開きがある。中国は3Dプリントや遺伝子工学の分野では比較的進んでいるが、一部の基幹製造業、自動化、汚染処理等の面では今後改善する余地が大いに残されている。特に磯子火力発電所を見学して、私は中国がエネルギー利用においてこれまで以上に力を入れなければならないと感じた。中国は現在産業の高度化の問題に直面しており、古い産業を淘汰し、経済構造を改革し、そして新たな成長点を見出す段階にある。しかし高度化には技術が不可欠である。北京大学の郭家棟さんの分析は的を射ていて、中国には技術がなく、日本にはお金がない。そのため中国の産業高度化は日本にとっては良い投資対象であり、ウィンウィンが期待されるものである。例えば中国の高速鉄道は、その設置時には海外の技術を採り入れる必要があったため、フランスのアルストムや日本の新幹線の技術譲渡により、最終的にウィンウィンを成し得た。私が思うに中国が直面している問題の一つに効率の低さがある。それには制度的原因と技術的原因がある。技術的部分については海外の企業との交流や技術導入により効率を高め、また一定の技術的改革を促進することができるので一石二鳥である。

それから中日交流における問題については、まず例を挙げたいと思う。ホームステイの際、ホストマザーのお姉さんにあたる方は、様々な報道で国外での中国人の問題がとりあげられてきたことにより、これまで中国人に対してあまり良い印象を持っていなかった。まずこの点については確かに認めるべきだと思う。実際に一部の中国人はその不謹慎な行動により旅行先の人々に悪い印象を与えている。しかし彼女は私と話をするにつれて、それまで抱いていた中国人への印象が次第に薄らいできた。理由は簡単で、ごみをポイ捨てしない中国人を目にしたからである。これこそが交流の役割である。また中国国内も同様で、多くの人が日本人への偏見を持っているが、それらの偏見は主観的な憶測によるものである。彼らは日本人と交流をしたことがなく、日本を知る手段も限られている。それはホストファザーも同じで、彼の中国への知識はさほどなく、多くのことはいずれも私の紹介によりどうして中国はそのようになっているのかを理解したのである。例えば中国の一人っ子政策について、当初彼らはどうしてそのような政策を行うのか奇妙に思っていたが、私が中国には14億の人口がいることを伝えた後、彼らはその理由を理解した。多くの誤解は理解が少ないことによるもので、私は互いに意見を交わし双方の状況を理解すれば、両国の人々の関係は良くなると思う。

大学名： 北京外国語大学
氏　名： 劉南星

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

日本・東京。

ここは依然として世界で最も大きな都市の一つであり、日本の人口の約10%と世界各地からのゲストや定住者が集まっている。だがここは全てが整然としており、利便性が高く、言葉もほとんど旅行における障害とはならない。

ホテルニューオータニの驚くべき地下の様子と同様に、日本で体験した快適さの裏にはいずれも多くの人知れない努力がある。そしてこうした努力の背後にあるのは、今回私が日本で最も印象深かった職業精神と集団意識の二点である。

日本人の職業精神はサービス業において余すところなく表れている。日本のサービススタッフの接客態度の良さは、中国においては恐らく「海底撈」でしか体験できないと思う。こうした接客態度は本質的には一種のプロ精神である。日本人がどれほど自分の仕事を愛しているのかはわからないが、彼らは自分の仕事に忠実である。運転手や掃除担当者など皆がそれぞれ自分の職場において真面目に仕事をしている。

もう一つ印象深かったのは集団意識である。日本の街にある看板などではよく「みんなの○○」という表現を見かけた。これは「公共」という言葉よりも親しみやすく、こうした集団への帰属、集団と共に生活しているという意識が日本人の「他人へ迷惑をかけない」という考え方に繋がっている。そして皆がこれに関して共通認識を持った時、「規律を遵守する」ことが国民性の一部分となるのである。

私が思うに、「国民性」は決して変わらないというものではない。それは社会の発展状況や思想により変化をしていくものである。この点に関して、中国は日本に学ぶべき所があると思う。

大学名： 北京外国語大学
氏　名： 潘向茹

テーマ： 4.日中間の交流

8日間の訪日の旅はあっという間だったものの、私は日本についてより直接的な認識と理解を得ることができた。この間様々な事を考えさせられたが、最も自分が考えたのは日中間の最大の課題である両国の交流問題であった。

私が新たな角度でこの問題を考える契機となったのは、ホームステイの際のホストマザーとのある会話であった。彼女は中国人であるが、すでに日本で8年間生活しているため、ライフスタイルや考え方、思想や観念といったものが日本の影響を強く受けている。だが心には永遠に変わらない中国という家がある。彼女は現在の中日関係についてとても残念がっていた。彼女は、日本に住んでいる中国人こそが或いは最も両国の平和友好を願っているのかもしれない、と語っていた。私は彼女の言葉に胸を打たれ、なぜ中日間の友好関係の実現はこれほど難しいのか？歴史や領土問題だけが原因なのだろうか？と考え始めた。

私が思うに、両国の交わりの根本は民の親しきにあり、である。たとえ政治上両国の国交が正常化しようと、もし両国の国民同士が互いに反感を抱いていれば、両国の平和と友好など絵空事に過ぎないのである。中日両国の民間における互いの友好度は非常に低く、その理由はお互いの理解不足と誤解によるものである。それでも近年、日本に旅行に来る中国人が増えたため、中国人の対日友好度はこれまでの5%から30%に上がっているが、日本人の中国に対する友好度は依然としてこれまでの5%前後に止まったままである。このことは相互交流がいかに重要かを示している。私たちは日本を理解するだけでなく、これまで以上に日本に対して中国を紹介し、より多くの日本人に中国人の友好の心や中国文化、そして中国の魅力を知ってもらうことが重要である。それと同時に、企業の社会的責任感の欠如、国民のさらなる素養の向上が必要、社会発展の不均衡、人と人との信頼感の欠如、伝統文化の継承、イノベーション能力の不足といった私たちの問題点を認識した上、絶えず己を向上させ、尊大にも卑屈にもならず、平穏な心で

己と他国に接することで、はじめて中国は国際社会から幅広く認められると思う。
　日本語を専攻しているものとして、私は自分が将来中日友好の役に立てることを願っている。

大学名： 北京外国語大学
氏　名： 劉思陽

テーマ： 1.国民性についての理解

　来日する以前は、書籍やメディアそして日常における日本人の友人との交流によって、日本人の性格については一定の理解をしていた。そして今回8日間の訪日によって、私が最も印象深かったのは物事への計画性と些細な部分への重視である。
　企業見学の際、ほとんどすべての企業から事前の企業資料の配布と、当日のタイムスケジュールの連絡があった。そしてそれぞれの段階で何をするのか、そして所要時間はどれくらいかを事前に計算し、会場設置もとても綿密で、人為的要因では計画にほとんど誤差はなかった。この他ホームステイでの交流においてもこの点を感じた。訪日の一週間前にホームステイ先からメールが来て、家庭内の状況や二日間の行動予定など詳細なスケジュールの紹介があった。その中ではスカイツリーの予約や私の食の好みに合わせて初日の夕食と二日目の昼食の予約がしてあり、実際の見学の前には事前にその観光地の資料を参考用に渡してくれた。こうした非常に計画的な行動方式には本当に驚かされた。
　また、日本人のマナーや思いやりなどもとても印象に残っている。その最たるものは交通ルールにおけるマナーである。日本に着いて間もない頃、私は路上で何度か車を先に行かせようとしたが、いずれも車のドライバーが先に車を止め、私を先に行かせたのである。こうした譲り合いは中国の路上ではほとんど見かけることはない。そしてレストランでの食事の際、サービススタッフはいずれも自分よりかなり年上であったにも関わらず、私たちに対して恭しくサービスを提供するので少し気恥ずかしくなった。今回わずか8日間の訪問で日本や日本の人々を垣間見たに過ぎないが、これを始まりとして今後日本への理解を深めていきたいと思う。

大学名： 北京外国語大学
氏　名： 陳鑫

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

　中国では私はドラマや映画、アニメなどを通じて日本のマナーというものを理解していた。
　そして日本に来てから、私は本当の意味で日本はこうした礼儀正しい国だということに気が付いた。客室乗務員そしてホテルやレストランのサービススタッフであれ、または一般の人々であれ、皆が常に微笑みをたたえ、話し方や所作がしっかりしていた。中国に比べ、日本はマナーにおいて遥か先を進んでいる。本来「礼儀の国」であるはずの中国は、この点において負けを認めざるを得ない。中国の路地では至るところでごみやガムの痕跡を見かける。しかし日本では綺麗な路地にはゴミ箱すら見られない。大声で話をする人もいなければ行列に割り込む人もいない。何においても秩序立っているのである。車が歩行者に道を譲り、スピードを出し過ぎたり赤信号を無視したりすることもない。ホームステイではホストファミリーはとても親切に私に接してくれた。日本の家庭のおもてなしに私はとても心を打たれた。彼らは私の全てのことに気を配り、居心地が悪くなることは全くなく、まさに「自分の家にいる」感覚であった。私は社会であれ個人であれ、中国は日本に学ぶ必要があると思う。

大学名： 北京外国語大学
氏　名： 崔正佳

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

私は日本語を学ぶ以前から日本人はマナーを重視し他人を思いやることを知っていたが、日本語を学んで以降知り合った日本人も確かにその通りであった。そしてまさに百聞は一見に如かずで、私は今回の訪日で日本人の礼儀正しさを、身を以って体験した。

今回の活動当初から、ガイドの方から私たちへ自分のすべきことをしっかり行い、他人へ迷惑をかけないといったマナーにおける注意点の説明があった。私はこうしたものは他人への尊重が基本になっていると思う。なぜなら尊重するからこそ、他人を思いやりそして自律的になるからである。

サービス業がマナーを重んじるのは自然なことだが、中国と違うのは、サービスを提供する際にさらに感謝を述べるのである。これには最初は私も慣れなかった。サービスをしてもらっているこちらが感謝を述べる前に先に感謝をされるのである。こうした礼儀正しさはその会社がしっかりしていて信頼に値することを印象付けるものである。それからまた日本の人々は交通ルールをしっかり守る。日本の横断歩道は短く赤信号の時間も長いが、人々は賑やかな場所であれ静かな場所であれ皆ルールを守っている。私は言葉というものは人の考え方に影響を及ぼすものだと思う。日本語は比較的婉曲で、話をする際に意見を言い切ることはなく、常に他人を思いやる。マナーも他人を思いやる一種の表れである。訪問先ではペンやノートそして水などが準備されてあり、プレゼントをもらえば皆で分け合い、グループ討論では他人の考えを尊重し、雨に濡れた傘は傘入れ袋に入れてから入室し、退席時は椅子を元の位置にもどす。これら一切が心からの気遣いを感じさせるのである。

私たち中国は礼儀の国であり、日本の多くの礼儀は中国から伝わったものである。しかし、私たちには気遣いというものが欠けている。小成は天性の若し（幼い頃に身につけた習慣はもって生まれた天性に等しい）、習慣は自然の如し（習慣は深く身について天性のようになる）である。こうした素晴らしい習慣は、尚のこと私たちが長い時間をかけて幼い頃から育んでいくべきであり、礼儀はいくらくどくてもとがめる人はいない。私は中国に戻った後も、自分の行動によって多くの人の模範となりたいと思う。

大学名： 北京外国語大学
氏　名： 賈子赫

テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー

日本は間違いなく世界一のアニメ強国である。程度の違いこそあれ、私たち世代の大多数が日本のアニメに影響を受けていると言える。日本の重要産業の一つであるアニメ産業は、常に日本の国内外市場において脚光を浴びると同時に、巨大な経済効果を生み出している。 日本のアニメ産業が多くの国において際立った存在となり、これほど大きく発展したのには、私は三つの要因があると思う。

はじめに提携メカニズムである。日本のアニメ産業では、各段階の業務には明確な分業体制がある。動画を例にすると、日本の動画制作会社は通常二種類あり、企画作成をする「企画会社」と、もう一つ実際に動画を制作する「制作会社」がある。一般的にはこの二つの会社により作品が創られるが、一つの会社が企画と制作を兼務することもある。通常は、脚本、スケジュール、コマ割り、設計、原画や監督作業は企画会社が行い、制作会社は描線、着色、特殊効果、校正、撮影、印刷、編集や音入れなどの作業を担当するなど、分業の細かさと提携システムの複雑さが見て取れる。

次に制作チームである。日本のアニメ作品の制作者と消費者の間には良好な交流がある。新たなアニメ作品のほとんどが漫画のテスト発刊の過程を経る。仮に市場の反応が良くない場合は、修正ひいては廃刊となる。そのため、制作者は作品の発行と市場からの認知という二つの関係性をはっきり認識している。見た目が愛らしく、人々の共感が得られ、皆から好かれ、印象に残る作品は、多くの制作者が追い求めるものであり、こうした創作精神の下、そのキャラクターは世界のアニメファンからの支持を受けているのである。

そして社会基盤である。日本のアニメは基本的に青少年向けに制作されていて、共感を得られやすいストーリーにするため学校生活をその舞台とし、或いは架空の世界を舞台とした熱血的なものが多く、主人公はその多くが青少年に憧れられやすい外見をしている。また人々へのアニメの浸透度も高く、若い世代は幼い頃よりアニメに触れている。その他の国に比べ、日本では一般の人々がアニメに参与する「同人」の割合が高い。同時にアニメに関する配信メディアや周辺商品の種類も豊富で、その数も驚くべきものである。こうした状況は、なぜアニメが最も「大衆性」を有しているかを説明していると言える。

もちろん日本のアニメ産業の優位性はこれだけに止まらない。私は、日本のアニメは全ての優位性を融合させたからこそ、世界のアニメのトップの位置にいるのだと思う。そしてこの功績は過去にはなく、これを再現または超えるのは至難の業だと思う。

大学名： 中央音楽学院
氏　名： 孫詩博

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

私が選んだテーマはマナーの良さと思いやりである。日本人の民度の高さは世界でもトップクラスであり、もちろん彼らのマナーも複雑で厳しいものである。

例を挙げると、家で食事をする際、父親は上座で食事をし、母親は食卓で食事をする人の手伝いをする。またある時、私はエスカレーターに乗った際無意識に右側に立っていて、後方の急いでいる女性からすみませんと声をかけられた。明らかに私が立つ位置を間違えていたのに、彼女が先に謝ったのである。それから日本の街路はとても清潔でごみも見当たらない。これは中国では想像すらできないことである。また大きな通りではごみ拾いをしている人を常に見かけた。これにはそのマナーや素養の高さがうかがえる。

もちろん他人への思いやりという点では、時間への正確さなどもその一例である。ホームステイ先の御宅では各部屋に時計が置かれていて、どこでも時間を確認することができ、常に時間を守るということを自分たちに言い聞かせているかのようであった。

中国は春秋戦国時代から礼の観念が形成され、孔子も礼の決まりごとを書にまとめている。しかし時代の変遷により、私たち中国人は次第にこうした貴重な文化を失っている。逆に私たちの隣国である日本では、それらが現在まで受け継がれている。

これはどれだけ再認識すべき問題であろうか。日本では本当に色々なことを考えさせられた。文化がこれまで以上に高まり、さらに中国五千年の文明における優秀な文化を改めて再確認し、祖国がより良く発展していくことを願っている。

大学名： 中央音楽学院
氏　名： 韓天雅

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり
5.アニメなどのソフトパワー

日本のソフトパワーについて、私が最も馴染みがあるのは日本の伝統音楽である。

日本は私がとても憧れている国で、日本の文化に対する伝承や保護は私たちが学ぶべきものである。中日両国の音楽には多くの共通点がある。例えば日本の琴や三味線は、中国の古箏や三弦が基になっており、現在ではすでに独立したものとして日本の伝統音楽を代表するものとなっている。今回の訪日で、夜の自由時間の際、私は東京芸術大学で著名な古箏の演奏家である毛丫先生にお会いし、日本の人々は伝統音楽をとても愛し、日頃より演奏会を鑑賞していることを知った。そしてこの数日間、日本の街中やレストランなどでは雅楽を頻繁に耳にした。こうした面が人々に影響を与えているのだと思う。

日本の伝統音楽および文化への伝承と保護には敬服させられた。彼らは自国の音楽を完全に保存しているだけでなく、ひいてはわが国の唐の時代の「伎楽」も保存し、しかもその演奏が可能なのである。残念なことに中国はその演奏ができず、伝承が途絶えてしまっている。

私は自分たちの努力を通じて、中国伝統音楽のソフトパワーの保護や発展に貢献したいと思う。

大学名： 中央音楽学院
氏　名： 祝紅

テーマ： 4.日中間の交流

幸運にも今回の訪日交流活動に参加することができた。日本での交流によって、私は日本文化とそして中日両国文化の差を体験することができた。日本を訪れる前、私は表面的に日本の文化を知っていたが、実際に交流をして私は日本に対して新たな認識を抱いた。東京に着いた初日から、最も印象深かったのは日本人の礼儀であった。日本人は知り合いであろうがあるまいが、他人と会うと会釈をする。それから、話をする際のマナーである。日本人は公共の場所では大声で話をせず、浮ついた印象を与えない。また日本では至る所で人への優しさを感じる。電子機器であれ何であれ、いずれも人への配慮を感じさせる。歴史は書き換えることはできないが、「求同存異（小異を残して大同につく）」という言葉もある。これは両国の交流における最良の答えだと思う。私たちは自分たちのすべきことをし、中国文化を広めていくと同時に他国の優れた点を学び、私たちの国をより良いものにしていかなければならない。

大学名： 中央音楽学院
氏　名： 朱瞳瞳

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

8日間の日本訪問は私に多くの思い出を残してくれた。日本は「礼儀の国」であり、マナーを重んじるのは日本人の習慣である。今回はまたホームステイがあり、さらに日本の人々そして大学生と交流することができ、彼らに対して一歩踏み込んだ印象が得られた。

まず、初対面時の名刺交換だが、日本人はこれをとても重視している。日本人にとって名刺はその人を代表するものであり、名刺の扱いはその人自身の扱いと同等である。そのため名刺を受け取った後、その名刺をよく見ずしまうような行為は失礼にあたる。この点は中国とは非常に異なっている。

それから、日本人は親戚や友人を訪ねたりする際にはお礼の品を持参する。彼らは贈り物をすることは日頃の感謝を表すものだと考えている。そのため、日本人の作る商品は中身であれ、また包装であれとても美しい。そして彼らは綺麗なリボンや紙ひもでそれを結ぶ。なぜなら日本人は結び目には人の魂が宿ると考えているからである。

日本人の文化はいずれも些細な部分に表れていて、多くのわずかな所作がこの国の文明を物語っている。これは私たちが学ぶべきところだと思う。

大学名： 中央音楽学院
氏　名： 劉書辰

テーマ： 1.国民性についての理解

今回の訪日の過程を思い出す時、真っ先に脳裏に浮かんだのは「細致入微（微に入り細にわたって）」の四文字で、大小様々な方面からそれが感じられた。

まず出発前の準備から日本の人々の細部への注意や処理の正確さが感じられた。大きなものでは毎日のスケジュールが分刻みで作られ、小さなものでは私たちに準備された資料がどれも丁寧に作られている。民は食を以て天と為す。日本の食文化はよりこの点を表している。小さな器には様々な食材が並べられているが、とても調和がとれている。そして選び抜かれた食材、繊細な味付け、洗練された食事作法などすべてが理にかなっている。

またオムロン京都太陽株式会社を見学した際、物品の借用時には後の人が連絡を取りやすいようにホワイトボードに返却日時と名前を記載していることに気が付いた。

私は「一歩を積まずして千里に至らず、小流なくして江海とならず」と言いたい。こうした物事への対処や人としての在り方の細やかさというのは、私たちが学ぶべきものである。

大学名： 中央財経大学
氏　名： 宋佳音

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

日本で生活したこの数日間、私はこれまで体験したことのない快適さを感じていた。こうした自然な快適さは中国ではほとんど感じることはなく、誰かの行列への割り込みにより、さらには自分が寝ている時に誰かが大声を出すことにより、またはレストランのサービスが悪いことによりその日の良い気分が台無しになったりする。日本の快適さは一部の人が言うように表面的なものである場合もあるかもしれない。しかし私は実際に日本に来てからは、これは長い時間をかけて育まれた習慣なのだと感じている。礼儀正しい習慣はそれがどういったものであれ、悪い習慣よりは良いのではないだろうか。

私は日本のサービスがどれほど優れているかについて多くを語るつもりはない。なぜなら私が日本に来る前に聞いていた評判と同じだったからである。だがその評判からは一点だけ、日本を紹介する本などでよく述べられている「偽善感」はそこにはなかった。私たちに映画の紹介をしてくれた係員は満面の笑顔で紹介を終え人のいないところに下がっていく時、笑顔を絶やすことはなかった。それがたとえ一種の習慣であろうと、笑顔の習慣は冷たい表情をする習慣よりは遥かに良いものである。

日本では、エレベーターやデパート、またレストランであれ、とても快適である。それは人々が互いを思いやり、最大限自分の行動を規範化し、他人へ迷惑をかけないようにしているからである。これにはそうした気遣いは疲れると言う

人もいるかもしれないが、実は私はその考えには賛成できない。もし皆が他人を思いやれば、その力の作用はお互いのものであり、自分が他人から受ける力も快適なものなのである。多くの不必要な煩わしさを無くす、こうした生活こそ人をより気楽に感じさせるのではないだろうか。私は心から他人を思いやることは素晴らしい習慣だと思う。もちろん日本人の他人を思いやる習慣は一挙に成し遂げられたものではなく、幼い頃から思いやりの教育を受けてきたのである。それゆえもし中国社会がこうした素晴らしい習慣を育もうと思うのであれば、基礎教育の段階から始めなければならない。

大学名： 中央財経大学
氏　名： 車佳寧

テーマ： 1.国民性についての理解

今回の8日間の訪日活動において、私たちは多くのこれまで知らなかった日本を知ることができた。その中でも私が最も印象深かったのは、日本人はとても真面目だということである。

日本は真面目な国である。その国民の真面目さは生活や仕事など様々な面に表れている。企業の見学では、磯子火力発電所とオムロンが私にとってはとても印象深かった。従来からの石炭を燃料とし発電をしている磯子火力発電所は、国の排出基準を満たしてもなおより良い成果を求め、世界でも最少の排出を実現し、ひいてはクリーンエネルギーと同等の環境保全レベルに達している。これはスタッフの飽くなき技術への探究と業務への真摯な態度によるもので、私たちが学ぶべきものである。またオムロンは計器類のトップブランドである。同社の血圧計など多くの製品は海外で高い評価を受けており、高い知名度を誇っている。私たちは同社のこうした華やかな業績の裏側にあるものについて、実際に見学を通じて知ることができた。オムロン京都太陽株式会社のスタッフはそのほとんどが何らかの障がいをもっており、同社の素晴らしい製品はまさに彼らの手から生み出されていたのである。作業場では、生産ラインのスタッフが身体に不便を抱えながらも真剣に作業をしていた。私はその姿に心から敬服の念を抱いた。彼らは自分たちの身体のハンデを理由に自分への要求を下げることはなく、製品の検査過程などもとても厳しいものであった。これには日本の人々の真面目な性格について改めて認識させられた。

感想などはまだたくさん有ったが、これから先私は自身への集中力や厳格さを培い、社会に貢献していきたいと思う。

大学名： 中央財経大学
氏　名： 遼黛妮

テーマ： 1.国民性についての理解
6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回日本での交流において、私は日本の国民性についてより深い理解を得ることができた。日本人は比較的平穏で実務的、また謙虚であり、自分のすべき仕事をしっかり行い、欲張らない。彼らは集団における歯車の役割を好み、自分を目立たせたり、他人を追い抜こうとしたりすることはない。こうした国民性は日本人に些細な分野において巨大な価値を創造させ、日本企業のウィンウィンや共同発展というものに繋がっている。またこうした国民性は日本の清潔さや秩序の良さに表れており、日本人それぞれが自分たちのすべきこととして身の回りの清潔さに気を配っている。そして何事も整然としている。それは彼らが自分の行為を集団の合理的運営を基準として規範化することで、個人が集

団に従っているからである。こうした勝気ではない歯車の精神は幼い頃からの非競争的教育に由来している。助け合いを好み競争を好まない教育の下、日本人の性格からは他者を押さえつけるような激しさ、他人に対する疑念や利用、出世に対する暗闘が失われ、代わりに調和のとれた発展を願う優しさ、他人に対する信用や手助け、自分の仕事に対する責任感が増したのである。

私は今回の企業見学の際に、日本の多くの技術が現在中国では求められていると感じた。例えば磯子火力発電所の超々臨界圧火力発電技術は、今後中国の火力発電所が発電効率の向上や汚染の低減のためにとり入れるべきものである。またホテルニューオータニのエコシステムや汚水処理システムは中国のホテルがとり入れるべきものである。さらにオムロン京都太陽株式会社の身体障がい者を対象とした労働環境の構築、さらに製品品質の保証のための管理モデルは、中国が今後弱者層保護のために学ぶべきものである。

大学名： 中央財経大学
氏　名： 楊敏媛

テーマ： 4.日中間の交流
5.アニメなどのソフトパワー
6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

私は、中日両国における民間交流はその量や深さなどまだまだ足りていないと思う。例えば日本の大学生は、中国の学校には恋愛禁止の規定があることを知らず、私のホストファミリーは、中国が1949年から今日まで一人っ子政策を行っていると考えていたなど、互いのあまりにも少ない交流は、両国の友好的な関係に不利に働いていると思う。

日本はソフトパワーにおいて独特の優位性を有している。京都の歴史ある建築物は言うまでもなく、街中やホテルニューオータニで見かけた神社や神棚は、日本の伝統文化を至る所で感じさせた。また日本は現代化の中で己を見失った国ではない。特にホストファミリーの上野夫人が連れて行ってくれた江戸風鈴制作では、私は日本の伝統文化の継承度合に驚かされた。こうした点は中国が学ぶべきものだと思う。

それから私は、磯子火力発電所のクリーンコールテクノロジーは中国が必要としている技術だと思った。また聞いた話によると、私たちが日本にいたこの数日間、北京のスモッグはとてもひどかったらしい。と言うのも隣の山西省は中国の石炭の主要産地であり、大量の採掘によりひどく環境が汚染されているからである。同じ石炭による発電なのに、なぜ中国は環境に優しくできないのであろうか？

大学名： 中央財経大学
氏　名： 粟鳴飛

テーマ： 4.日中間の交流

今回の訪日活動に参加して、私は日本人に対して客好きで親切であるという印象を持った。同志社大学の学生と交流した際、彼らは私たちにとても親切にしてくれた。キャンパスを案内してくれた他、学園祭の出店では食べ物をご馳走してもらった。この他ホストファミリーも秋葉原や渋谷を案内してくれた他、彼らの家では盛大な歓迎を受け、さらに中国へ旅行に行きたいといった話が出るなど、同様にとても親切であった。こうしたことから私は、多くの日本人が中日両国の友好的な交流を願っているのだと感じた。

しかしながら、私もインターネット上で「日本人の中国人に対する友好度合が高くない」という情報を見たりする。しか

も現在、中日両国政府はその関係改善が待たれている。ここで私に、ある疑問が浮かぶ。私が交流している日本人が少なすぎるのだろうか？または日本人への全般的な理解ができていないのであろうか？

よくよく考えると、「日本人の中国人に対する友好度合が高くない」というのは、ある程度その理由があると思う。まず、ここ近年中国から日本への観光客数は増えているが、日本から中国への観光客数は芳しくない。次に、ただの旅行であれば双方が直接交流することは少ない。なぜなら中国人は旅行の場合、名勝地に行き、そしてショッピングをすることがほとんどだからである。また日本人の場合については詳しくはない。しかし中国人の側からすると、日本には来たが、日本人との交流や日本への理解に欠けている。この他、一般的な中国人の素養は高いとは言えないことと、中日両国は多くの面でライバル関係にあり、GDPが日本を超えたなど現在では中国が優勢にある分野も増えている。私はこれらの要素が、日本人が中国人に対して非友好的になる原因だと思う。そのため中日両国の民間交流にはまだまだ向上の余地が残されている。

いずれにしても、中国の発展に伴い、中日両国の各分野における交流はますます増えていく。そして中国人の素養も次第に向上し、私たちの今回の交流活動のような活動が今後も増えていき、日本にも同志社大学の学生や私のホストファミリーのような中日友好を願う人たちがいる。今後の民間の友好基盤は固く、私も中日両国の友好交流の役に立ちたいと思う。中日両国の発展に伴い、民間の友好交流はきっとますます増えていくと信じている。

大学名： 中央財経大学
氏　名： 高鵬崢

テーマ： 4.日中間の交流

中日交流は皆がよく話題にすることだと思う。一大学生である自分はこれについて多くを語ることはできないが、自分の感じたことから述べてみたいと思う。

大使夫人が仰っていたように、日本の学生はあまり中国に来たがらない。なぜなら空気は悪く、国民の民度は低く、さらには日本人を嫌っているからである。しかしながら、日本人は中国だけに来たがらないわけでなく、日本以外の国を見たりそこで生活したりすること自体にさほど興味がないという。もしも中日交流が両国の問題だとすれば、中国が一方的に日本に学び交流するだけでは不十分であることは明白である。そのため、いかに日本に中国への正しい認識を持ってもらい、中国を理解してもらうかが重要なテーマとなる。

中国の空気が良くないのは私も認めるが、それでもまだ多くの風光明媚な自然景観を楽しむ事ができる。中国国民の民度は高める必要があるが、それでも多くの人が中日友好のために貢献をしている。中国には抗日ドラマが確かに存在しているが、それでも毎年たくさんの交流団体が日本を訪れている。だからこそ、日本人が中国への認識のずれの影響で中国に来たがらないのであれば、なぜ私たちはそうした彼らの認識のずれを正そうとしないのか？相手にこちらに対しての誤解があり、こちらの家に来たがらないのであれば、なぜこちらは相手の家に行った時に可能な限りのこちらの善意を相手に感じさせようとしないのか？つまりは、私たちは日本を訪れ学ぶ際にも、その過程において日本の人々の私たちへのイメージを高めるための努力をしなければならないということである。

継続をする限り、変化とは少しずつ起きるものであると私は信じている。

学生たちの撮った写真

日本航空
タイヤ一本は、幾らでしょう？　1千万円です、ご名答

日本航空
機体の前で　整然と記念撮影

周恩来記念碑
代表が　由来を読み上げる、謹聴！

周恩来記念碑
日中友好の聖地にて記念撮影

金閣寺
金閣と池を背景に、はい一枚

金閣寺
日本の中学生に頼まれてサイン これも
また日中文化交流

オムロン京都太陽
会議室で会社概要の説明を受ける

オムロン京都太陽
創業者の写真の前で、ユーモアのある説明に、皆破顔一笑

同志社大学
日中学生間で熱い議論の応酬がありました

同志社大学
小雨も上がって　皆笑顔　充実した時間を過ごしました

新幹線
熱海に向かうひかり号の車中　皆気分高揚しています

熱海温泉
浴衣姿で一枚、これから温泉に入りましょう

電源開発磯子火力発電所
まずは、模型で全体像を把握

電源開発磯子火力発電所
遠くに富士山、眼下に青く澄んだ海　炭塵一つ無き環境対策に感動

法政大学
王敏教授から日中比較文化論を拝聴

法政大学
懇親会で、教授を囲んで、熱心に質問

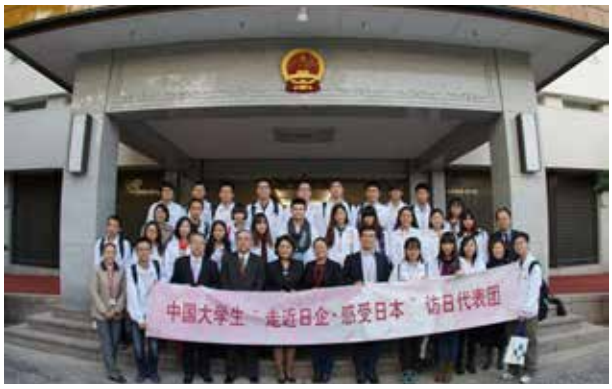
三井住友銀行
伊藤部長から中国語の説明を聞く

三井住友銀行
東館の斬新なディスプレイに見入る

日比谷松本楼
吉田専務の話に耳を傾ける

日比谷松本楼
孫文と梅屋庄吉の友情に思いを馳せる

中国大使館
大使夫人汪婉参事官の講話に聞き入る



中国大使館
正面玄関にて記念撮影

住友商事
入館前に　まず記念撮影

住友商事
貞川シニアアナリストから中国語の説明を聞く

ホテルニューオータニ
地下発電設備に驚く

ホテルニューオータニ
処理済厨房排水を利用した日本庭園を散策

ホームステイ

お父さんの作るお好み焼きは美味しかった

ホストファミリーと面会できて、日中経済協会の前で

さあ　皆で　いなりずしを作ろう

楽しい食事が済んで家族と団欒

皇居を背景に